

黒松

落葉松

樹皮

分布

適地

楡及漆

黒松は赤松と同じく二葉なれども其れに此すれば其葉剛く幹色は黒褐色にして剛勇の姿あり好んで海岸濕風の來る所に生じ赤松の枯るゝ所にも能く堪ふ。従て防風防砂防潮の用をなす。四國九州并に本州の海岸には至る所に之を見る。材質強硬踏氣頗る多く保存期永ければ橋梁土蓋土工用杭等に用ひらる。近來其立木に切目を入れて樹脂を流出せしめ之を採集して松香油を製す。落葉松は其邊材は白色心材は赤褐色にして赤松に似て之より上品なり其質耐久力に富み能く水濕に堪へ且つ工作を施し易きを以て家庭船具等製造等に使用せらる。殊に船艇用材として亞米利加のオレゴン・メインに代用せらる。又た鐵道枕木としては際にて亞米利加のオレゴン・メインに代用せらる。利用せらる。天然林は北緯三十五度半の富士山を南限とし北緯三十八度を其北境とし主として火山岩より成る本州中央の諸高山に存し富士淺間等に殊に多し。又た頗る石灰質の地を好む。松類中等に堪ふること最も強く又た克く乾燥地を好めば多く岸通の乾地に生じ陰濕の凹地には生ぜず。松類中成長の最も盛なるものなり。

楡及漆 漆汁が本邦特有の漆器の原料たるは一般の知る所。楡及漆の實よりは楡を産す。此楡に生楡及び白楡の別あり。織物及び紙類の綴引及び石鹼製造の原料として香港印度北米合衆國英佛の諸國へ輸出せらるゝもの年々三四十万圓本邦にては蠟燭製附々石鹼染料の原料として使用せらる。然るに此二者

竹

椰子

産地

用途

竹

椰子

の産出區域は本邦に於ては北緯三十六度を以て劃然區別せられ漆は主として北部に楡は南部に生産す。楡は九州諸縣本州の西部及び南岸地方を其主産地とし漆は信濃及び下野を第一の産地とし關東諸縣北陸地方及び奥羽地方を其主産地とす。中國にては岡山縣著し。(第六十圖)

竹 竹材は木材の有せざる特質を有するによりて特効を有す。即ち内部空虚外部圓形一種の長管をなし性質柔軟にして彈力に富み挽み易く又た縱に割りて細き線或は薄片となし得る等の特性を有するが故に普通木材の使用し能はざる所に能く利用せらる。又た竹器は輕便堅牢にして腐朽すること少く保存期永ければ其用途甚だ廣く茅屋の椽垣根竹籠竹筒釣竿弓矢箭杖桶の類竹行李蓆箆扇提燈等椅子等其用枚舉に遑あらず。殊に臺灣にありて居室に家具に食器に竹無くば一日も生活する能はずといふ。元來竹は東洋の名産にして暖帶地即ち熱帯の繁殖し得る所に最も完全なる發育をなすも種類によりては他の氣候にも能く生育するものあり。

椰子 熱帯住民の生活に至大の關係ある樹にして我國にては臺灣琉球及び小笠原島に多し。元は阿弗利加及び東印度地方の産なりしかども今日は熱帯地方到る所に移植せられたり。樹の高サ五丈乃至十丈に太サ三尺圓りに達す。年々数十個の人頭大の實を結び果肉は生食して滋養の効あり。乾晒しては石鹼蠟油等の原料となり果漿は飲むべく果殼は飯器を造るべく果皮の纖維は糸

計地方の生有を三小の芭蕉のの地も料能麥歩に有な又分多の志
 の方即すの倍四蕉を食地能にくの食地同はし二時をの於す。播異たを量實は異芭蕉
 の容は斯ら熱芭蕉播百四馬に料に芭蕉別れ充のばに四羅力にし養
 易なく熱地蕉力十、畧につ人をのどつ食、小段巴を大

となし、糸となし、織りて靴、拭若くは廊下等の敷物を製すべく、葉は屋根を葺き、糸を紡ぐべく、皮毛は繩となし、又た器具を作るべく、花梗を切りて得る汁は以て酒を醸すべく、幹は堅牢にして建築用に供し、又美麗なるを以て箱匣類を製するに適す。されば熱帯の住民は此樹によりて殆ど總ての生活資料を得べし。

芭蕉 芭蕉も暖帯及び熱帯地方の住民に對して必要な樹木なり。其種類一ならず、本邦普通に庭園に植うるものは花黄色にして實の食すべからざるものなれども、甘蕉又は香蕉と稱するものは其實食すべく、頗る美味なり。又た布蕉とて皮の纖維他の芭蕉より強きが故に琉球地方にて蕉布又は紙に製するものあり。甘蕉の實は酒を製し、尙ほ其酒よりは良好の醋若くは燒酎を製するを得。

以上は吾人の生活に卑近なる著しきものに過ぎず。若し尙ほ人生に關係ある凡ての樹木に至りては一々枚舉に遑あらざる所にして且つ本書の紙幅の許さざる所なれば、左に重なる用途によりて各種の樹木を列舉して其缺を補はんか。

- 一、船艦汽車等築造用樹木 杉、檜、榿、羅漢柏、落葉松、樺、黒松等。又た輸入木材にはチーク、紫檀、黒檀、オレゴン、パイン等。
- 一、家屋建築用樹木 杉、檜、榿、松、梅、樺、桂、落葉松、榎、樺、夾板松等。

殖す、民人の播
 といふべし。

志賀云、芭蕉の實より酒を醸造し、將た外、近年臺灣にては羊羹及びび飴を製するに至れり。

海藻と人生

第四節 海藻類

- 一、器具製造用 以上諸木の外、桐、水松、山毛榉、榿、樺等。
- 一、薪炭及び鐵道枕木用 栗、檜、榿、桂、山毛榉、唐松、松、檜、樺、ナナダモ、アカダモ、其他の雜木。
- 一、機寸ノ軸木用 白楊、ハコヤナギ等。
- 一、副産物を主とする樹木 樟、榿、漆、推等。

水産物の頗る多量なる領域が一見些細なるか如き藻苔類中に在るは吾人の輕視すべからざる所。單に近年支那等へ輸出する額の、みにても尙ほ昆布が百萬圓を超え、寒天が六七十萬圓に達するを觀れば、其重要國産の一に計ふべきを知る。

海藻類の吾人の生活に對して主要なるは陸生植物に含有せざる。若くは含有すとも極めて僅少なる特有物質を有して特殊の貢獻を爲すにあり。加之、海藻が物質を生産するに彼の陸生作物の如く耕耘、栽培等の多くの勞力と資本とを要するにあらずして、漁民が濫獲の弊をだに誠めば何時までも其生産額を減ずることなく、無限に一定生産額を維持し得るにあ

食用品としての
海藻

志賀云 昆布
は日本海に
露西亞に
日本種同
其の北と
北西の生
の岸及び
中海の一
の堅硬な
類の生育

若し夫れ生鮮の儘吾入の食膳に上ると共に、少許の貯藏手段を施すことにより、遠く海外の陸國に輸出するに適すると、其特有の包合物が化學的技術の進歩に應じて、諸種の貴重なる途に利用せられ、其需用は今尙ほ日々増加して、底止する所を知らざるが如きに至りては、以て將來多量の國産中に入るべきを得べし。海藻化學が益々進歩するあらば、彼の到る所の海岸に堆積し、而かも些の價値をも有せずして殆んど全く廢棄せらるる、海草中より幾多の富の産出せらるるに至るべきや必せり。

食用物産として最も早く人類に利用せられたるものを、昆布、石花菜、海苔、和布等となす。此等の者は或は乾製し、或は淹藏して之を貯藏し、又た輸送するを得べく、或は刻削し煉乾して殆んど原料品とは全く一變せる迄の製造品を得べし。

昆布 昆布は之を乾燥し、製造して長切元揃、細目、花折等の名稱を以て輸出せらるるのみならず、近來は或は砂糖液となし、或は刻ミ昆布、海苔、昆布、昆布茶等を製し、或は蒸煉して昆布羊羹となして輸出するに至れり。寒流の域内に生ずる植物なるが故に、其特産地たる北海道に於ても、更に千島海流及びカカラフト海

界するの外の、其最
も多量に生育し、其
が日本海、北西、北
の海岸及び中海の一
の堅硬な類の生育

流の流ふ所にあり、三陸地方の沿岸に其産出區域の延長するも、全く其内に
るなり。

石花菜 石花菜は寒天の原料にして、其は単純若くは海苔を混じて之を冬中に
煉り乾して製す。暖流の域内に生長するものなれば、最良品を産する伊豆の中
心として、東海道、南海道、九州等の南岸及び北海道の西岸地方に産す。然るに寒
天の製造地は此等の海岸地方にありずして、京阪地方及び長野縣等なり。

海藻類は、又た工業界に幾多の需用を有せり。種々の海藻は多量の粘膠質
を含有するが故に、糊料に供せらる。布海苔、佛ノ耳等、或は乾し、或は晒して
衣服織物に使用せらるるが如き、又た歐米の化學者間には更に大に工業
に利用せんと勉め、其中には稀硫酸を以て其粘膠質を煮て遂に、アセトン
(Gum)の一元質に變化せしむることを發見し、或は海藻を大氣に曝乾し、草
面に吹き出せる糖粉を採取して、マンナンと稱する一種の海糖を製す
るを發見せるものありと、其他海藻は寒天紙、苔藻紙等の製紙の原料とな
り、或は屋根葺料となり、藁となり、其根莖部の堅韌なる所は、或は洋刀柄を
製し、或は蓆のパイプとなる等、枚舉に遑あらず。近來北海道の土産として

呼菜に代用し
豚肉片と雜へし
て所謂「雜飯」
を調理するに
最も適へり。
昆布は支那の
開發と共に、
前途大の希
望を屬すべき
ものとす。

工藝用としての
海藻

沃度及び剝篤亞斯
沃度の本源

昆布の根株を以て造りたるパイプの如きは敢て珍しからざるに至れり、
されど海藻類の有望なる新用途は、藥品及び化學品の原料たるにあり、近
來往々北海道其他の沿岸地方に於て海藻灰が採取せられ、又た沃度製造
所の現出したるは廢物利用の現象として慶すべきことなり。此海藻灰中
には硫酸ポッター、硫酸ソーダ、コロイドポッター、沃度母、ブローム、及
び不純なる炭酸ソーダ等の貴重なる薬用品を含む。就中沃度及び剝篤亞
斯は近來其價格大に騰貴し、非常なる高價品となりて、是が爲に寫眞師に
大なる困難を與ふるのみならず、醫士をしても尙ほ使用に堪へざらしむ
るに至れるが如き、以て其趨勢を卜するに足る。然るに此貴重なる沃度を
海藻が如何にして産出するかを觀察すれば驚ろくべきものあり。今化學
上の實驗によるに澱粉を以てすれば凡そ三十萬分中に存する一分の沃
度を檢察するを得べし。然るに海水を蒸詰めて非常に其容積を減して後
澱粉を加ふるに毫も沃度の存在を證するの反應なしといふ。以て海水中
に存する沃度の量が非常に微少なること及び海藻が海水より吸收して

一斤沃度を産出するに少くも海水三十萬斤以上の分量を要することを
知るに足る。果して然らば假令無心なりと謂へ、彼等が人類の需用に供せ
んとする偉大なる勞力に驚歎せざるべけんや。一見些の利益なしと、遺棄
せられし多くの海藻類中より此非常に有益なる物質の得らるべきこと
右の如しとすれば、海藻類より最も廉價に沃度、剝篤亞斯及び其他の藥品
を採用することは、實に國家經濟に於て必要なるのみならず、實に彼等が
永き年月を以て産出して之を人間に貢獻せんとするが如き非常なる勞
力に報ゆるものと謂ふべし。

第五節 植物の人生に對する精神的 方面

植物の吾人に對する物質的方面は同時に心意的交渉の一半を説明する
ものなるが、植物は尙ほ深く吾人の心情に大なる關係を有するが如し、試
に山紫水明の樂園に慣れたる吾人の目を以て夫の平沙萬里人烟を絶つ
底の大陸を想像せんか、如何に其荒涼たるかを會得せん。春夏秋冬、斷えず

志賀云 瑞西の歴史は不羈の歴史を酷愛する民の歴史なり、西史の精粹は、蒼林高聳なる松中、成育せるシ、ウツ、ウリ、ウンテ、ルツァルデン、三州の民に存す。松の性情を感化し、所謂テ、(假成人物なりと雖も、當時の情勢として所謂テ、一流の人物とせしや、必然なり)松林の中より、身挺て、抗利の詩、近古三

五七二
特種の新風景を開展して吾人の單調平凡に對する倦厭を慰むるものは植物にあらずや、東西南北位置と地勢とを異にするに従ひ、美觀を變化せしめて吾人の旅情を慰する者も植物にあらずや、加之、山岳の莊麗なる、河湖の清冷なる、海岸の絶勝なる、庭園の風致を飾る、汚穢なる市街の單調を破る、一として植物の與らざるなし、されば旅行するものも、籠居するものも、憂ふるものも、悲むものも、失意のときも、得意の際も、等しく草木により、慰藉と歡樂とを得べし、夫の黄塵萬丈の裏に於ける終日の勤勞により、殆んど疲勞の極點に達して歸る貧民が微細なる窓際を益裁を友として、一杯の晚酌に其疲勞を一洗するが如きに至つては、植物が如何に廣く、總ての種類と階級とに影響するかを會得するを得ん、要するに植物は吾人の美情を興奮し、吾人の殺氣を緩和し、吾人の詩趣を澄醒し、以て吾人の心情を涵養するもの也、然るに植物と人生との此精神的交渉の機會は、文化の進むに従ひ、人口の増殖するに従ひ、生存競争の激烈なるに従つて、減少するもの、如く、而して是と共に彼等植物に對する戀愛の情は濃厚と

州の民人松林の中より、首と及して、羅馬法王の行を、僧侶の非と、獨り、瑞西人ののみならず、古のノルマン民族、今亦た、松林の下に、豪健の動物なせる性情を涵養せらる。

なるが如し、吾人は尙ほ少しく細觀するときは、多くの植物が、千態萬容を呈して、吾人に影響するを觀るべし、或は其形態によりて美を顯はすものあり、或は其構造の微妙によりて吾人を驚歎せしむるものあり、或は花によりて艶を競ふもの、(一)葉によりて麗を争ふ者、(二)果實を以て稍を飾るもの、(三)或は色によりて人目を樂ましめんとするもの、(四)或は芳香を放ちて顧客を誘はんとするもの、(五)或は其一者に專注するもの、(六)數者を兼帯するもの、(五)或は一株、獨りに吾人の籠を專擅せんとするもの、或は大群の同類親族若くは異族を翁合して、特種の風景を顯はすもの、(六)或は鶯、蝴蝶等の援助を籍りて、吾人の賞讃を博せんとするもの、(八)或は風、月、雲、雨、霜、露等と協合するによりて、特種の風致を呈するもの、(九)數へ來れば、造化の吾人に對する親切は、至れり盡せりと云ふべし、就中、花は最も吾人の心情を動かすもの、皆な植物が一年間の辛苦計營、以て吾人に寄與する所なり、試みに吾人に最も親密なるものについて、以上の例證となるべき些を擧げんか。

- (一) 牡丹
- (二) 松の緑
- (三) 桃の實
- (四) 紅梅
- (五) 紅葉
- (六) 菫香
- (七) 紅葉
- (八) 梅と露
- (九) 萩と露
- 萩と露
- 菫と露

咲きしより散りはつるまで見し程に花の下にて廿日へにけり。大政大臣
 常盤なる松の緑も春くれば今一しほの色まさりけり。源宇子
 橘は花にも實にも見つれどもいや時しく猶し見かほし。〔万葉集〕
 はしきやしの梅の初花ひるは雪よるは月とそ見えまかふ哉。〔後撰集〕
 我かやとの梅の初花ひるは雪よるは月とそ見えまかふ哉。〔後撰集〕
 昨日より今日は増される紅葉のあすの色をばみてやみなん。源顯仲
 浅茅生やあれたるやとのつほ萱たれ紫の色に染めけん。源顯仲
 色よりも香こそあはれとほゆれ誰袖ふれし宿の梅をも。〔古今集〕
 遠みとり野への霞はついでともほゆれ誰袖ふれし宿の梅をも。〔古今集〕
 まさむくの檜原の霞はついでともほゆれ誰袖ふれし宿の梅をも。〔古今集〕
 我かや人も見るらん櫻花あくこと知らぬ色にもあるかな。〔六帖〕
 幾千機ふれはか秋の山毎に風にあたる錦なるらん。〔六帖〕
 白露の色は一つをいかにして秋の木の葉をちりに染むらん。源敏行
 見渡せば柳櫻をこまかせて都そ春の錦なりける。〔万葉集〕
 梅の花咲きける岡に家居らほとほしくもあらぬ鶯の聲。〔万葉集〕
 萩の露玉にぬかんとこれにはけぬよし見ん人は枝なから見よ。〔古今集〕
 秋風の吹く上にたてる白菊は花かあらぬか浪のよするか。菅原
 はちす葉の濁りにしまぬ心もてなにかは露を玉とあさむく。僧正遍昭

蘇格蘭人は其の山毛櫨、佛蘭西人は其の落葉松、伊太利人は其の橄欖、牙利人は其の橄欖、其國土に生ずる植物に依りて其の物に特色あり、情の感化の少しとせず。

種類と文化
 志賀云、チグリス、エウフラト二河の流域は土地の肥沃に氣候も暖

第六節 植物と文化

る日本人の櫻花に於けるが如き是なり。
 植物か人生の心物兩方面に諸般の關係あるを知らば、その當然社會の文化に特種の勢力を有するものなるを知るを得べし、乾燥せる高原か遊牧人民に占領せられ低濕なる河谷が農業の發達する所となりて住民に定住生活をなさしめ文化の起發點となるも、畢竟其等の地質に適當したる植物の種類の影響に基くものなり、均しき平原にありても其繁茂する所の植物によりて住民は或は穀農となり、或は果農となり、或は其他の職業となるは吾人の尠く注意するによりて容易に觀察するを得べき所なり、果して然らば一地方に繁茂せる植物の種類の繁茂は其地方の原始的住民の生活の形式を決定し、其文化に特殊の發達をなさしむるものと云ふを得べく、又た一地方に最も適應したる植物の種類の繁茂は現時の文明國民の産業形式をも決定する重なり勢力となるものなりと云ふを得べし。
 植物の種類の文化に於ける右の關係は同時に其各種及び全株の分量が

和なれば、各種の植物、野生の動物、實に此處にも發見されたりと傳ふ。宜なり。アマールに、カドに、パ、ピロニアに、ア、シ、リ、ヤに、カルデヤに、太古の邦國は、興りたることに

五七六
文化の發達に特殊の關係を有するを推知せしむるに足るざれど吾人は植物の大部分が人生に有用なるの故を以て植物の分量の多寡を以て直ちに文化發達の程度を速断すべからず何となれば植物の稀疎なる地方に於けると同様に植物の非常に豊裕なる熱帯及び暖帯地方に於ても文明の發達を見る能はざることは吾人の少しく地圖を繙くとき容易に發見し得べき所なればなり蓋し植物の甚しく稀疎なる所は人類の衣食に必需の資料を供する能はざるが故に人類の精力は全く物質的の生活に消耗せられ爲に文化の發達をなす能はざるは吾人の容易に首肯し得べき所之に反して植物發生の過剩の地方は右の患のなき代はり一方に於ては有利有害の植物の雜然たる過繁が有益植物のみを栽培すべき農民の努力を碍げ殊に榛蔭鬱の地方は全く未開人民の農業上の試作を絶望せしむるが故に其文明に及ぼす影響は植物の稀疎なる地方と異なる所なしさりとて吾人は有用植物のみの分量の多少を以ても尙ほ文化の程度を速断すべからず何となれば其過剩不斷の衣食資料の供給は

適度と文化

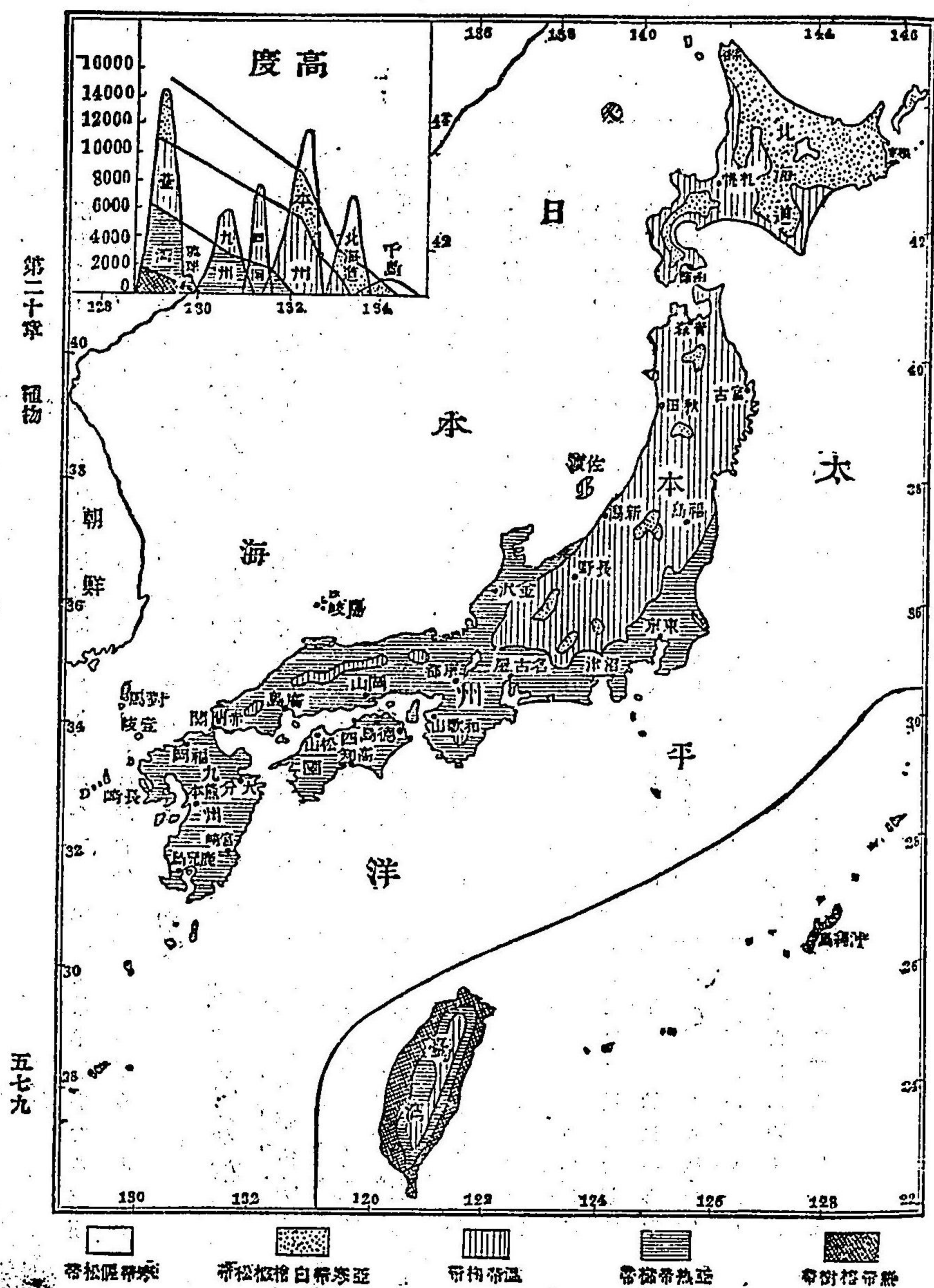
住民をして新しき欲望と努力とを壓抑し全く無爲安逸の生活に安んぜしむればなりさはれ植物分量は多寡共に兩極端にあらざる或る程度の分布は其種類の配置と同様に吾人の等閑に附すべからざる問題たるや明けし吾人は植物分量の多くとも住民の努力を壓抑するに足らず少くとも彼等の精力を消盡するに足らざる程度を以て最も文明の發達に適する所と斷するの眞理に遠からざるを信する者なり但し此程度は時勞の發達するに従ひて變化す即ち初代の文化は此の限界内に於ける多量なる地方に起り漸次に少量の地方に遷つる也。

節七節 陸生植物の分布

植物は各々其最も適する氣候と土質とに於て初めて完全なる發育をなすものなることは吾人の既に觀察せる所然るに地球上に於ては緯度を異にするに従ひ又た高度を異にするに従ひて種々の氣候を生じ従ひて又た其土質に相違を來すが故に地上各所に於て植物の種類と分量との異なることは當然の事たるを觀るべし植物殊に森林の分布の状態に就

緯度と植物

第十六圖
日本植物の分布



第二十章 植物

五七九

高度と植物

ては本邦にて幾多の學者によりて攻究せられたる所なるか、林學博士本田靜六氏によりて粗ぼ完成の域に達したるもの、如し。左は其要目なり。

- 一、熱帯林又榕樹帶、沖繩中央以南及び釜山、澎湖、澎湖島、小笠原等、同緯線二十一度以上の地を領す。
- 二、暖帯林又亞熱帯林或は櫛類帶、琉球本島以北四國、九州の全部及本州の南部、北緯三十五度以南の地にして全緯線十三度以上二十一度以下の地、但し海岸に沿ふては本帯は北緯三十七度半に至る。
- 三、温帯林又枹帶、本帯は前帯以北の本州全部及北海道過半の西南部、即ち全緯線六度以上十三度以下の地を領す。
- 四、寒帯林又は白松樅松帶、本帯は北海道の北東部、全緯線六度以下の地を領す。

氣候は高度により異なるが故に、熱帯地方より寒帯地方に至ると同様の分布は、山の麓より頂上に達する迄の間に於て顯はるることは第九章に於て少しく觀察せる所なり。(第十三圖參照)

富士山に於ては馬返以上より森林帯に入り、初は落葉闊葉樹林にして、尙ほ上れば針葉樹となり、二三合目に入れば樹木漸く稀疎となり、之に代はるものは

五七八

灌木帯にして、更に上れば草本帯となり、七八合目に至れば最早矮小なる草類の點々岩石の間に叢生するのみ更に上れば地衣類の岩石に生ずるのみ、愈々頂上に近ければ最早全く植物の生ぜざるに至ると云ふ。

第八節 植物の土質及地勢に對する分布

植物は氣候帶によりて其分布を異にするのみならず同一の氣候帶中にありても其土質により多少其種類を異にすることは吾人の少しく野外を通過するによりて容易に注意せらるべき所なり。砂原・草原・藪叢地・樹林地・開拓地等の名稱の一般に通用せらるるは是れ植物の土質地勢等に基

く此分布を表はすものなり。
(一)砂原 地殼の表層なる土砂の露出せる所に於て植物の全く缺如するか又は甚だ乏しき地なり。海湖及び河の沿岸の狭き平地は一部に此部に屬し而して殆んど無用の地として放棄せらるる所なり。思ふに全國七千五百餘里の海岸中此種に屬するものは多からん中には黒松・赤松等乾燥地を嫌はざる植物を移植して之を他の種類の地に變じたるものありんば尙ほ甚だ多からん。蓋し乾燥急速の變化をなして植物の生長に堪へざるを以てなり。此種に屬すべきものにして粘土質にして地盤の稍堅きものには禿土原等の名稱あり。又た火

草原

藪叢地

樹林地

開拓地

山の半腹以上、罕には麓に於て其噴出灰によりて成立つものあり。大陸の中部にある沙漠は即ち砂原の廣大なるものなり。

(二)草原 一面に草本及び禾本類の生長する地にして乾燥に失するが地盤の堅きに過ぐるが若くは濕潤に過ぐるかにより樹木の生育する能はざる所なり。其卑濕に過ぐるものに野地の稱あり。亞米利加・プレーリー・パンパス・露西亞のステップ等は即ち草原の廣大なるものなり。

(三)藪叢地 灌木及び倭小なる喬木の生長地を云ふ。土地の乾燥に過ぐるか堅きに過ぐるか若くは山火事の爲めに樹木地の火災を蒙りて未だ回復せざるかによつて生ずるものなり。北極地方及び高山の樹林限界地附近にも此種の密生する所ありと。

(四)樹林地 喬木生長の地にして吾人に薪炭材・建築材・其他の器具・造原料を供給し又た水源を涵養する頗る人生に關係する所なり。樹木の種類によりて常緑・落葉・針葉・樹林及び針葉樹林等の別あり。又た樹木繁殖の根源によつて天然林・人工林の別あり。乾燥宜しきを得て植物の生長に適する地にあれども人烟の稀疎なる地方を除くの外は概れ地勢の傾斜二十度以上の地であり。

(五)開拓地 人類の勞力によりて天然固有の状態を變じ種々の作物を栽培する土地にして此中には水田あり、畠あり、牧場あり、宅地あり、道路等あり。

以上の區別及び順序は又た有用植物の疎密の程度をも顯すものなり。即ち開拓地は有用植物の生長に適せる所謂肥沃の土地にして、多くは嘗て鬱蒼たる森林の繁茂したる所にして且つ密生に適したる所樹林地之れに亞ぎ、以下順序に従つて疎となり、沙漠地に至つて絶滅するなり。

第九節 海藻類の分布

我邦沿海の海藻の分布に關して、理學博士岡村金太郎氏は左の數區を劃したり、是れ海流との關係のよく表はるゝものゝ如し。

甲、大平洋岸地方

第一區 金華山以北、千島の占守島まで

第一 占守より襟裳岬の附近 襟裳岬附近の境界は未だ判然せず、或は根室か室蘭か將た基山に其境界點の存するは斗り難きも、兎に角此地方に一の分布の境界點あることは疑ふべくもあらず而して之より北方は全く寒帯の海藻を以て占領せらる。
第二 襟裳岬附近以南、金華山以北 此間には寒帯と温帯との合の子帯即ち同帯あり。

第二區

金華山以南、日向國大島の南鞍掛岬迄

是れ日本の温帯部にして

北方より宮崎縣の沿岸を油津に來れば俄かに琉球地方に普通に見る所のものを見る。蓋し黒潮の鞍掛岬端を突き來るか爲めなり。而して之より以北には土佐、紀伊、伊豆、相模、安房等の突出部の南端に多少琉球所産の物あるも、次第に減少し、且つ其等の内側即ち陸岸に近付くに従つて温帯地方の産物を増加せり。此間は又犬吠岬によりて二區に小分せらる。

第三區

大島以南、琉球小笠原地方

是れ日本に於ける熱帯部なり。

乙、日本海沿岸地方

九州の四海岸、松崎か若くは野間岬の近所に温帯と熱帯との境界點ありて、之より以北は宗谷岬までの長沿岸の海藻分布は殆んど同様にして、彼の太平洋を五區に分つか如き比にあらず、然とも宗谷岬には釧路海峡より來る海流ありて少許の寒流、北海道の西岸を洗ふて入耶潟附近に消ゆるが故、北海道と本州とは多少の差異なきにあらず、依て津輕海峡を以て更に二分するを得べし。然するときは津輕海峡以南の海藻の性質は全く金華山以南、日向、大島間のものに等しく、津輕海峡以北のものは金華山以北のものと等し、但し北海道の東海岸ほど寒帯物の少なきのみ。

第十節 植物分布の原因

植物が以上の如き分布を來せし所以は、之を要するに植物の増殖せんとする力従つて其種類の生殖區域を膨脹せんとする力と、之れに反對して此膨脹の抑壓せんとする自然力との消長によつて生ずるなり。一個の植物が其生活を終るに當りて莫大なる子孫を残して去ることは吾人日常見る所、フリー氏の概計によれば、一莖の菌は一千萬顆の胞子を生み出すと、此等多數の種子を生育せしむる地積を得しめんか爲に諸種の手段を講じて互に相競争する状態あるは驚歎すべきものなり。其大要左の如し。

- 一、生物の自働作用によりて膨脹するもの。
- 二、風に乗じて運搬せらるるもの。
- 三、河海に流送せらるるもの。
- 四、動物に運ばるるもの。
- 五、人類の有意及無意の移植。

斯の如くして其繁殖區域を擴張せんとすれども、其間には山嶽、海洋等の之を障碍するものあるべく、或は氣候其他の自然力之が生存を奪ふものあるべく、或は其等の抑壓に耐ふとも、他に更に多く其地方の風土に適當したる植物あるが故に、其との競争の爲めに滅絶するもあるべく、或は

作物の生育限界及び適温

壯大なる地殼の變動によりて特殊の發育をなしたるものあるべく、斯かる複雑なる影響によりて今日の分布をなしたるものなり。斯く植物の分布には種々の複雑なる原因あれど、就中氣候の影響を最も重要なものとすべきは前節に於ける分布か殆んど氣候の變化と粗ぼ一致するを見ても容易に首肯し得べき所なり。是に於てか植物、就中吾人の生活に最要なる作物と氣候との關係を觀るに、植物の發芽には一定の溫度を要す、大抵の植物は攝氏零度以下にて發芽するものなく、又た四十六度以上に耐ゆるものあらず。此溫度以外に於ては或は發芽を妨げ、或は生機を失ふに至る。而して其高低の限界内に於ては溫度漸く増加すれば芽發漸く進み、或程度に達すれば生長尤も速かなるに至る。之を最適温度と云ふ。此高低の限界及び恰好度は植物の種類によりて異なり、又た同一種類にしても水分の多少に依りて異なる。今其主要なるものを擧ぐれば左の如し。

小麥	最低溫度	最適溫度	最高溫度
第二十草 植物	三一四	二五	三〇—三二

發育適温

栽培限界

之を要するに最低限は一度乃至十四五度の間にあり、最高限は三十度乃至四十四五度の間、最適温度二十度乃至三十五度にあり、佛國の學者プサンゴール氏の實驗の成績によれば諸種の作物が發育に適當なる温度は左の如し。

大豆	三十一度・五	二〇	二八・三〇
稻	一〇・一・二	三〇・一・三二	三六・一・三八
玉蜀黍	八・一・〇	三二・一・三五	四〇・一・四四
豌豆	一・一・二	三〇	三五
蠶豆	三・一・四	二五	三〇
油菜	二・一・三	四〇	四〇
烟草	一・三・一・四	二八	三五

稻 二十三日九—二十七度八 藍 十七度八—二十七度八
 大豆 二十五度—二十三度三 棉 十九度四—二十七度八
 玉蜀黍 二十一度七—二十七度八 林檎 十五度—二十二度二

但し之れ適温を示したるものにして此温度以外に於ては只だ完全なる發育をなさずとのみ、又た農作物の栽培限界に就きシブレル氏の研究の結果左の如しと云ふ。

作物の氣候上の分類

- 熱帶的產物
- 暖帶的產物
- 溫帶的產物
- 海岸的產物
- 内陸的產物

小豆 北緯六十四度四〇 小麥 七十度
 大豆 六十四度四一 亞麻 七十度三
 大麻 六十七度五六 馬鈴薯 七十一度一七
 燕麥 六十九度二八 ライ麥 六十九度—六十九度三〇

尙ほ我邦に於ける普通の作物を氣候の關係により分類すれば左の如し

- 一、高温を要する者、甘蔗、甘藷、棉、稻、粟、蔬菜類、無花果、柑橘類、
- 二、中温を要する者、茶、桑、楮、胡椒、烟草、蔬菜類、
- 三、低温に堪ふる者、麥類、豆類、黍、稷、粟、玉蜀黍、馬鈴薯、甜菜、大麻、亞麻、蕎麥、藍、牧草、林檎、葡萄、
- 四、多量の濕氣を要する者、稻、甘蔗、茶、柑橘類、根菜類、
- 五、少量の濕氣にて可なるもの、棉、粟、稗、麥、蕎麥、玉蜀黍、馬鈴薯、烟草、萱草類、
- 六、風害を受け易きもの、烟草、果類、禾穀類の多數、

參考要書 一、▲フエスカール氏「日本地産論」▲本田林學博士「森林學」▲全氏「日本植物地理に就て」(地學雜誌第一二二卷)▲全氏「造林學」▲全氏「林產物に就て」▲シモンズ氏「海產論」▲横山理學博士「地文學教科書」第六章▲

るのみならず、實に能く趣味を解して、食したるなり。アッシリヤ人の如き、將た羅馬人の如きは、宴會の如きは、以て知るべきものなり。然るに、國の食料の趣味を解せず、調理法を解せず、要するに個人は、饅頭、食料、唯だ高價なる食品を盤上に盛り、に難し、然るに過ぎず。然れば、希臘にては、ホーメル

の詩編以後、何れも食品を讚美し、愛賞し、其美味を多しと雖も、アッシリヤ、羅馬にては、唯だ大宴會の記録あるのみにして、其の食品に關する詩文等、世に傳はらざるもの自から其故ありといふべし。加之、希臘人は、食品の趣味を解し、其の食料は、常に其の氣味、所となり、故に、親戚、家、舊團、樂として、食

食 類 ○モウラ等
有 類 ○カンガルー等
穴 類 カモノハシ等

數個を同時に與へ、時として全部を供するものあり。

毛皮 獸類の殆んど全部は毛皮を有せざるものなし、是れ各々其自身の身体を保護せんが爲に遺化より給與せられたるもの、其夏季に至れば脱落して鬃粗となり、冬季に至れば密生して濃厚となり、以て天然氣候の變化に適應するは自然の妙用と云ふべし。

獸類の氣候に對する唯一の保護器械たる毛皮は、嘗て原始時代に於ては等しく毛皮を有したりしかども、次第に進化せるより其毛を輕減して、現今の身体となれる人類に對して頗る有用なるものなり、即ち第一毛皮は吾人の体温を保護するに於て最も適當なり、されば人類の祖先が第一着の衣服は實に獸類より借り來りたる天然のまゝの毛皮なりしなり、哺乳動物中、吾人に毛皮を與へざるものは唯だ鯨の一族あるのみ、而して其最も多額を生ずるものを食肉類とす、齧齒類之に亞く、其他の種類中にも往々高額の毛皮を供するものなきにあらず、陸棲食肉類、即ち所謂猛獸の常に弱小なる獸類を捕へて食する獅子、虎、豹、狼、狐、熊、貂、鼠、鼯鼠、水獺等の毛皮

は、或は貴族に、或は一般に衣服の料として、將た敷物として使用せらるる水棲食肉類は、我が邦の水産業に、大影響を有するものにして、其重なるものを臘虎、海豹、海馬、海驢、臘獸等とす

臘獸 犬の如き醜き海獸なれども柔軟なる毛皮と美味にして且つ滋養の効ある肉とを供するにによりて貴重せらる。其毛皮は之に染色を施し、爲臘虎として歐米の富貴社會に稱揚せらる。然るに其製術たるや、未だ秘密に屬し、世界に於て唯一ツ倫敦にあるのみ。故に世界の臘獸は一先づ倫敦に集る。其額年々大凡十二萬枚、而して其價一枚にて三十五圓許なりといふ。過半は北太平洋の産出にかゝり、北太平洋中に於ても今日特に著名なる生育地は左の如し。

- 一、米領アリゾナ列島(ピリヤン)海中、北緯約五十七度西經約百七十度に在り。
 - 二、露領コンマンンドルスキー群島(堪察半島の東岸を距る約百海里、北緯五十五度東經百六十七度にあり)。
 - 三、露領ローベン島(樺太東岸の中央忍耐岬の南方にあり)。
- 我邦近海に游泳し來るものは、即ち此コンマンンドルスキー群島のものなり。其游泳區域たるや我が房州の南端の正南、八丈島沖を其南端とし、之より其根據地迄とす。南端に來るは毎年二月にして之より漸次北上して金華山沖、津輕海

品を批評し、愉快なる談話を發し興味津々として家々をめぐり、又た智識を交換するの基となり、要するに希望の文は食卓の邊より發するもの殊に多しとす。

臘虎

臘虎

峽の東口沖、根室半島の近海を経て七月に至りて根室地に歸る。六月中旬より下旬にかけて北海道厚岸の沿岸十哩乃至三十五哩の沖を過ぎ、尙ほ北上して根室近海に來り、之より速かに北上の速力を加へて、狼獲の暇あらざらむ。是れ七月は彼等の交尾期なればなり。斯くて六月末より七月の半へ掛けて陸上をなす。即ち其交尾をなすにて其間は雌雄相携へて島上に群遊するなり。頓て節は移り行き、北海波漸く寒なるや、又た南に移つる。蓋し常に攝氏四度乃至五度の水温を追ふもの、如し。故に狼獲の時期は之を二月より六月までとし、八丈島沖より根室近海までとなす。斯の如く交尾期、游泳時期及び游泳區域一定し、群居の性質を有するが上、尙ほ夜間食餌をあさるが爲に晝間に於ての視力の鈍なるとは是れ人間狼獲に便益ある所然れとも之と同時に其群居するや、恰かも軍隊に於けるが如く哨兵を置くこと、指揮者の命令に従つて動作すること、及び嗅覺の非常に鋭敏にして風上ならば數里外の敵を嗅ぎ附くるとは、彼等の保護機關にして人類の狼獲に苦心を要する所なり。(第六十九圖)

臘虎

海豹

柔皮

なく、斯えず人跡なき嶋嶼の附近に棲息し、多くは海中にありて夜間嶋嶼に來るのみ。其棲息場は北太平洋の寒流の域内に限られたり。視聽の感覺極めて鋭敏に、動作は陸上にては遲鈍なれども海中に入りては頗る機敏にして常に頭部及び腹部の一端を水面に現はして泳ぐが故に遠くより認め得べきも一度人影を望み若くは砲聲を聞くときは忽ち水底に潜み時々波間に出没して神合遙かに逃れ去るが故に之が捕獲に大なる熟練を要すといふ。

海豹 密生したる柔毛に斑紋ある頗る美麗なる毛皮を有す。グリーンランドの土人及びエスキモー人は之を以て常服となし、且つ其肉を食し、脂肪を燈用となし、又た脂は索となして用ふといふ。亦た寒流域内の棲息動物たり。

柔皮 獸類の毛皮中には鞣されて柔皮となり、實用上に貴重なるもの少からず。人類の初代に於ては單に生皮を乾燥したるのみにて直ちに着用せしならんが、斯かる天然の状態に於ては着用不便に且つ不快なること、到底少しく發達したる人間の満足を得しむるに足らず。此に於てか製革の術起り、改良に改良を加へ、以て吾人が日常用ふる靴、衣服、帽子、其他百般器具の原料となるに至れり。則ち之を天然粗皮に比すれば彈性を有する強靱にして持久性ある、水を透浸せしめざる等、幾多の點に於て著しく

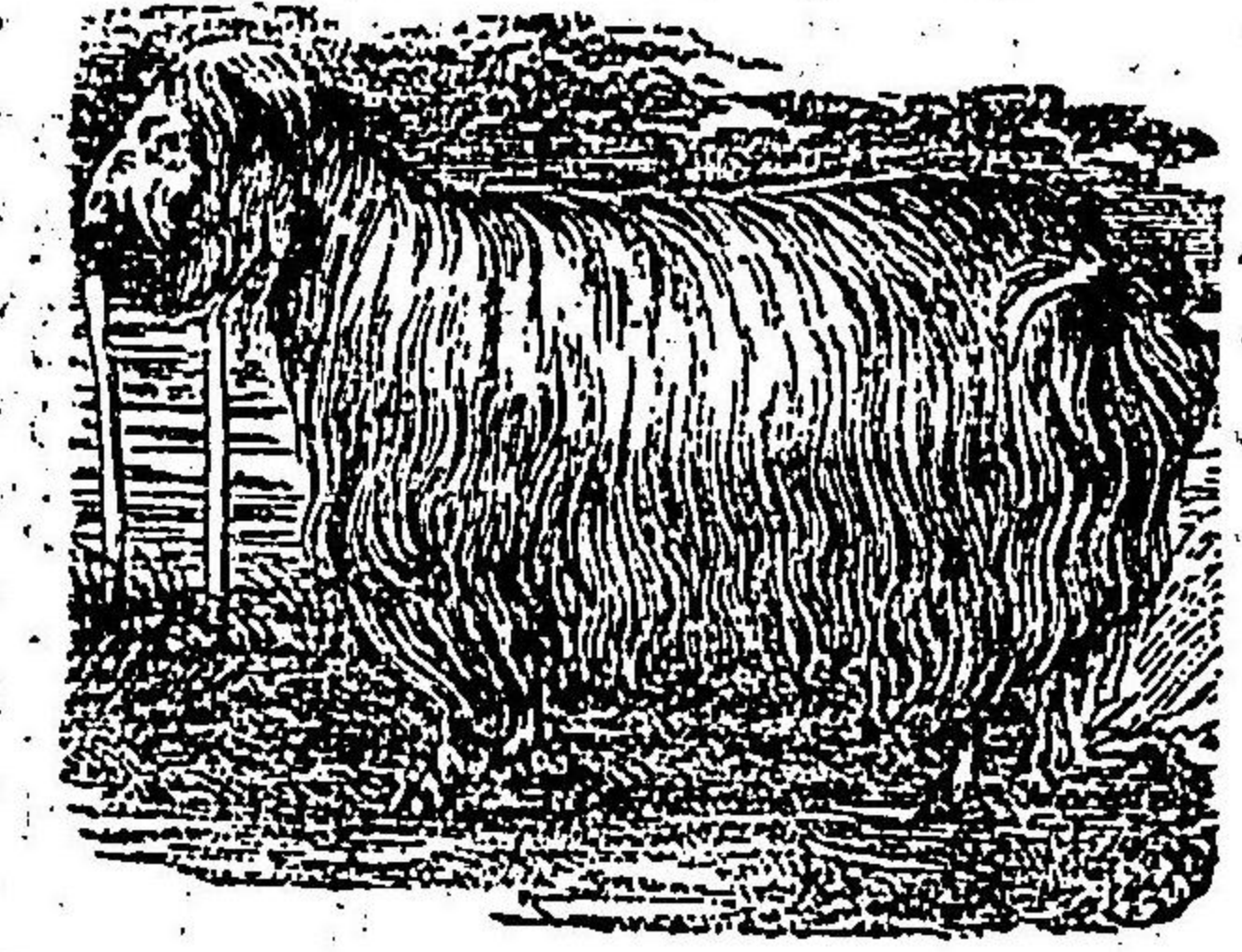
羊 絨毛

原皮と其性質を變化するに至れり、其最も實用に且つ、用ひらるゝものは馬、牛、羊、象等の皮なり、牡牛皮は靴底又は馬具に製せられ、其柔軟なる部は靴の上部に用ひられ、牝牛皮は硫化鐵を以て着色し、長靴の上部に製せらる、馬皮は重に婦人靴に、綿羊、山羊の皮は手袋に製造せらる、象皮が靴底に將た製造機械所の最も強力を要する帶紐に重用せらるゝは一般に知る所、海豹皮は又た高貴なる長靴、衣服、函粧飾品を製するに使用せらる、豚皮の如きは脂肪多きに因りて鞣すこと能はずと雖ども猶ほ且つ馬具の一部等の粗皮にて足る所に用ひらる。

絨毛 人間に利用せらるゝ毛皮は哺乳動物中に殆んど之を有せざるものなきは前陳の如くなるが、就中最も有用にして且つ高貴なる絨毛を産するものは綿羊及び山羊なり、現今世界に於ける羊毛の最も多量なる産地は濠洲及び南亞米利加なり、而かも世界中にて最上等の絨毛はサキソニ産に及ぶものなしといふ。

羊 羊の如く、風土に感染し易き者は他の家畜に見ざる所、されば若し一地方

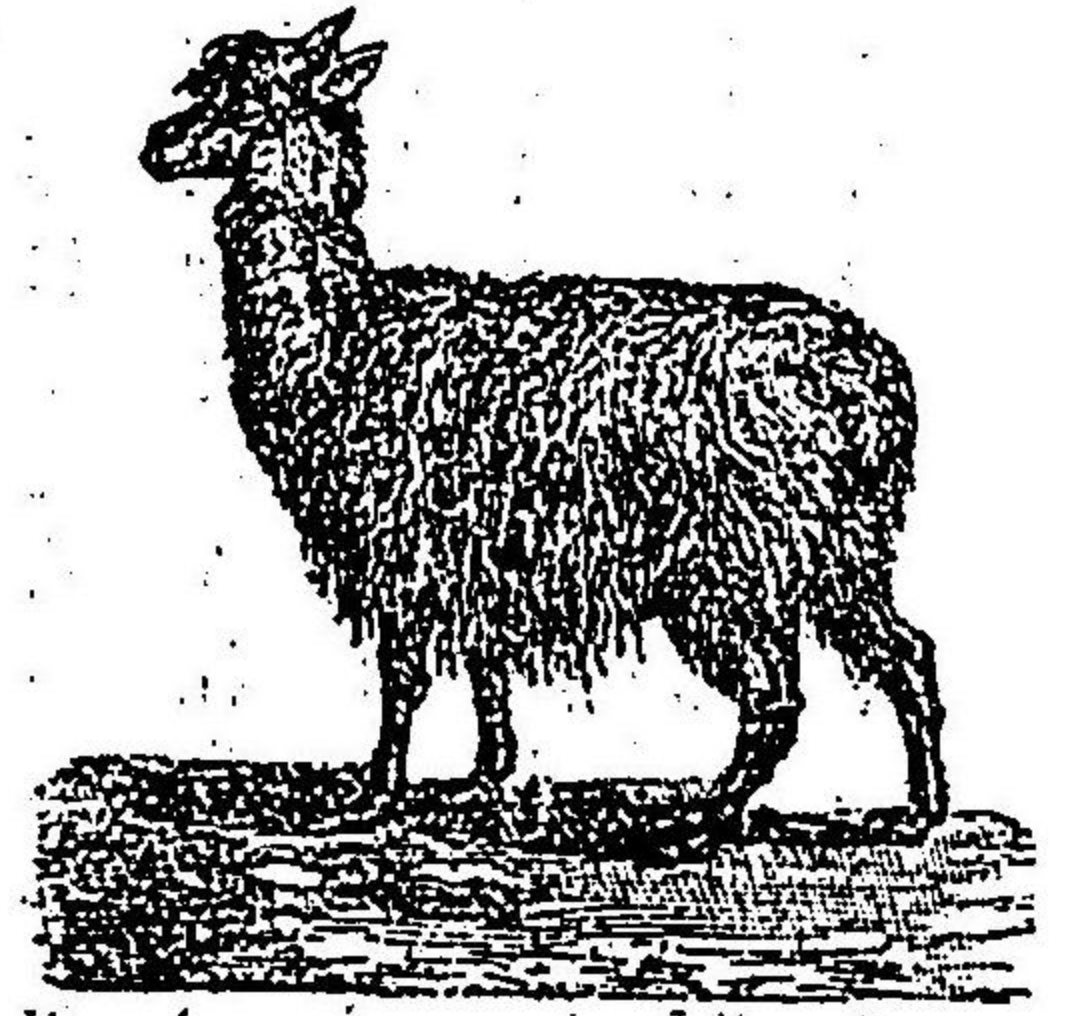
山羊
第六十二圖上
カシミア山羊
第六十三圖下
アルパカ



其他 駱駝、ツマ、アルパカ、ウナ、キヌナ等、亦た有用なる絨毛を産し、中には羊毛に

り他の地方に移すときは二三代の間に著しく其模様を變化す。従つて毛質の如きも其風土に依て差異を生ずること種類の異なるに譲らず、斯くて土産の羊は各々固有の特性を有するに至る、乾燥なる高地に適し、若し低濕の地に移すときは其多量の草により一時は頗る發達するも、總て其爲めに其蹄軟化し、壞裂して内部露出し、其に塵芥の附くにより蹄瘡を發すること多く、若し又た群居其數を過ぐるときは下痢病を起す、是れ内陸の高原に特産する所以なり。

山羊 は多量の絨毛を産せずと雖も、其毛よりは往々綿羊の及ばざる高貴なる織物が製せらる、所謂カシミア用掛の如きは即ち其一にして印度のカシミア山羊の美麗なる絨毛より製せらるゝなり。



四散するものあり。就中アルパカの毛最も重要なり。

以上の絨毛の外に獸類の毛は種々の用途を有せり。馬尾及び馬鬣は其重要品の一にして、篩刷毛に作られ、或は丈夫なる馬毛布に製せらるることあり。馬毛の其他の品に至りては、椅子、坐布團等の填充物となり、牡牛、牝牛、駱駝等の毛も亦た種々の目的に使用せらる。即ち或は氈製に用ひられ、或は蒸氣機關の筒又は釜を包むに用ひられ、又た能く濕氣を防ぐが故に、多濕の壁若くは屋根を張るに、或は廊下、船床等の敷物に製せらる。鹿の毛及び兎狸等の毛は東洋人の毛筆に製造せられ、殊に吾人の日常缺くべからざるものとして使用せらるゝ所なり。

獸骨

蠟燭及石鹼の原料として

肥料として

獸骨の化學的成份は一般に有機質の四十%、磷酸石灰の五十%、炭酸石灰の八%、クロール石灰一%及び其他の鹽類の一%より成れり。其中の有機質中には膠質と脂肪とを含む。此等の成份を以てなれる獸骨は種々の目的に利用せらる。即ち脂肪は蠟燭、石鹼の製造に、磷酸石灰は肥料として、殊に吾人の常食とせる稻に最も有効なる肥料として用ひらる。磷酸石灰

マツチの原料として

細工品として

骨粉

角

は又た燐素、酸素及び石灰より成れるが故に、化學者は之より容易に燐を得、其れを以て現今の社會に最も擴大なる需用あるマツチ製造の原料となせり。

蓋しマツチは燐素に鹽化鎂、亞斯若くは硝酸鎂、亞斯を以て結合せしめ、之に少許の硫酸を加へて之を煉りて木片に塗抹して製したるものなればなり。

獸骨は分解して種々に應用せらるゝのみならず、其天然状態の儘に於て、日常品の製作に、擴大なる用途を有せり。小刀ノ柄、鈕子、櫛、小匣、傘ノ柄、肉叉彫刻品等は、其著しきもの。就中小刀ノ柄及び鈕子は現今の社會に最も廣大なる需用あり、而して以上の製作より生したる骨粉及び骨屑は直ちに分解して前述の目的に使用せらる。

角蹄及牙、細工物として、獸骨と同様の目的に使用せられ、而かも更らに上等の品に製作せらる。此等のものは獸類の生存上必要缺くべからざる武器にして従つて堅硬なる性質を有すればなり。角の最も普通にして需用多き製作品は櫛にして、洋傘ノ柄、小刀ノ柄、鈕子、コップ等も亦た之れより製せらる。眼鏡師の用ふるものも少からず、角は又た染料内に於て煮ると

蹄

牙

六〇〇

きは容易に着色せらるゝが故に籠甲の模造品として使用せらる角の最も人間に利用せらるゝを牡牛、水牛、犀、羊、山羊及び鹿となす鹿の角が彫刻品とし小細工物とし將た飾物として貴重なるゝは一般の知る所犀角は強靱にして弾性に富めるより鞭或は杖に製せられ又た一種の解熱劑として醫藥に貴重なるゝとも亦た一般の知る所なり蹄は角に比すれば一般に其質重く且つ細工に困難にして外觀亦た頗る劣れども亦た能く角の代用品として鈕子、櫛、其他の小細工物に製せらる而して其廢物は剝篤亞斯の製造に或は肥料に用ひらる有蹄類の各種の者は凡て此等の目的に用ひられ殊に家畜のに於て最も重要なり。

象牙、角、海豹等の牙は其質堅緻にして美麗なるを以て細工物として角と同様に利用せられ而かも遙かに優等の品として賞玩せらる就中象牙は古來より重に彫刻、細工物として使用せられたるは一般の知る所なり以上列舉せる諸種の目的に應用せらるゝが故に角、牙及び蹄の印度支那其他の諸國より本邦に輸入せらるゝもの年々其額を増す就中象牙は其重

筋肉

乳

脂肪

なるものにして近年十餘万圓の價に達せり然るに本邦より海外に輸出するは少許の鹿角あるのみ。

筋肉 陸棲食肉獸の肉は之を食用として其味宜しからざれども有要なる家畜を含める有蹄類、水棲食肉類及び鯨類に至りては悉く佳味にして且つ滋養に富める食肉を人間に供す罐詰となして原産地より弘く海外の食肉國に輸送せられ得るのみならず近來牛羊の如きは人造氷又は人造冷氣等の手段によりて生鮮のまま米國より歐洲各國に多量の供給をなす牛羊等の乳は又た最良の滋養品として鮮乳及び製乳の需用時勢の進歩と共に益々増加す母乳に缺乏せる本邦の嬰兒が直ちに北米合衆國及び瑞西製のミルクに養はるゝは蓋し尠少にあらざるべし。

脂肪 も亦た筋肉と等しく肉食人民の食膳に缺く可らざるのみならず種々の製造品の原料として弘く需用せられ或は諸機械運轉に缺くべからざるものとし益々有用となる石鹼及び蠟燭は之を需用する製造品の最も重なるもの也吾人日用の石鹼の原料には魚類のものあり植物質の

形状
産地

靈猫

熊膽

獸力

にして牡鹿の腹部生殖器の前方にある一腺、即ち臭腺より分泌する蜂蜜の如きものを乾燥して所謂麝香となす。鹿に似て稍々小さく、黒色にして角を有せず。支那、四蔵、東京、四比利亞等、亞細亞大陸内部の幽遠なる山中に棲む。四蔵地方の者を最良とすれば、四比利亞麝香の如きは一旦支那に送られて混和し、四蔵産として輸出すといふ。

靈猫 亦た激性の芳香劑を産す。其を直接には嗅ぐに堪へざれど、極少量を油、飲料等に混ざれば非常に清香を添ふ。鼯鼠に類し、亞細亞、阿弗利加の内部に産す。熊膽 芳香劑と類似して吾人に關係あるものを熊ノ膽とす。黒色の甚しき苦味物にして健胃劑として又た鎮痛藥として古來一般に賞用せられし所。

獸力 も亦た人生に對して重要なものなり。獸類は皆に其身体を組成する物質の分解により人類生活に直接に効益を與ふるのみならず、彼等の或者は或は人類の從順なる奴隸となり、或は勤勉なる役夫となり、忠實なる婢僕となり、親愛なる伴侶となり、重垂貨物の運搬具となり、迅速なる交通機關となり、一旦有事の日に當りては有力なる戰鬪軍の援勢となる。此の如くして彼等は其特有の精力を以てのみならず、僅に發展の萌芽を示す。其智力を以ても人類の生活に資し、社會の發達に貢獻す。想うて此に

家畜

馬

至れば吾人は此等有情の獸類に對して萬斛の同情を寄すべきの至當なるを感せずんばならず。一ノ谷の役、畠山重忠が其忠實なる愛馬を負ひて、颯越の險を下りきといふ。日本武士本來の優美なる心情は吾人の忘るべからざる所なり。勞力を以て人類を補益する獸類は其從順なる天性に基くと雖も、其是に至る迄には長年月の人類の祖先の忍耐なる訓練に俟たざる能はず。斯くて家畜と稱し、先代の遺産として吾人に殘したるものなり。

馬 家畜中世界に於て最も且つ最も疾に飼養せられたるものは馬なるべし。馬は其運動の迅速疾急なると、其性質の從順にして敏捷なると、其背骨の以て貨物の積載するに便なる等は、蓋し最も疾く人類の伴侶となりし所以。斯くて彼等は世界の至る所に或は乗用とし、運送用とし、將た耕作用として使用せらる。背の上に貨物を負はしむる代りに車を牽かしむるに至りて更に馬力の効用を大ならしめたり。近來汽車の盛行によりて馬の力の有用を減じたる觀ありと雖も、實は然らず。汽車が安壯なる装置と多大の資本とを要するは、大都會若くは人口の稠密なる地方を連絡するの機關たり得れども、人口の稀少なる僻陬の地方に直接に其勢力を及ぼすは前途尙ほ遙遠なりとせざるべからず。

駱駝 牛

馬は此地方に對して永く使くべからざる要用機關たり加之馬ハかの利用の最も緊切なるは迅速に鐵道を敷設する能はざる事情ある戦時なり自轉車は未だ丘陵田畠に利用する能はず陸戰に於ては悉く將來も馬力に據らざるを得るの期なかるべしされば馬が實に兵員と共に軍隊の戰力として主要なる部分たるは戰術が變遷すとも永く減せざる所なるべし軍馬飼養の等閑に附すべからざる所以なり之を要するに馬の筋力は汽車と並行して依然陸上交通運輸の機關として平時に於ては一國生産の一要原動力となり戰時に於ては戰鬪力の主要なる一要素たり馬の吾人に對する功績や偉大なりと云ふべし

牛 敏速疾急儀容整然王侯將帥に乘せらるゝとは馬に及ばず而かも巨石大材を曳き時嘔險難を踰え十百里を歩みて猶ほ且つ疲憊せざるは頗る馬の上に出づ是を以て牛も亦た馬と共に山間農圃の運搬具たるを失はず然れとも全林より之を比較すれば牛は交通機關としては到底馬に比すべからず牛の入間を對する貢獻は是にあらすして他にあるなり

駱駝 大陸内部の無雨乾燥なる地方の唯一の運輸機具たり馬の駝も牛の多力も此極端氣候に對しては其力を奮ふ能はず之に於てか造化は沙漠地の旅行家に最適の動物を降して其缺を補ふ自然の巧妙極まれりと云ふべし駱駝は其林駝馬より遙かに龐大にして背には一箇又は二箇の肉塊あり食物を

第六十四圖 駱駝



充分に得るときは其肉塊は肥滿して營養物の貯存所となりて食物の缺乏したる時に除々に其營養物を体内に分泌する作用をなし又た胃には一種の水滴囊を備へて多飲したる水分を永く貯蔵する便あり此等の作用によりて危急存亡の際に至れば能く十三日間は全く無飲無食にて荷物を運搬するに堪へ四五日間無飲食の旅は其平常の事とする所而して其一匹の負擔量は平均凡そ五十貫目にして象を除きて獸類中にて最大なるものなり

ビアラビヤサハラ等の沙漠地方にて昔時より隊商の交易をなし得たるものは全く此動物の賜たり

象 馴鹿

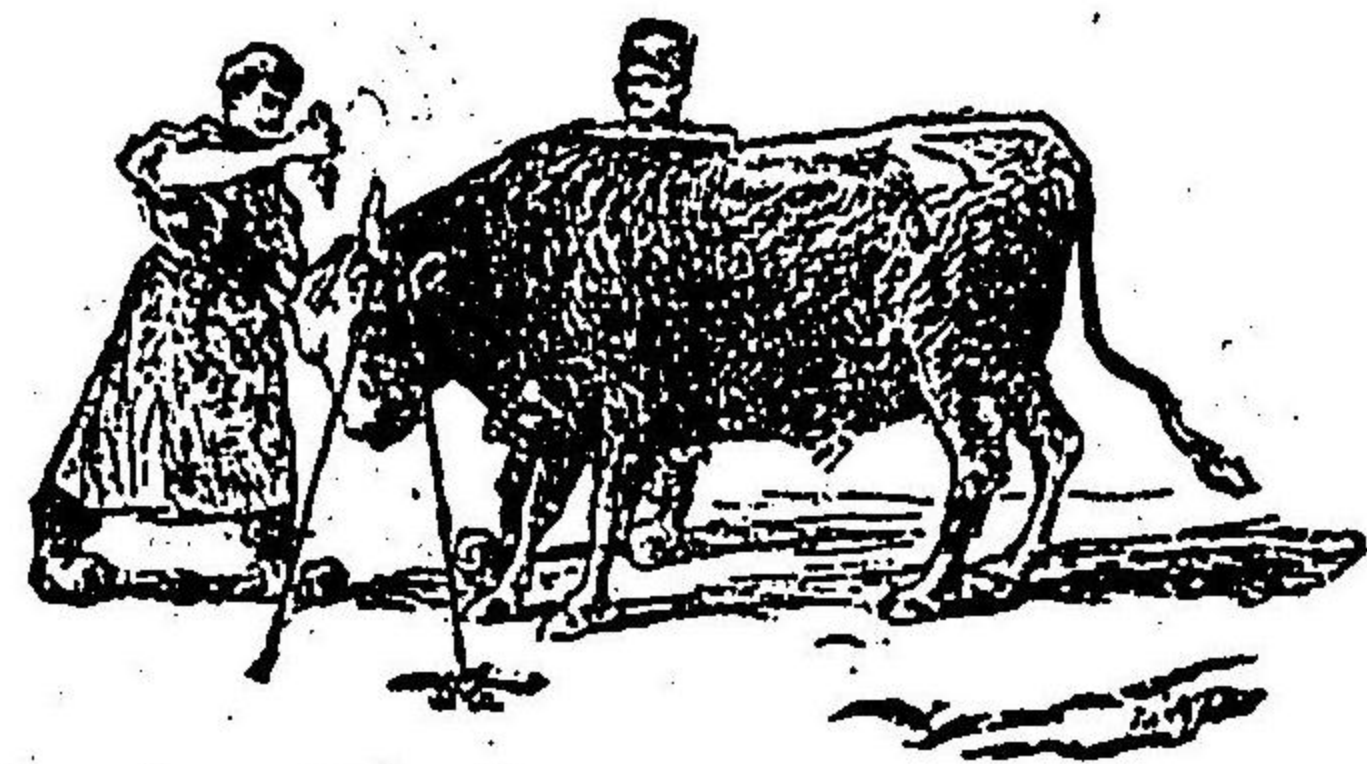
此他熱帶地方の象寒帶地方の馴鹿及び大滿州地方の騾馬及び驢馬等は何れも其特有の筋力を以て人間に効益を與ふるものなり

殊に西比利亞グリーンランドラブラント地方に於ける馴鹿に至りては殆んど沙漠地方に於ける駱駝と同一の効をなす象は印度地方に於ては運搬用及び耕作用として缺くべからざるものとせられ其負ふ所の量ば動物中最大なりと雖も多量の食物を要するの不利あり

能して是に至り更に獸類の各種に就ての効用を觀るに其中には或は一

牛

第六十五圖
屠牛



部に留まるものあり、或は殆んど全部に渉るものあり、而して殆んど全部に亘り各種の軀軀中一の不用物質を有せざる者従つて最も貴重なる家畜となり、之を以て獨立特有の社會を形成するに足らしむるものを牛、馬、羊、豚となす。

六〇八

試みに牛の一死体より得らるべき應用物質を列舉せん、其皮は柔皮となすべく、毛は粗毛、臥褥等となすべく、蹄は膠となすべく、肉と乳とは滋養に富む美味の食料となり、血は肥料となり、腸は膠となり、脂肪は燈火用及び石鹼の原料となり、蹄と角と骨とは小刀、柄、其他の細工品、燐酸石灰及び燐を得べく、一つとして捨つべき所なし、其他は以て類推するを得べし。

然らば即ち此等の飼養によりて生活をなす、牧畜の民が依て以て獨立の社會をなし、之に依頼し之を樂しみ、敢て他の進歩したる生業に移る能はず、永く遊牧野蠻の生活を脱する能はざる所以知るべきなり。

日本食肉の將來

肉食の必要

牛肉

豚肉

志賀云 進みて今の世界に爲す有らんとせんか、須らく先づ國民の血液を濃厚ならしめ、筋骨を榮養し、以て頭腦を剛壯ならしめ、次に精力を雄勁ならしめんことを要す。夫の榮養論、將た曹達、亞爾加利、調和論の如きは、一部人士間に行はると雖も、人生を裨補するには、主として人跡と同一質の排肉食類を要すと雖も、千古に渉りて悖るべからざる法則なり。他の排肉食類の如きは、要するに一種好事の説たり。人生にして蛋白質、脂肪、磷酸を要すとせば、這般を最も多量に食用するもの、即ち肉類を要するは自然の需要なり。是時に當りて日本人が牛肉食用の情況は如何日本國民毎一人の一年食用高は僅かに一斤に過ぎず。神奈川縣下毎一人一年のみ神奈川縣の一年四斤半に達するは、是れ同縣下に多數の歐米人居留する故を以てのみ、横須賀、軍港あるも、若干の影響を及ぼせり。歐米人居留民數の神奈川縣に亞げる兵庫縣下にては、二斤五開港場所在なり。雖も歐米人居留民の絶少なる新潟縣にては、一年一斤を五人して食用するに過ぎず。茨城縣に至ては、實に一年一斤を十三人して食するなり。亦た以て日本人の牛肉を食用するの絶少なるを知らし得、日本人が牛肉を食用するの此の如く絶少なるは、牧畜の事業未だ啓發せず、牛肉の價格高くして國民生計の程度に適はざるものあるを以てのみ、是に於てか近年南半球の新生計の程度に適はざるものあるを以てのみ、一般人民に供給するに要するに於ては、貴族的に屬す、是に於てか平民的獸肉の必要を牛肉は今の日本にては貴族的に屬す、是に於てか平民的獸肉の必要を

兔肉

説き養豚の急務なるを主張し豚肉の調理法を考究するものあり然れども豚肉は未だ以て何となく日本人の嗜好に適はず日本國民は六人に付き一年に豚肉一斤を食用するに過ぎず而かも能く此の如き平均に至るものすら實に一年に一人六斤半なる沖繩縣の如き法外なるものあるを以ての故のみ若し夫れ沖繩縣を除けば支那居留民の多在する神奈川縣下の毎一人一年一斤古來最も豚肉を食用するとの稱ある鹿兒島縣下の一人に付一年一斤長崎縣下の三人に付一年一斤を主とし東京府下にては三人に付一年一斤大阪府下にては二十一人に付一斤京都府下にては三十七人に付一斤を食用するのみ此の如く豚肉を食用するの絶少なるは其價格未だ日本國民生計の程度より高きことも一原因なるべしと雖も豚肉將た養豚事業の未だ以て何となく日本人の嗜好に適はずるや明けし
牛肉は貴族的たり豚肉は平民的なるも未だ以て何となく日本人の嗜好に適はざるものとすれば今日の要は平民的にして而かも日本人の嗜好に適ふが如き獸肉を飼養するにあり是れ遂に如何曰く兔肉是れあり
蓋し養兔の法たる箱飼野飼の二あり野飼にけ多大の土地を要せず多量の餌料飲水を要せず而して其の長き耳を立てて翠草の間を駆け行く所頼に愛すべく憐むべきあり箱飼に至りては幼童兒女と雖も容易に飼養し頼に家庭に幾多の趣味を添ふるもの其の繁殖の速かなる他家畜の匹敵するものなく肉は芳美にして滋養分に富み而かも淡泊なるを以て本邦にては古來四足を食ふことを忌みしも兔は獸にあらず

兎の用途

鳥なりとて正「尾」と喚ばず「羽」と稱へて其肉を賞美し最も日本人の嗜好に適ふ所其毛は柔軟にして羅紗其他織物の原料となり皮は革として優美なる器物の原料となり糞尿は肥料となるが上に殺蟲の効用を兼ね蟲害多き植物即ち桑梨林檎葡萄烟草等に奇効あり要するに平民的にして飼養に趣味あり食料として日本人の嗜好に適ふもの兎を措きて絶えて他に無きものとす此の如き兎にして我國に飼養するもの少きは何ぞ是れ一時南京兎熱なるもの流行すること猶ほ萬年青蘭紫金牛の流行の如く變解なる愛畜心と投機心とは混合して眼毛の變りたるものを愛好し價格に亂高下ありて天然の上にも人為の上にも變則にして調子外れの悪先例ありし故を以てのみ然れども悪先例ありたりとて兎が本來の効用は遂に減せず况んや悪先例を悟りたる今日に當りて苟くも日本國民が大を根本より期圖せんと欲せば兎の飼養は今の急務なり寧ろ經國の事業なり

第三節 鳥類と人生

鳥類の他動物と異なる所は何人も熟知するか如く羽翼を備へて空中を翱翔するにあり是實に彼等の生活の基礎にして彼等が生存競争場裏に於て他の生物に對する最要の武器なりされば鳥類の生活機能の總ては此目的に協合すべく形成せられ吾人に對する有要なる關係も亦た羽毛に

あり請ふ先づ鳥類の全体を通覽して少しく細觀に入らんか。

農林上の益鳥

農林上害鳥

益害相半
はする鳥

鳥類

走禽類

猛禽類

燕雀類

攀木類

鶉雞類

鳩類

涉禽類

水禽類

鳥類が羽翼を以て吾人の生活に要用の關係を有すると同時に其肉は吾人の食品中に最も美味なるもの一とせらる他の禽獸を捕獲して其食とせる猛禽類を除くの外は概ね佳味の肉と遊養に富める卵とを吾人に供す鶉雞類及び水禽類の或者は之が爲に人間に飼養せられ夙に親密に

鳥類の肉

- 走禽類 ダテウ、エヌウ、ロクロドリ
- 猛禽類 アサ、タカ、ハナ
- 燕雀類 カラス、スズメ、ツバメ等
- 攀木類 キツ、キ、アウム、ホトトギス
- 鶉雞類 ニハトリ、クヰナ
- 鳩類 イハバト、シカロバト等
- 涉禽類 ツル、チドリ、シギ、クヒナ等
- 水禽類 アホウドリ、ウ、カモ、ガン、カモ等

我國の鳥肉

鳥脂の利用

羽毛と人生

羽筆

從順に吾人の生活に幾多の關係を有するに至れり就中家鷄に至りては地球上至る所の人種に飼養せられたり我邦に於ても鷄及び家鴨は古より飼養せられるも年々肉食の盛なるに従つて其需用を充たす能はざるに至り今や清及び韓より廉價なる鷄卵の輸入せらるるもの年々十餘萬圓價に上れり鳥類の脂肪中には又た種々の目的に使用せらるるあり鶉鳥の脂肪がヒヤに効ありとせらるるが如き孔雀の油が印度地方に貴重せらるるが如き其一例に過ぎざれど此等は鳥類の一小部分にして其分量に限りあれば鳥類の重なる用は羽毛にありといふべし。鳥類の羽毛の吾人に重要なるは猶ほ獸類の絨毛に於けるが如し羽筆羽、綿羽、衣飾品、漁具等は其重なる用途なり。

羽筆

第二十一章 動物

羽綿

羽綿 鸚鵡類及び雞類が何れも頗る輕軟にして且つ溫暖なる羽毛を供するが故、我邦にても之を夜具に入れ、枕に用ふる等は一般に行はるゝ所、されど其原料に限りあると、未だ其利用の途、開けざるとによりて重要な産物とはならざるが、歐洲諸國に於ては頗る重要な商品となれるが如し、殊にアイダーの羽綿と云へば贅澤品の一として知らざるものなしと云ふ、即ち歐洲北部に産する鴨の一種より得るものにして通例人拳大の球となして輸出せられ、此一個の球を熱を加へて膨脹せしめ、推し延ばすときは能く二人の夜具を充すに足ると、但し羽綿は能く人躰の排出物を吸収するの性あれば、往々傳染病の媒介をなすことあり。
羽衣 天の羽衣なる口碑の俗間に残り居て容易に得難き珍品にして非常に高價なる贅澤品たるを表はすを觀れば、麻布、絹布等の發見以前に於ては、往々毛衣と共に羽衣は纏はれしものゝ如し、現今歐米諸國の豪奢の社會に於ては、或は羽皮のまゝ、或は縲毛を織り、若しくは絹地に織り入れて用ふと、蓋し其柔軟にして溫暖に且つ雨雪を拒くに適し、又た多くの羽

羽毛

裝飾品としての
羽毛

毛は極めて美色を有すればなり、鴉鳥及び白鳥は最も之に適する品なり、他にも羽毛に用ひらるゝもの多しと雖も、皆其原料に乏しければ高貴なる少數の需用に應ずるに過ぎず。
裝飾品として、羽毛は或は軍人の帽子に、或は王侯貴族の冠冠に、共に飾りとして頗る珍重せらるゝは、吾人の日常目撃する所、歐米に於ては更に弘く用ひられ、殊に貴婦人社會の衣帽の飾りとして、若くは室内裝飾品の一として珍重せらるゝといふ、但し此目的は美麗を表はすにあれば、孔雀、鶴、七面鳥、山鳥等の美麗なる鳥類に限る。
羽毛は又た、漁民に向つて、一種の用途を有せり、太古未だ金屬を用ふることを知らざりし時代の人類に在りては、獸骨と共に鳥羽を漁具として用ひし形跡あるが、現今に於ても歐洲に於ては之を以て蠅の躰に模造し、水面に飛舞する小虫に擬し、以て魚族を誘致する具となすと云ふ。
世人の一般に一顧の價値なしと輕視せらるゝ羽毛も之を注意するとき、は頗る多の方面に利用せらるゝを見るべし、されば我邦に於ては伊豆諸

鱈

用途 全国の總産額實に一千二百餘萬圓に達せり。

製法

鯨

全国總産額六百五十萬圓にして鱈に亞ぐ多産額なり。

鯨

平年産額凡八十萬石、其價百八萬圓以上に達す。

鱈

本邦水産物中に於て最多額を占むるものを鱈とす。乾燥或は鹽蔵として内國のみならず、遠く支那へも輸出せらるゝが短漁期の同一時に山をなして群來するが故に多分は肥料となし、他に魚油の副産物を得るに過ぎず。されば若しも製造法にして發達せんには更に數倍の收益をなすに至らん。歐洲に於ては重に油漬となして他國に輸出すといふ。之れ油漬となせば永く其生味を失はざるが故なり。されば油漬は歐洲人の嗜好する所にして、必要なる商品なり。と、全國の砂岸に殆んど産せざるなく、其中最も豐漁地は千葉縣(九十九里濱地方)にして、富山、茨城、長崎、山口等の諸縣之に亞ぐ。

鯨

吾人日常の食膳に於ける蔬菜汁の加味物として殆んど用ひざる者なき。鱈節は之を製造したる者、暖流の區域内の獲魚なれば北方に至るに従つて産額を減ずるのみならず、皮と肉との間に脂肪充堆し、爲めに節に製しても品質劣等なるに至る。千葉、静岡、三重、高知等、黒潮の流域地方に産す。就中節として上品なるは土佐及び伊豆産となす。

鯨

鯨は鱈及鯨と共に本邦に於て最重要の水産物にて、北海道開拓の基礎は實に其魚族にありと云ふも可なり。身欠、背割、數ノ子(卵)等の乾製品となり、或は鹽漬となり、廉價にして滋養多き食料として、弘く吾人の食膳に上るのみならず、主として榨メ、粕、骨、目等となりて、關東、關西、中國等の米麥の好肥料となり、又た搾粕の副産物たる魚油は、燈用、機械、及び蠟燭の原料となりて、吾人に關係を有する。

生産地 樺島根釧路

其性質

製法

すると致て前二種に、雖らず其性質は全く鱈と反對にして、寒流の魚類なれば其生産區域は殆んど北海道沿岸に限られ、僅かに青森、秋田の兩縣に少許の收穫を見るのみ。鱈の樺島根釧路地に關して、専問家の鋭意探究せる所なれど、未だ發見せられしを聞かず。然れども、晩冬先づ奥羽北端の日本海岸に來り漸次北上して、晩春北海道の北端に於て其跡を減するを見れば、北部日本海の中央に在りて、産卵の爲めに前記の沿岸を見舞ひ、水温に應じて北漸する者の如し。又た北海道に於ては鱈と生産區域稍々交又するが如きも、鱈は砂岸に産し、鯨は岩岸に群來するを異れり。とす。鯨は著しく解殖するものにて、雌魚一尾にて凡六萬の卵を生ずと、所謂數ノ子となるもの是なり。故に或は漁獲せられ、或は六角の餅となり、或は巨族との生存競争上より傷害を受くれども、容易に其數の減少するの患なし。彼の北海道に於て漁家の間には年々減少の歎聲あるが如けれど、之を全體の統計より見れば、年々八十萬石内外にあるは殆んど變ずることなし。鯨は脂肉の脂肪なれば、漁捕の後迅速に腐魚となすにあらざれば、忽ち臭氣を帯び、食用に適せざるに至る。然るに魚族の群來すること一兩日の間に各家に於て數百石乃至數千石の收穫をなすが故に、大部分は最粗製の搾粕として肥料となすに過ぎざれども、若し更に迅速なる製造法の進歩するおらば、幾倍の實益を増加するや、必せり。歐洲に於ては荷蘭人最も之が製法に熟練し居りて、漁後直ちに手早く裁割し、之れを醃魚となして各國の市街に輸出

鱈

分布區域

用途

鯛

産地

鮭

産地

鱈

其多大なる嗜好に投し、國益を得つゝありといふ。

魚類の中、其分布の廣きは鱈に若くものはなかるべく、其種類亦た頗る多し。本邦に普通にして經濟上最貴重なるものはマダラ及びスケソノダテ(朝鮮にて明太魚と云ふ)と稱するものなり。其太平洋に於ける分布區域は米國アラスカ海岸を最盛地とし、夫れよりペーリヤン海峡を経て我千島近海ホーヅク海より北海道の全岸に沿うて日本海を通過し朝鮮近海に達す。寒流深海の棲族にいて産卵のためには海岸に群聚す。鱈は其肉は滋養物として、牛肉に比して僅少の差あるのみと稱せらる。多くは乾燥し、練乳となして輸出せらる。其油は精製して肝油とし、薬用に供せらる。

鯛

其色彩の鮮紅なる其形状の美麗なる其味の淡泊なる等により本邦魚族中の王として珍重せらる。暖流産の魚族にして北海道に於ては西南の一部に産するのみ。瀬戸内海及び九州沿岸は其主産地なり。東海道沿岸亦た多し。五月頃産卵の爲に近岸の淺海に來り、秋冬に及んで深水の遠海に去る。前記の沿岸産に瀬戸内海に著明なるは産卵期に當り、深さ平均二十尋位なるに、より多數集し、交尾するが爲なり。全産額三百萬圓。

カリフォルニアより北はアラスカに至る間に産し、西岸即ち亞細亞洲沿岸に於ては、カムチツカ半島よりリベリヤ沿岸に、我國に在りては北海道の一面及び

分布

産地

性質

製造

鱈

棲息區域

用途

食料品としての魚類

志賀云日本入は天武帝以

鱈

本州の北部に産す。北部に取くして南部に至るに従ひ漸し。北海道の鮭は二派の海流に乗じ來るものにして、一は千島海流に沿ふ者、他は樺太海流に沿ふものなり。故に其兩流の流ふ海岸及び其處に注ぐ河川は其産地なり。鮭は河川に派上りて産卵し、茲に卵が孵化して大洋に出で成長し、再び其河川に歸る性質を有するものにして、一生中の過半は大洋に經過し、秋は淡水に來り、淺き水源に湧りて産卵し、夏期は大洋中の深所の冷水に栖息す。鱈となす。所謂鱈引と稱するものは是なり。又た鱈語として輸出す。其卵は醃蔵して筋子と名づく。那威にては資魚、酸魚、或は鮮魚にて之を賣り出し、又た氷室に蔵して英吉利及び獨逸に輸出すといふ。

鱈

鱈類は多數の鋭齒を具し、運動迅速にして強健なり。常に海産動物を食し、在々人類を害することあり。故に之が捕獲には幾多の困難あり。熱帯並に温帯の海中に棲息す。其肉は我邦にては専ら魚餅を作るに用ひ、其皮は乾固して鱈の如く研磨用となし、又た劍把等に用ひ、其肝は以て油を製すべく、脂は乾固して支那人の上等の食餌に必要品のひとつとして嗜食する所なり。

食料品

生鮮のまま、漁業地附近に於て食料に供せらるゝものを擧ぐれば、其數は極まりなしと雖も、以上列擧のものは或は鹽漬とし、或は罐詰とし、或は乾製し、或は蒸製して、内國若くは海外に遠く輸出せられ、重要な

に適し、且つ諸般の器物を接着するに缺くべからざるものなり。

第五節 軟体類及棘皮類と人生及地

軟体動物及び棘皮動物中には又た多くの地理的産物あり、鮑、烏賊、海扇、牡蠣、海參等はなり、皆之を乾燥して遠く海外、殊に清國內地に輸出せられ、又た其貝殻は諸種の用途あり。

烏賊

其産額は四百萬圓にして、清國及香港へ輸出するものは百萬圓以上上り。

烏賊 鮑は即ち烏賊の乾燥したる者にして、本邦水産物中、第四位にありて、輸出の海産物中、最高額を占むるものなり。近來は刻蝕となし、内外に供給し、又た腐蝕し、シホカフと云ふ之を蝕蝕となして販賣す。其甲は主に岩酸石灰より成り、磨粉を作るべし。暖流の域内に栖息し、新潟及び岩手の兩縣に於て最も多額を産す。

鮑

鮑 乾燥は鮑に匹敵する重要貿易品にして、明鮑、灰鮑の二種あり。本邦にて長崎縣、千葉縣、三陸地方及び北海道の暖流沿岸に最も多く産し、鮑と共に清國に輸出せらる。其額四十萬圓に下らず、而して鮑の貝殻は又た種々の器具に製せられ、十萬圓の輸出額に達す。

海扇其他

海扇及び之に酷似する半透蝕等は、其肉柱を乾燥して、貝柱と稱して、清國へ輸出す。前者は北海道に後者は鹿兒島灣内に多く産す。此他に貝柱とせ

眞珠貝

貝殻の用途

らるゝものには、クカラキ、バカ貝等あり、介殻類の中に人類に奇賞を博するものを眞珠貝となす。數千の本邦労働者は、此貝の採取の爲めに南洋の木曜島に出稼せり。眞珠は諸種の介殻より生ずれども、眞珠貝に尤も多し。介殻の内部に於て、其外套膜より分泌する眞珠様物質が核となるべき或る物体の周囲に次第に堆積して、球狀若くは卵狀となりしものにして、弘く裝飾品として珍重せらる。

貝殻の用は、又た甚だ廣し、衣服、頭髮の粧飾、好事家、學者等の文房具、及び通常家具として、總ての社會に愛玩せらる。又た野蠻時代にありては、永く通貨に代用せられたりと、其光彩、形狀等は、千樣萬態なるが上、一種の美質を具ふれば、或は天然のまゝに使用せられ、或は製造して諸種の用に供せられ、一々之を枚擧すれば、限りなき程なるが、試みに卑近に吾人に關係あるを區別すれば、左の如し。

- 一 實用家具類 匕、飲器、ランプ、小刀、柄、煙管、煙草入等、其他の家具。
- 二 衣服用飾具 胸針、留針、鈕子、袖飾等。
- 三 飾珠類 貝花、筆飾等の裝飾、頭飾、胸飾、袖飾等の連環、其他人體の粧飾品に藉む。

る小珠。
四、玩具其他の貝細工類 小兒の玩弄品及び小匣等を飾るもの。
五、肥料並に陶磁器 粉末として肥料とし、或は陶磁器に塗る珉薬を製するに用

第六節 爬虫類と人生及地

爬虫類中には人間の最も嫌忌すべく且つ最も恐るべき蛇類を含むを以て一見人をして嫌惡せしむれども其種類中には又た利用せらるべきもの尠なからず此等の中人類に其肉の美味と共に美術品の貴重なる材料を與ふる者は龜鼈なり又た彼の婦人の最も貴重なる眞正の籠甲は玳瑁より製せるなり。

玳瑁 其背甲は單一ならず十三枚の小甲覆瓦状をなして重り黄色透明にして無疵を有し頗る美麗なりされば弁香等の材料として其價格頗る貴し。玳瑁は肉食動物にして温暖なる海に棲り、沖繩近海及び南洋諸島に棲る所多し。蝸龜 蝸龜及び赤蝸龜は我邦小笠原島、薩南諸島近海に存し其雌の産卵の爲めに岸上に来り卵を産み始むるを待ちて之れを仰向に擧げて容易に捕獲し且つ之を縛し置き海中に放ち雄を誘ひて容易に之を捕ふと云ふ其甲は籠甲と同じ目的に使用せらる。但し其品質は劣等なり其脂肪はバターを製し、或

クイマイ

産地

ウミガメ

用途

は製革、用、燈、火、用、に供せらる。

第七節 昆蟲類及甲殻類と人生及地

昆蟲類の多くは有用植物の葉莖若くは根を咬食して農家の強敵なれども其中には有益のものも尠からず。

- 膜翅類 ハチ、アリ、
- 甲蟲類 ホタル、カブトムシ、
- 鱗翅類 テフ、ヒヨドリ、
- 双翅類 ハロ、カ、アブ
- 有翅類 シラミ、アブラムシ、
- 線翅類 スチロプス
- 脈翅類 ウスバカゲロフ、
- 擬脈翅類 カゲロフ、トンボ
- 直翅類 カマキリ、
- 彈尾類 シミ、ハネムシ、

昆蟲類の中には最も人生に重要な蠶と云ふ本邦輸出品中第一位を占むる生絲は即ち此蠶の生産に係ること何人も知る所世界に於ける養蠶の盛なる地は本邦の外支那、伊太利、佛蘭西及び印度地方にして要するに歐洲の南部及亞細亞の東南部地方に限られたり而して支那にては今や全國に亘れども主要なる所は中央諸州にして北緯三十度乃至三十五度の間にあり我邦にて最も産額が多きは長野、群馬、埼玉の雨量の少

生絲

絹織物

野蠶蛾

蜂

蜜蜂

密蜂

して生絲に限られしが、近來は生絲を更に織物となして輸出し、其價年々多くなりしは悦ぶべき現象なり、其製造織物の種類は其數甚だ多く數百種の多きに達すれども之を大別して三種となすを得、平織、綾織、井に絞織、是なり、羽二重井に甲斐類は即ち平織にして海外、殊に北米、合衆國及び佛蘭西に輸出するもの、即ち此種に屬せり、此等は殆んど皆な無地にて輸出し、先方に於て嗜好に従つて染彩を施し、婦人の服地、男女の襟飾、小兒の帽子、衣服の裏地等に用ふと云ふ。

野蠶蛾 蠶蛾と同種類なる野蠶蛾も亦た重要な昆蟲たり、山繭の生産者にして、絹織物の寄生蟲なり、彼の染色に困難なる絹織物は即ち其絲より織りたるものなり、北清、殊に山東省は其本場なり。

蜂 昆蟲類の中にて、蠶兒に亞て、吾人の快樂を興へ、吾人の文明に裨益を興ふるものは、蜜蜂なりとす、其著しき特性は其中に女王、雄蜂及び職蜂の三種ありて、數百乃至數千の一群が女王の統御の下に秩序井然たる社會的生活をなすに、よりて多量の蜂蜜及び蜂蠟を人類に供するにあり、蜂蜜は彼等が家屋を築造するに使用する物質にして、彼等は植物より之を採集して腹部の調節より之を分泌して、巢房建築の原料とするものなり、而して此蠟は種々の目的に使用せらる、即ち蜂蜜より製せる燻烟は其光力の強大なるのみならず、他の脂肪より製せるものに比すれば脂氣なく、臭氣なし、又た此蠟は香藥の原料として用

蜂蜜

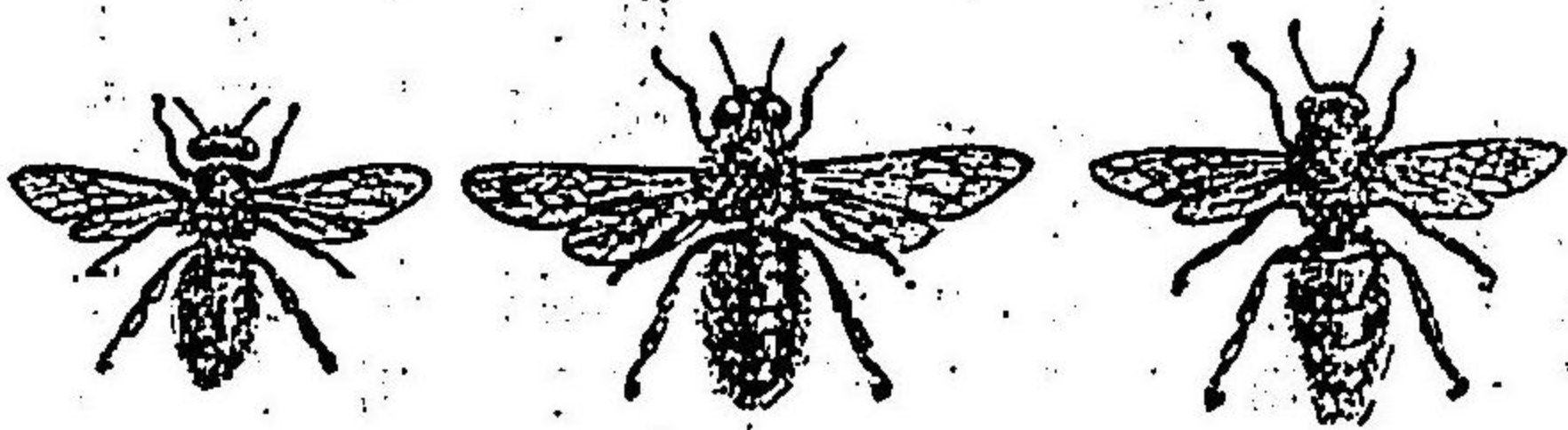
其棲所

第六十七圖

密蜂(中央は女王、右は雄蜂、左は職蜂なり)

蟻

没食子蜂



ひらる。蜂蜜を久しく外氣に晒して白蠟となしたるものは動植物の模形及び

裝飾品を製するに廣く使用せらる。蜂蜜の外吾人を益する蜂蜜は其兒を育て又た冬間飢を凌かんが爲めに夏秋の間に花より集め、林内の蜜壺に貯へ、其巢房に運び、小房内に蓄へしものなり、蜂蜜は芳香と甘味とを有せる濃厚褐色の液にして、其効用砂糖に異ならず、之を醱酵せしめて酒を製すべく、又た動植物質のものに腐敗せしめず、永く保存する爲めに用ひらる。蜜蜂は元と山林にありて樹間に棲みしが、是れの効益ありと共に人類に慣れ、性質が、あれば、今は各地に於て飼養せられ、箱根等の中に棲み、以て従順に蜜及び蠟を製造することは家畜と異らざるに至れり、其生活の根據が、花蜜に、ちれば、自ら、花の分布に制限せらる、いや明かなり。

蜂と同族なる蟻は又た一種の蠟と名づくる酸類を分泌す、之より得たるコロ、フォルムは一種の外科的療養用として用ひらる。

蟻、蜂と同じく、膜翅類に屬するものにて、吾人に實益を興ふるものを没食子蜂となす、樺樹が方に出芽せんとするに際し、其莖葉の組

昆虫類

甲蟲類

ハンミョウ

鱗翅類

蝶蛾
鱗翅類

織中に産卵す。此際産卵管より一種の毒液を射入するときは、植物が其發芽を妨げられたるにより、其部分の組織隆起して瘤狀物を生ず、即ち食子と稱せらるゝものは是なり。没食子は、鞣酸に富み、染料として廣く用ひらる。即ち黒色の染料若くは墨汁は、是より多く製せらる。又た此物は、收斂劑として藥用に供せられ、其他寫眞術にも用ひらる。されば商品として歐洲に亞細亞諸邦より輸入せらるると云ふ。

甲蟲類 甲蟲類は多くは幼蟲共に山林農圃の害蟲なるが、其中には亦奇効を有するものあり。ハンミョウ(葉寄)と稱して醫藥に用ふるものは是なり。此虫は暗緑の美色を有する小蟲にして、内科用として、神經痛に一種の効用を有せりとして用ひらる。然とも多量に用ふれば生命に害あり、往々毒藥として使用せらる。又た外科用として、發泡劑に供せらる。

鱗翅類 各種の蝶蛾等を含めるものにして、其中に、體美の容色を具へ、花に戯むれ、庭園に舞ひて、大に人目を悦ばしむるものあり。其幼蟲に至りては、皆醜惡にして、植物質を咬食し、山林田圃に大損害を興ふるものなり。前記蠶蛾の如きも一方に絹絲を紡出して人類に洪大なる利益を興ふるものと之を植物より見れば、桑の害蟲たるなり。此等害蟲に伍をなし、獨り特殊に効益を人間に興ふるものを、鱗翅類となす。彼の日常婦人社会に需用せらるゝ紅色の染料は、即ち此類の鱗翅類の幼蟲の糞なり。

甲殼類
蝦

第八節 珊瑚及海綿と人生及地

此一小鱗翅虫の賜なり。昆蟲類と共に節足動物中に屬し、甲殼類と稱せらるゝもの、内に人類の食料となるものあり。蝦の類是なり。小蝦の乾燥せしものは清國人の食用するを以て之に向ひ輸出すること年々四十万圓に達せり。彼地にては食膳に供するのみならず、茶菓子代用すと云ふ。無數の中等動物中には、間接の多少の影響を人類に與ふるものあるべけれど、就中吾人に實益を與ふるものは、海綿と珊瑚なり。

海綿
骨格
用途
産息所
珊瑚

海綿 其種族は許多あり、海底にありて、外物に固着し、單體なるは、壺狀をなせども、群體のものは樹狀又は塊狀をなす。内部に硬固なる骨格あり、外部は柔肉を以て被はる。吾人が手拭に代用するものは、其角質の骨格なり。海綿の用途は、許多ありて、普通には洗滌用の外、諸種なる外科手術用の器械を製造すべし。溫暖なる海中に棲息し、其中に最も實用をなすものは、地中海の東北海及び西印度諸島に多く産す。

珊瑚 珊瑚の赤色なるものは、一般に婦人の裝飾用となり、之を小珠となして愛玩することは古へも今も異らざる所なるが、此等の實用部は即ち珊瑚蟲の多

六三二
数群するに當りて共有する所の骨格なり。其種類多く、イソギンチクの如く單獨なるものあれども多くは群衆をなして共有肉中に角質又は石質の骨格を生じ又た蟲林の壁に沿ふて石灰質を堆積する者多し是れ即ち吾人の裝飾品とする珊瑚が、狀樹を呈する所以なり。
珊瑚に一の壯大なる現象は南洋諸島の海中に觀るべき珊瑚礁を現出するにあり。或は環狀の島を作り又た陸島に沿ふて長大なる環堤を作ることは既に開陳せる所。其長きもの一千里に亘るものありと云ふ。皆此無數の小動物が發芽法又は分裂の如き無性生殖力によりて速かに繁殖し、各其肉中より角質又は石質の骨格を生じたるに外ならず。

第九節 動物と心情

吾人の從順なる伴侶とし將た親愛なる慰藉者として、日常の生活に纏綿するの諸種の動物によりて吾人の心情か涵養せられ、愈暢せらるゝことの頗る多大なるは、少しく自省する所により、又た古來の詩歌を、通覽するによりて、容易に首肯し得べき所なり。想ふに渠等は造化の特命を帶べる天使として、或は忠實に吾人の使役に服し、或は臨時に吾人の慰訪をなすものなるに似たり。而して渠等の中に、或は群鷄の庭園に啄むが如き、或は

七面鳥の青氈に舞ふが如き、或は黄鳥の梅ヶ枝に宿るが如き、蝴蝶の花間に舞ふが如き、色彩の艶形跡の美を以て吾人を樂ましむるものあり、直ちに色形の美を備へざるも、或は枯枝に鴉のとまりけりあきの暮(芭蕉)の如く、鶯飛んで天に沖し、魚淵に跳る(詩經)が如く、或は一群の白鶴青空に舞ふが如く、一種の清爽の感を起さしむるものあり、或は鶯の如く杜鵑の如く乃至其他の鳴禽類の如く、階々たる美聲を以て吾人を悦ばしむるものあり、加之等しき鳴禽類中にありても、或は寒鴉の啼聲の如く、悲哀、寂寞の感をなさしむるものあり、或は轉鶯の一種優美にして奇調なるが如く、何となく愛らしき情を起さしむるものあり、或は焼け野の雉子、夜の鶴の如く、一種の言ふべからざる悲涼の念を生せしむるものあり、斯の如き聲音を以て人生に影響するものは、獸類にも、蟲類にも、少からず。

奥山に紅葉ふみわけ啼く鹿の

聲聞く時ぞ秋は悲しき

猿丸太夫

さりざりす鳴くや霜夜のさむしろに

の如き幽靜悲哀、多少厭世的趣味を覺えしむるが如き是なり、或は牛馬、犬猫等の如き、夫々特有の性質若くは動作を以て、從順、溫和、親愛、勇敢、堅忍、報恩等の高尚なる心念の啓發に資するものあり、要するに其中に吾人を沈鬱憂愁等の悲嘆的感想に沈ましむるものなきにあらざれど、而かも各々時にとり多少の慰藉をなし、歡樂を與へ、以て人類の動物的性質たる殺伐の氣象を和らぐることの妙からざるは争ふべからざる所なり、是によつて之を見れば、動物の吾人の心情に影響する所の多端なるは敢て植物界に譲らざるなり、果して然らば、其等各種類の各地に於ける有無及び多少が其住民の心情に特種の影響を與へ、従つて文化の發達に妙からざる關係あるべきは否定する能はざる所なるべし。

第十節 動物と文化

動物の人生に對する諸般の影響は、以て其文化の發達に對する關係を推知せしむるに足る、想ふに有益若くは有害なる動物の多寡の文明に及ぼ

す影響の緊切なることは、却つて遙に植物の影響に優るが如し、蓋し野獸の棲む處は即ち狩獵生活の住民の在る所、而して家畜に適する從順なる獸類のある所は、即ち是れ牧畜民の生ずる處也、人類既に此生活の域に至れば、佳美なる肉と滋養に富める乳とは其欲するが儘に供給せられ、斯くて全く天産物に依頼したる原始人種に免るべからざる、時によりて食物の非常なる缺乏は全く顧慮する要なきに至るが故に、茲に安全なる生活を遂ぐるに至り、此等の獸群を保護する爲には、結合の必要を生じ、依て以て社會的共同生活をなすに至る、故にクラインツェヒテル氏は曰く、古代に於て家族關係を惹起せしめ、且つ之か統一を固からしめたるは羊及び之か牧畜の生計に在りと、特に馬に至りては、直接に一の部族をして他の部族と生存競争をせしむるに有力なる伴侶たる者なれば、其存否多少が直接に其社會の内部の統一と外部の進歩とに大なる影響を及ぼしたり、クラインツェヒテル氏又曰く、歐洲人征討前の亞米利加の文明の發達が非常に遅々たりし所以は、人の使用に供する動物の缺乏せしに、職由す、當

志賀云、馬は人の三日間を要する勞力を成す、其の間に二日間にて人類の文明を補せし力や大なり。

有益動物と文明

時亞米利加土人の有したる唯一の動物はラマなるが此動物は僅少なる運搬に堪ふるのみにして、且つ山地の動物なるを以て、古代亞米利加の開化は山地に局限せられたり、然るに米國が一旦歐洲より馬を輸入するに及び其文明は俄かに長足の進歩を見るに至れり。馬は戦争に必要缺くべからざるものなり、然るに戦争は國家を組織せしめたる原動力なるが故に、開明の進歩には馬は極めて大なるものなりと、
然れども一方に於て、非常に原始時代の文明に大なる幫助を與へたるものは同時に其發達を停滯せしむるに足る。蓋し以上の家畜は之れを飼養する人民に對して餘り多くの貢獻をなすが故に、渠等は其行く所に附隨するに於ては勞せずして安全に衣食の料を得らるべければ世に之れ程安樂の生活はなし、斯くの如きは決して人をして進歩の途に上らしむる所以に、あらず之に反して家畜の數が最早人類の食料の全部を供給する能はざるに至らんか、已むとを得ずして農業に勵精し、定住の生活に移るに至る。而かも轉業の困難なるは文明人種に於ても尙ほ且つ至難の事な

文化の發達を妨げし例

れは苟くも多少の依頼すべきあらば依然として遊牧の生活を脱する能はざるは宜なりといふべし。之を坪井文學博士に聽く、曰く、民族が其因襲の生業を一變して他の有益の生業に轉するは、非常なる急迫の生存競争に遭遇するにあらざれば能はず、殊に牧畜遊居の民が農業定住の生活に遷るに於て、然り、南露裏海の東南ステップに住するキルキス族や、概ね羊を飼養して生活す、彼等の生命を托する第一の財寶にして且つ無二の伴侶は實に羊群たり、是に於てか其生命の親たる羊にして他に轉移すと謂はんか、彼等は如何なる事情ありとも、如何なる財産を拋棄すとも、唯々路々何時にても幕居を徹して之に隨伴せざるべからず、此地方一帶に水質汚惡にして飲用に適せず、偶々西瓜の多量の水分会を含みて有害の水質を吸收して而かも無害の水を供するを知り、之を植て僅かに渴を免かる、此故に彼等の羊に隨ひて其居所を卜するや、第一に着手すべきものは西瓜の栽培たり、然るに羊群の牧草を食食することは、漸くに堪へず、見渡す限り繁茂せる綠野も忽ちに荒土となる、是に於てか彼等の苦心栽培以て請

潔なる飲用水を得んと樂しめる西瓜が將に紅熟せんとするに當り、羊群の食既に盡く是に於てか多數の羊群は一時も猶豫すべからざれば今や彼等が折角の希望と樂みとを寓したる其西瓜を顧るに迫あらず、割愛難情以て羊群に伴ふを常とす、由て其生活の不定にして困難なるを知るに足る、然るに其附近に既に定住安樂の生活を遂ぐる農民あり、彼等として之を目撃すれば羨望せざるにはあらざれども、斷然從來の生活を捨て、之に移るを敢てせず、以て如何に生活を轉するの困難なる知るを得べし、と果して然らば文化の發達には有要動物の分量は多少共に一定の程度ありて其程度以外に於ては文化の發達を見るべからず、以内に於ては其多からんよりは寧ろ寡きを以て文化の發達を促がすものなりと云ふを得べし、
シエンルゲマン氏が總ての事情にして等しからんか、一國の人類關係の最初の完備は其動物の繁殖と反比例をなすと云ふを得べしと云へるは即ち此程度以内に於て眞理なりと信す。
積極的に發達を助けずとも消極的に發達を阻礙するものとして有害動物

志賀云 舊世界に
界は新世界に
米、麥、類、豆、
類、牛、馬、雞、
羊、豚、雞、
茶、珈琲、甘、
蔗、大槪の蔬、
菜、大槪の蔬、
り、舊世界の受、
新世界より受、
は、僅かに玉、
蜀黍、馬鈴薯、
煙草、幾尼、
護謨、呀、
囉、色、

物の文化に於ける關係も決して輕視すべからざるものなり、蓋し豺狼熊虎の道に横行するが爲に、或は蛟、鰐、毒蛇の森林沼澤に蟠踞するが爲に、徒らに住民の氣象を畏縮せしめ、交通開拓共に阻礙するが如きは吾人の想像に難からざる所なり。

第十一節 動物の分布

植物の増殖に必要な條件は動物の生活に於ても同じく必要なりと雖も、其度に於ては頗る異なるものあり、蓋し動物は氣候の變動に對しては、頗る微妙なる手段を具備せり、即ち或るものは冬眠若くは夏眠をなし、或るものは寒暑に應じて其羽毛に疎密の差を生じ、或は内皮の脂肪層に厚薄を來し、又た或る場合には適地を選んで移住をなす等是なり、されば動物は植物に比すれば直接に氣候の影響を受くること少しと云ふを得べし、然も動物は其食物を悉く直接に間接に植物界に仰かざる能はざれば、此點より到底氣候の影響を脱する能はず、是に於てか植物の如く精細ならずとも動物に於ても各種の地理的分布を生ず、學者は世界の動物の分

分布の原因

本邦魚類分布

類に富み北進するに従ひ温帯性の動物殊に有用家畜の繁殖を見東北地方及び高山地には熊、狼等の寒帯性のものあり本州と北海道との間には著しき差異ありて、猿は北海道に於て見る能はず熊及び鹿も其種類を異にす禽鳥類に於ては歩行動物の如く著しき分布區域なしと雖も氣候の變化多様なるが故に熱帯寒帯間を往復する候鳥等多く約そ三百八十餘種に達すと云ふ。

斯の如き分布を生したる所以のものは氣候の關係は固より大なれども、第二十章に於て列擧したる原因就中動物の移動し得る力と其地方の地質上の變遷とに固ると大なるものなり。

本邦近海の海産動物就中魚類の分布に就きて、ジョルダン博士は、日本群島の動物の種類に富むを以て著明なるは其の各地が氣候及び他の事情を異にすること、亞細亞大陸及び海産動物の中心たる東印度諸島に近きこと、南方より來る暖流、黒潮及び北方より來る寒流、親潮の關係等の如き種々の状態を備ふるに因るされば、日本に於て海産動物の種類と數との

豐富なるは當然の理なり殊に魚類に於て然りと成して左の五域を區別したり。

- 一、千島近海 明かに亞寒帯にしてチホーシク海及びアラスカ海特産の魚類を含む。紅鱒等は即ち是なり。
- 二、北海道と松島及び能登半島より北方 即ち本州北部一帯の海岸を含む。寒流北來し、北方産魚類の發達に適す。鱒、鮭類此區に産し、那威、スコットランド、ニウ・フランド及び英領コロンビヤに於けると同じ。經濟上の關係を有す。
- 三、松島灣及び能登半島の南方に於ける本州の沿岸及び瀬戸内海の沿海 本州の沿岸及び瀬戸内海一帯の魚類は明かに温帯に屬すべきものにして日本特産の魚類の多くは此區域に屬す。
- 四、九州四國近海 前區を除きたる九州四國の近海には半熱帯的の類多く殊に九州産の魚類は日本特産のものよりは支那近海に普通に産するもの多し、尤も此等の産地區域は固より列然たる障壁あるにありざること勿論なり。
- 五、黒潮の流域 これ明かに熱帯的にして其沿流諸入江の區域と相對す。此流域は米國のメキシコ海流と類似し、鹿児島、高知、和歌山、駿河、伊豆、相模、安房等の岬岬突出して其流に透すれば岩間の渾水には熱帯的魚類を産することは北方東京に透す紀伊、伊勢、伊豆、三崎及び安房の如き階梯はネリネシ群島に産

する魚類と同様のものを産す。

六四四

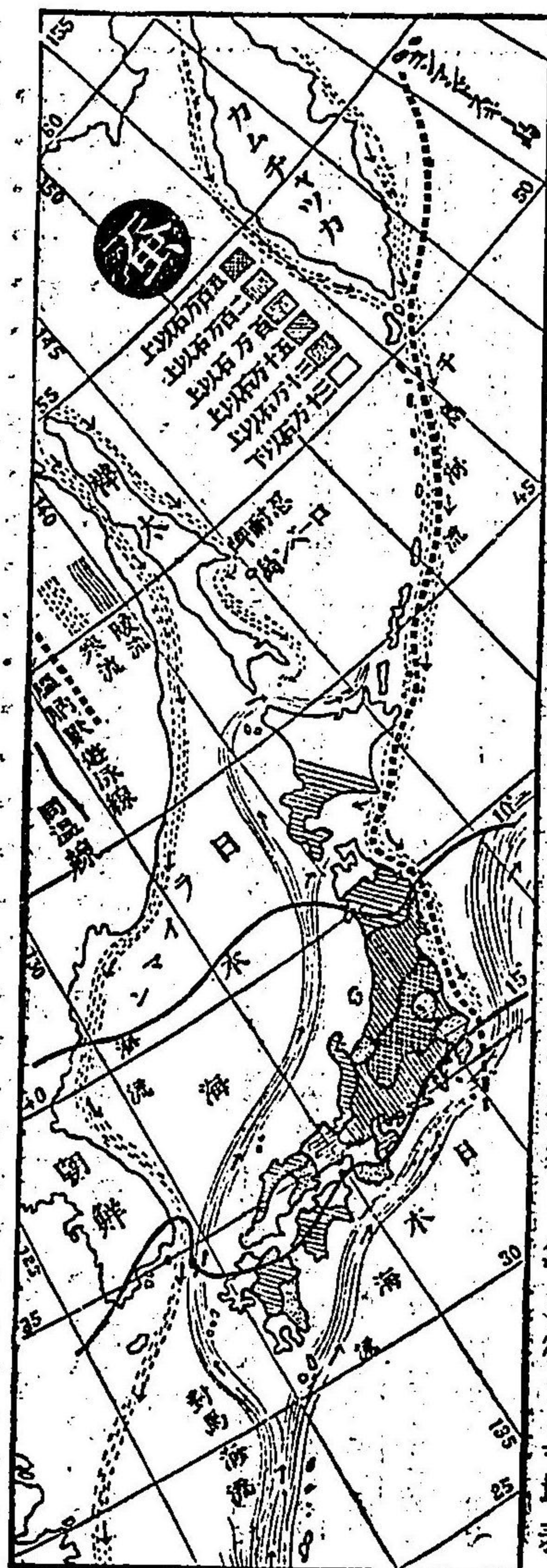
他の水族の分布

實用動物の分布

斯くて博士は此の如き分布を生ぜる原因は、主として諸海の温度及び潮流の運動に支配せられし者なりと説明せるが、殊に水族分布と水温との關係は猶ほ陸生動物と氣候との關係の如く密接なるものなり、水界學者モレー氏曰く棲息する魚介の種類により其海洋の水温及び洋流の如何をトすべしと、右は魚類の分布に依ての區別なれども海獸及び其他の水産動物にも粗ぼ之を適用するを得べし、即ち第一區は紅鱈等の寒性魚類の區域にして又た鰻鰒鰐虎海豹等の棲息區域なり、第二區の北部に迄て烏賊鮑海鼠等の存在するは全く對島海流の影響に外ならず、而して第三區は鯛烏賊鰯等の棲息所にして、第四區は鯉、鯪等の熱帶性の魚類の繁殖適地、其南方は藍瑤瑤等の棲息所たるなり。

以上の如き動物學上の地理的分布の外に人生地理學に於ては苟くも人生に著大なる關係ある動物殊に實用動物の地理的分布、即ち其等各種の棲息區域及び其分量的分布をも精査する必要ありと雖も、此れ未だ吾人の

第六十九圖
日本蠶産額分布
及び風脚獸游泳
區域



の智識の及ばざる所多く且つ以上各種に於て隨時觀察したる所なれば暫らく其れに譲り、唯た試に本邦最重國産たる蠶の地理的分布を第六十九圖に表はせり、之が説明は本章第七節蠶の部に於て爲したる如く、其多産地の北緯三十五度乃至三十八度において且つ内陸地方にあるは一は温度の關係にして、一は春期に於ける雨量の分布に基くもの、如し養蠶家の俗に蠶は桑と共に鹽風を嫌ふとの事あるは幾分か此事を説明するものならん、既に生物の人生に對する諸般關係を觀察し、然る後ち其地表

に於ける分布の概要を知らば、殊更に各國の地誌に於て、一々夫等の物産を列擧して記憶の過度と錯雜とを來さずとも、其地方の人生現象の大畧は之を類推するを得ん。

六四六

參考要書——▲フエスカ、氏「日本地産論」▲シモンズ氏「動物生産論」▲農商務省「日本地産要覽」▲北海道廳「北海道水産豫察報告」▲高橋氏「北海道水産實態」▲著作理學博士「動物學講義」▲横山理學博士「地文教科書」▲フンクスター、氏「實用動物學」(大森千蔵氏譯)▲松浦悅郎氏「海豚話」(北水協會雜誌第六一號)▲シヨルゲン、博士「日本近海に於ける魚類の分布」(明治三十四年の動物學雜誌)▲フンシヨル、氏「鯨に於て明治卅三年中の東洋學藝雜誌」▲肝付兼行氏「海上の生産」(國士館二十四號)▲平澤氏「博物學」▲時事新報廿九年第四七四六—四七七〇號▲フニエ、マンクス、氏「社會學」(十時氏譯)第二章▲アビス、氏「自然地理學」第五章▲ベッダー、氏「動物地理學」▲ミシエ、ルウ、氏「日本文明史」(森鷗外氏譯)▲井原鏡氏「日本物産地誌」▲農商務省「勸業要覽」

第二十二章 人類

人類を何れの類に入るべきか

上來の地理學對象の分類に於て、人類を何れの類に入るべきかに就ては切かに厭む苦慮せらる所。從來の自然地理と人文地理との區分に從へば、當然大體に入るべきなれども、本書の主眼とする所の人生現象に對すれば、人類も他の自

然現象の如く、其現象を生ずる一原因最も重要なものと見做すを以て至當なりといひ、乃ち姑く本篇に收めて他日適當なる分類の出づるを待たんとす。彼の社會學者が宇宙間の萬有の進化する順序に從て萬有を天體現象、生物現象及び社會現象の三類に區別せるは、固より彼れと是とに異なる所ありと雖も、是が區別に當りて類する味ふべきものなるべし。

第一節 人類の特質

萬物の靈長
人類の他動物と異なる所

「萬物の靈長」とは人類が夫れ自身の先天的性質に對する觀念なるが如し、されど、これは實に悠久なる星霜間に於ける發達の結果にして、其原始時代に遡れば極めて憐むべき無力のものなりしことは、今尙ほ現存する所の野蠻人種若しくは纖弱なる幼児を観察するによりて想像し得べき所なり。之を博物學上の着眼よりすれば、人類も他の多くの獸類と共に有脊椎、有胎盤、哺乳の高等動物にして、彌猴類に屬するか、若しくは其亞に編入せらるべきものなり而して、其等同屬の動物との形體上の區別を觀れば、人類の手足は獸類の前後の肢に當り、僅かに其全蹠を地に接し、直立して歩行すると、其感官が多様なる外界に對して複雑なるが上に、強力なる感

吾人は單に外界の事物を認識するのみならず、其と同様に自己をも他物の如く認識し、相手となし、而して認識せらるゝ自分は認識する自分と全く同一なることを知る。之を自覚と云ふ。此の自覚は動物には其痕跡をたゞも見ることは能はず。

自然的人類と社会的人類

六四八
應作用をなすとのみされば、人類と高等動物との區別は、形骸上に於ては甚だ些少にして、寧ろ精神上にあり、腦の構造に微妙なると従つて自ら自分を認識する自覚言語及び所謂自由意志即ち自決の力の自然的基をなす理性を備ふる等は、其著しきものなり、而かも動物とても敢て精神を具へざるにあらず、少許の智識、注意、判別等の力及び感情は有すれば精神上に於ても全然別異のものにあらずして、其發育の程度の相異にあり、人類は此の他動物と區別せらるべき僅少なる特質によりて其周圍の自然力に抗抵して其生命を維持するのみならず、自然力を利用して自己の使役に供し、又た能く自然の状態に應化し、以て其種族を播殖し、他の生物を征服し、更に進んで社會國家を形成し、遂に今日の發達を遂げたるものなり。されば以上の自然的人類の特質は、吾人が今日の社會に於て得て生活し得る社會的人類としての僅かの基礎たるに留まるや言を俟たざる所なれば、社會的人類としての所謂萬物の靈長たらんが爲めには多くの修養と訓練とを積み、て幾多の階級を経るべからざるなり。

第二節 人類の數及其區域

各種の生物は其種類に従つて、夫々地理的分布を爲すことは前の諸章にて觀察せるが如し、蓋し其等生物の堪へべき温度には一定の限界ありて、非常なる酷暑と嚴寒とは決して生存し得べからざる所なればなり。就中動物にありては、其生存上氣候の外、氣候に由つて生ずる食物及び氣候の原因にして、又た幾部結果たる地形等に制限せらるゝが故に特に顯著なる地理的分布をなすなり。人類も亦た一種の動物にして、其生存に堪へ得べき氣候及び食物、地形等の制限は他動物よりも多きが故、此點より見れば、或種類の動物に比すべき一定の地理的限界なかるべからざる理なり。然るに實際に於ては殆んど世界の全面に廣がり、人類の棲息區域は地球表面の殆んど全軀と云ふも可なり。是れ蓋し其特有せる優等智識の結果として、種々の工夫を廻して自然力に抵抗し、之に打ち勝ち、之を利用して自己の使役に供し、又た能く身を自然の状態に應化し、推移して以て其生命を保存し、其種族を播殖すると共に、一方に於ては生存の必要に迫

人類の棲息區域

六五〇
られ、或は好奇心、冒險思想に驅られ、或は漂流等の偶然の事情等によりて
絶えず其棲息地域を擴張せんとする傾向あるが爲めなり、要するに生物
の膨脹を抑壓する自然の勢力は、人類に對しては甚だ薄弱なるによるな
り、斯くて十五億六千餘萬の人類は地球上の物質上の主權を握り、生物及
び無生物の廣大なる全渾を裁制し、利用し、以て第五章に開陳したるが如
く尙ほ倍々増加して止まざるなり。

第三節 人種及其分布

對等條約實施後の今日に於ては嘗て紅毛碧眼の夷人として畏懼し將た
排斥したりし歐米人と軒を隣して雜住するに至れり、時勢の變遷も是に
至つて驚かざる能はざるなり、斯くて吾人は今や渠等と握手し等しき同
類の人間として交際し、其間に些の昔日の感情を留ざるに至れり、と雖、之
を三十餘年前の日本人の目に映したる彼等の容貌は今より見れば甚だ
奇異にして寧ろ抱腹に堪へざるものあり、即ち鼻は隆起するも、顔色の昏
白淡紅なる所は頗る氣味惡き所而して、頭髮を視れば卷縮すること恰か

黄色人種

蒙古人種

も當時の洋犬の夫れに酷似す、加之、其眸、眼の長大なるは、以て矮小國人を
畏縮せしむるに足る、而して最も初觀者を驚畏せしめたるものは其眼色
にあり、人間の眼球の紅彩は必らず黄色、若しくは黒色ならざるべからず
と信せし當時の人民に、一種碧綠の眼色を有する、而して言語通ぜず且つ
鷹の如き眼窩とアイヌ人種に似たる濃密の赤髯を以てす、之を疎髯斜眼
の日本人の眼よりす、如何に奇異の觀を呈せしかを想像するに足る、是れ
所謂白哲人種の掩ふべからざる實際の特質なり、翻つて彼歐人の眼に初
めて映じたる日本人は更らに奇異なるものにてありしならん、其身、幹の
矮小なる其智力の小兒らしきは先づ以て倨傲なる彼等の侮蔑を購ふに
足る、而して其風俗の蠻風を帯びて、異様な眼の黄黒にして斜長なる頭
髪の硬直にして黎黒なる數へ來れば一つとして奇ならざるなきを以て
なり、如斯奇々怪々の異様な人種が一度手を執り、道を通じて見れば禽獸
にあらざる、又た夷狄にてもあらざる、現今世界に於て最多數を占むる、二大人
種の代者なりしなり、時勢の變遷なればとて斯く互ひに奇怪の感を以て

黒色人種

猜疑したる二大人種が偶然にも一致協力同一命令の下に手を執り勢を分ち以て同じ黄色の支那人種を討伐せんとは、嘗に之れに留まらず、西洋を隔て、對峙せる兩嶋帝國が今や相提携して世界の平和を擔保するの任を盡さんとは、豈に驚ろかさるを得んや、世界の人類は之に留らず、足を一たび横濱神戸等の開港市場に入れんか、濃黄、淡黒なる印度人はまだしも、石炭色の容貌を呈し、低鼻、厚唇、眼光閃々市場を濶歩するを觀るを得ん、是れ即ち所謂黒色人種なる阿弗利亞加之ネグロなり、著者嘗て北海を航せるあり、船將に函館を發して南に向はんとするや、忽ち一異人の甲板を逍遙するあり、乗客互ひに目送して曰く、黒人に似て稍々黒色、淡く、黄人種に似て稍々黒く、頭髮の異黒なるは歐人とは云ひ難く、鼻骨の隆起せる所は黒人とは云ひ難し、抑々彼れ何人ぞと偶々ホーイに尋ねれば、彼れ得意顔に説明して曰く、是れぞ所謂銅色人種なる亞米利加インヂヤンにして其因襲する狩獵生活の自然的熱練は密獵船の銃手として高額の給料を握るを得せしむるに足り、今や之を持ちて京濱に歸るものなりと、衆唯

銅色人種

褐色人種

々として散ぜり、吾人は最後に南洋諸島熱帶樹林の陰に此地に遠征せる本邦人或は歐米人の配下に於て頗る從順に椰子の實を採集しつゝある褐色の一人種を擧ぐるによりて茲に世界に棲息せる人種の大群を通過せりと云ふを得べきなり、抑も人類は故意に若しくは偶然に一の地方より他の地方に而して頗る遠隔の地方に絶えず移住するものなるが故に、人類の或る種類の棲息區域と地理學的境域とは一致せず、其關係頗る錯雜せるを以て各種人類の間に判然たる區別を認め難く、従つて人類の分類には、今尙ほ其議論一定せるものあらざれども、亞米利加の人類學者ブリントン氏か、世界の人類を大群、左の四種の様式によつて區別せるものは、最も廣く行はるゝが如し。

ブリントン氏の人類區別

- 白種人種
- 黄色人種
- 褐色人種
- 黒色人種

種別	皮膚	鼻骨	頭髮	重なる住地	數及割合
一 高加索人種	白	高し	軟縮	歐洲、亞米利加、阿弗利亞、北部	六億七千萬 (四五%)
二 蒙古人種	黄	中間	直立	亞細亞、亞米利加、東南部、但し東南部を除く	五億八千二百萬 (三九%)
三 阿弗利亞人種	黒	低し	縮れ	亞弗利亞	一億五千萬 (一〇%)

銅色人種
褐色人種

四亞米利加人種 銅色 高低一様 種々 南北亞米利加 一千一百萬 (一〇〇七)
五馬來人種 褐色 高低一様 種々 南洋諸島、澳大利、亞弗 三千六百萬 (一〇二四)

六五四

是れ固より大體の區別にして其各種の中には無数の多少異なる民族種族を含み、又た此外にも四千餘萬の何れの部類にも屬せしむべからざる雜色人種もありて精確なる人種の分界は殆んど之を立つる能はずとは人類學者の言ふ所也。吾人は一々其等の記述に代ふるに別に世界の各地に於ける著しき人種の容貌を地圖に表はして挿版せり(人種分布圖)以て如何に異様の人種が各地に散在するかを知るべし。

人類全體の棲息地域に一定限界なきのみならず、人種中の或る種類に於ても一定の地理的分布區域の判然たるものにあらざるは前陳の如し。然れども吾人は各種の人類には夫れ々々繁殖に最も適當なる一定の地域は之れを認むるを得べし。而して之を人種の生起の重なる原因と考へざるべからず之に於てか人種の起因を考察するは避くべからざる順序となる。造化は何故に斯かる奇異多様の人種を世界の各部に現出したるかは是れ至難なる問題にして未だ人類學者の解答なき所なるか如けれども吾人は海岸の住民と山間の住民との間に其皮膚の色に著しき差異あり

人類の起因

氣候と皮膚の色

るを觀れば彼の其皮膚の黒色を呈するは熱と濕氣との共同作用に基くものなりとの學說に首肯するを得べし。

阿弗利加探検家リザンストン氏曰く熱のみは皮膚の黒色を生ぜず唯た熱と濕氣の伴ふ時始めて濃黒なる色を生ずるに至るが如しと又た他の同洲中心の探検者ニナインフルト氏は「平坦なる温地に住める種族は其色濃黒なれども中部の岩石多き山地に生活する種族は其強健なると同時に其色は單に淡黒なり」と。

氣候が特殊の人種を生じたる原因の總てにあらざるとするも之を生ずるに最も重要なものなることは争ふべからざる事實と云ふを得べく、氣候と共に氣候の依て生ずる場所及び其地形氣候に依て生じたる食物の性質及び分量等も亦た特種人種の發生に與かつて力ある原因なるべし。現存せる人種に就て顯著なる異同點を比較することによつてブリトン氏は以上の五種族を彙類したりと雖も、人類學者の之を承認するには之を以て人種の根源的の數となすにあらざ、根源的種族は更に少數にして恐らくは唯一種に過ぎず、然るを恰かも生物界に行はるゝ自然淘汰の力

志賀云 氣候寒冷 北方 弱く、水蒸気の 少く、植物の 生育力強か ず、多から ず、要するに 全體を開其 住人の皮膚 色は白く、 南方は熱帯 地方に於て 炎熱に強き 線熱多し、 植物の多し、 水蒸気多し、 茂物類に繁 蔭を多し、 皮膚を遊ぎ 膚を湿して 赤々たる太 陽に對する 皮膚黒くな

るが如く、此の如き地方に皮膚の黒色を有する傾向あり。白人種及びその間雑種は風土に因るもの多しとす。

が最初單純なる生物を變化して、種となし、種となし、以て現今の複雑多數の生物を現出したるが如く、其勢力は人種の上にも作用して、始めに人間を分化して、變種を生じ、遂に數種となせるものならん。従つて更に少數の根源的人種に集約せんとするは、一般の努力する所なるが如し。

第四節 人類の階級と其分布

無慮十五億の人類中には、形軀上に幾多の差異あるのみならず、文化の發達上に無数の階級あり。而して此等の種々の程度の人類が、從來は殆んど地球の各部分に割居して、以て特有の發達をなしたりしが、今や交通機關の發達によりて、殆んど孤立の生活をなす能はざる時期に至れり。文化發達の此程度を顯はすに、野蠻、未開、半開、及び開明の語ありて、一般に用ひらる。其意義に至りては、區々たれども、其職業によりて分つて普通となすが如し。吾人は此等の程度を顯はすに、人民と其住地との關係の疎密及び其關係區域の廣狹に依りて區別するを最も適切なりと信ず。此意味に於て先づ人類を不定住の人種及び定住の人種の二大區別をなすを得べし。

不定住の人種

一、不定住の人種 其生活をなすに當り、單に直接の必要物との關係のみを知りて、未だ此物を産出する土地との關係を知らざる人種是れなり。従つて此等の人種に於ては、未だ土地の所有權なるもの確立することなく、唯だ衣食の必要品の存否によつて、隨時其居を遷轉するものなり。而して此中には、又た土地との關係の厚薄により、二種に區別あり。即ち一ツは、絶えず漂泊的生活をなすものにして、他は一年の或る時期の間のみ一地方に定住するものなり。狩獵及び漁獵生活の民は前者に屬し、游牧の民は後者に屬す。而して夫の野蠻及び未開の兩人種は、此種に恰當するが如し。

(1) 野蠻の民 簡單粗造の武器を以て専ら天然に生熟せる動物を捕獲して、衣食するに過ぎざるが故に、走獸の棲む所、魚族の群る所は、是れ其集住する所に於て捕獲したる食物を貯藏して、後日の缺乏に用意するの念なく、然らずとも貯藏の手段を知らず、是を以て往々食物を獲るまでは、數日饑饉に瀕することば珍らしからず、常に漂泊的不安全の生活をなすもの是れなり。

(2) 未開の民 牧畜のために水草を逐うて遷移する所謂遊牧の民は、之れを前種に比すれば、頗る發達したる人種なり。雖も其生活の状態の必然の結果として、固定的居住をなすに至らず、従つて移轉に輕便なる天幕を以て家となす。

未開の民

野蠻の民

定住の人種

二定住の人種 前陳の漂泊の民及び半ば漂泊の民が、農業を營むを知り、茲に定住の域に達するときは、土地と住民との間に濃厚なる關係生じ、強固なる愛郷心起り、文化の基礎、茲に確立す。既に定住以上の人民に於ても、其生活の影響區域の廣狹に依つて、二種の區別をなすを得べし。所謂半開の民及び文化の民は、此區別に恰當するが如し。

半開の民

(1) 半開の民 不完全なる交通機關を有するに過ぎざるが故に、其生活區域は、僅かに狹隘なる郷土に限らる。若し其稱發達したるものと雖も、靜穩なる内海を涉航し得るに過ぎずして、大洋の波濤を凌駕する手段を有せず。又所謂近代の文明の利器を利用する能はざるのみか、却つて之を了解し能はざるか、故に之を嫌忌し、之に反對するものなり。現今の時勢に介立して、孤立を維持する國家を形成する能はざるも、亦た其特質の一となすを得べし。

文明の民

(2) 開明の民 其生活の根據地たる郷國に對しての密着の關係は、前種の民に離らざれども、單に天然地形に限らるゝに甘んぜず、従つて自國のみを以て其生活區域となさず、進んで、海洋萬里の大洋を越え、遙遠なる海外の人種と交際し、以て其國を富まし、其生活を高むるものなり。

此の如く世界の人類を以て文化の程度により區別して、次に其地理的分

各階級と地

野蠻人種の郷土

未開人種の住地

文明人種の據る所

布を觀るに、各階級の人類の住地には、固より判然たる一定の區域なけれども、主として各階級の占據する區域は、あれば、人類の發達が地理的事情に大なる影響を受くるものなることを推知するを得。前の各章に於て觀察せるが如く、熱帯と寒帯との氣候上の兩極端地は、即ち野蠻人種の郷土にして、其中間なる溫帶地は、其他の階級の發成區域なり。溫帶中にも高燥にして、植物の繁茂少き内陸の高原地方は、即ち未開人種の住地にして、河海に近き濕潤にして、特に穀物の繁殖する地方は、自餘の人種の棲區なり。低平なる河海に近き地方中に於ても、水陸交通の衝に當れる地方殊に溫帶北部の地方にして、海岸線の屈曲に富み、且つ地勢の複雑なる地方は、即ち文明人民の據る所に、之を距るに比例して、文化の程度を異にす。氣候上の兩極端に野蠻人の割據するは、一は天與の過剩が彼等の活動努力を奨励するの機なく、他は天惠の薄遇が彼等をして衣食の窮乏を免れんが爲めに、勢力を消費する以外に、其餘力を遺す能はざるによる。中帶に於ける自餘の階級の配置は、即ち文化が異種多數の人民の接觸の結果な

各階級と住民の
密度

人種退化の實例

國內に於ける此
階級

村内に於ける此
階級

ることを説明するものなり。遊牧人種と定住人種との住地の此差異は、實に氣候上の差のみならず、一定地域に於ける住民の密度によりても異なるが如し、此事實は既に定住の域に進みたる南方歐羅巴の人種が、人煙稀疎なる南亞米利加に移住したるによりて再び遊牧の民に退化したるによつて知らる。心霊の發育上よりなしたる此區別は、遠く世界の人類を通過せずとも、吾人の帝國内に於て之を認むるを得べし。

二万七千方里の内國四千五百万の同胞中、國の南北兩端には、今尙ほ野蠻の域を超えざるの蕃人あり、中央部に於ける海岸の風折に富める所は、即ち文化の域に達したる人民の住する所にして、此交通便利なる地點を距り去ること、遠き内部の山間僻處には、今尙ほ依然として半開の域を超えざる多くの人民存するなり。

吾人は全國に於てのみならず、數十乃至數百戸の小村落中に於ても、亦た彫かに此階級を觀るを得べし。

等しき強壯なる軀軀を享有し、其發育は既に成人の域に達しながら、一方には其心霊に於ては、發達はせず、不羈獨立の生活をなす能はずして、他人の配下に

一生涯に於ける
此階級

一個人の發達と人
類の發達

屈伏して、耻づるを知らず、自然の與ふる所に依賴して、不安心の生活に甘んずるものあれば、他方には、近く文明の利器を解して、天然の威力を凌駕して之を利用し、之れによつて千百の人類を其勢力の下に匿くものあり、而して其間には、亦た無數の階級あり、若し夫れ其中に於て一定の住宅を構へ、之を所有し、堅固なる生活根據地を有するものと、否らずして、深々他人の所有の家屋を借り、て一時の雨露を凌ぐものとの如きに至つては、其土地との關係の親疎の點に於て明かに前記の定住の民と、漂泊の民とに該當するもの也。

吾人は周圍の人類を觀察して、以上の區別をなすのみならず、吾人、一個の生涯を通過するときは、亦た以上の區別に、恰當する時期あるを觀るべし。人に依りては、其發育の未開若くは半開の域を超えずして、停滯するものなきにあらざれども、纖弱なる嬰兒の時代より、強健にして聰明なる成人の時期に至る迄には、或る意味に於て明かに前の諸階級を經過するを認むること難からず、是に於てか、一個人の發育と、人類全體の發達とは、其階梯に於て相一致するものあるを見るべし。

第五節 各人種の優劣と其將來

文化發達の程度に依つて生じたる以上の區別を皮膚の色によつて區別したる人種に對照するに固より同一色の人種中にも其據住地の異なるに依つて其階級を異にすべきは前陳の如しと雖も之を一般より概言すれば黒色人種銅色人種及び褐色人種は概ね野蠻若くは未開の域を超えず、白哲人種最も開明の域に達し、黄色人種にて文明の域に達したるは獨り日本人中に於ける大和民族あるのみ、他は悉く未開若くは半開の境を脱する能はず、概するに皮膚の黒より白までの濃淡は恰かも諸人種の心靈の發達の程度と一致するもの、如く、夫の白人種が世界は白哲人種の專有なりと揚言し、自信するが如きは實に謂れなきにあらざるが如し。是に於てか、各人種の優劣問題生ず、知らず、世界は白哲人種の專有なるか、凡て人類の歴史を通覽するに一般に高級にして優等なる人種は下級の劣等入種を征服し、之を統禦するを常とす、之れ管に入種間に於てのみならず、各個人相互間の生存競争場に於ても其常態とする所なれば、之を人類歴史の通則と見るを得べし、固より其間には無數の動と反動とあり、

世界は白哲人種專有なるか

人種の階級は各人種固有のものか

人が高級人種を壓倒したる例なきにあらざれど、而かも是れ一時の現象にして、終には下級人種は高級人種に征服せらるゝは争ふべからざる事實なり、此點より觀れば、世界は最優等なる白哲人種に征服せらるべきこと、彼等の自負の言の如しと謂ふを得べし、然れども各人種の此階級は各人種の固有の特質にして不變なるものなるか、否かは疑問に屬せり、等しく同一種類の人民にして其占領する土地の位置と形勢とによつて其程度を異にするの實例よりすれば、其發達が各人種の固有の特質にあらざるや、明けし、而して其特質と其程度とを異にするの主として地理的事情によるものにして、就中其第一條件が氣候にあるは前陳の如し、若しも各異の程度をして各人種固有のものたらしめば、或は若し氣候をして優等人種の自由に變化し得べきものならしめば、其謂ふ如く、世界は白哲人種の專有たるならん、然れども二者共に否らざるとは右の如し、乃ち如何に優等なる人種と雖も、自己の養成せられたる氣候を世界の隨所に現出し、能はざるが故に、一人種が氣候の非常なる相違地の他人種を征服するに

ヒアソン氏の研究

は先づ格段の氣候と戦はざるべからず斯くて氣候と戦ふ内には之を變化する能はざるに先ち自己先づ氣候に變化せらるべく況んや固有の氣候によつて味方せられたる土着人種あるをや。チャールズ・ピアソン氏は此問題に就て頗る精細なる攻究をなせり。先づ白哲人種の世界に於ける活動區域の驚ろくべき速力を以て地球の全面に向つて膨脹し來れるを叙し、次に之が爲に亞米利加及び濠太利に於ける土着人種の消滅に歸し、若くは滅絶に瀕する事實を擧げ、然れども其原因は彼等の少數なりしと未だ産業に就くまでに進歩せざりしとあれば之を以て世界は白哲人種の專有し得べきものと速断すべからざるを断じたり。
一、二の優等人種が世界の全部を征服し之を獨占することは有り得べからざること右の如しと雖も温帶を占領したるが故に優等に進化したる人種は他の兩帶に占居したる人種に比すれば變異せる氣候に對して遙かに大なる抵抗力を有すれば世界の主權は常に温帶に發育したる人種の掌握する所なりと云ふことは差支なかるべし。蓋し温帶地方の氣候た

温帶人種の世界

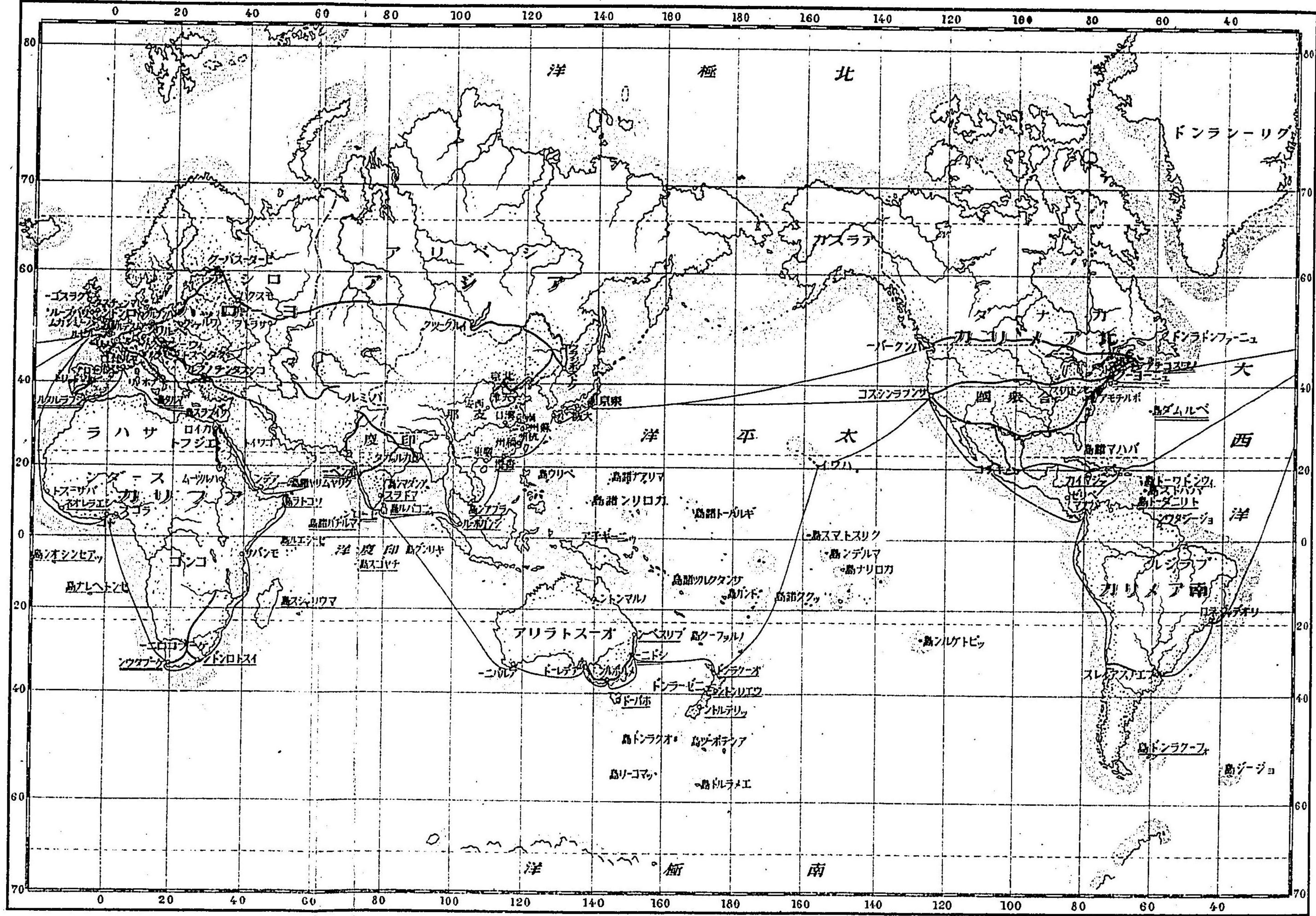
世界の主權者

其理由

將來の世界は白黃
兩色人種の舞臺

るや、一年中に春夏秋冬の變化あれば固より寒暑中和の時期多きが上に、嚴寒及び酷暑のあるあり、之によりて平時に於て多少兩極端の氣候に其身體を鍛練するを得れば、一朝極端なる氣候の地方に移住すとも、一時能く夫れに抵抗して滅亡を免るゝに便なると、彼の終歲殆んど一樣なる一極端の氣候帶に棲息する人種の比にあらず、是れ實に劣等種族が僅かに其土着の郷國に於て大なる氣候の援助を得て、新侵の優等人種に抗するを得るに反して、優等人種が寒熱兩極の氣候帶に侵畧膨脹するを得る所以なり、此事實は明かに各人種の數に於て顯はる。
論じて茲に至れば吾人は現今の世界は白黃兩色人種の拮抗消長の舞臺なりと斷ずるの理由あるを知る、否、管に將來の臆測のみにあらず、過去に於て歴史あるのみならず、現在に於ても既に世界の各方面に於て顯彰なる事實あるなり、近世に入りてこそ白哲人種は黄色人種を征服し、頻々亞細亞に侵入すれ、即ち印度を蝕し、西比利を蝕し、滿州を蝕し、將に支那をも蝕せんとするの勢あれ、而も一度中世史を緝かば黄色人種の白哲人種

世 界 人 口 疎 密



兩温帯人種の對抗
 將來の運命を左右
 すべきは支那人か

を征服し、深く全歐に侵入したると一再にあらざりしは其上に顯なる所
 現に東羅馬を征服したる者は今尚ほ依然として東歐の一隅に割居して
 其遺蹟を留むるにあらざりや、豈に舊に史上に於てのみならんや、現に米洲
 に於て、濠洲に於て黄色人種排斥の聲は日に月に高まり、而して其初め牽
 強附會の理由の下に支那人のみに留まりしものが次第に其範圍を擴め
 て本邦人にも及ぼすに至りたるにあらざりや、之れ明かに自哲人種の恐怖
 に基くものにして、乃ち兩温帯人種の對抗にあらずして何ぞや、さればに
 や、チャールズ・スピアン氏も土着の氣候の援助あるものに對しては、黑人
 種及び其他の人種決して侮るべからざれども、將來の運命を左右すべき
 最も恐るべきものは寧ろ支那人ならんと結論せり。蓋し遺傳の法則の必
 然の結果より推斷したることなれば争ふべからざる議論なるべし、曰く
 『生物學者バクマン氏傳遺の法則によりて人種の將來を論ずる中に、自然
 淘汰によりて、体力を鍛練したる人種、同じ理によつて質素に生活したる
 人種、而して充分なる生殖力ある人種は、現今の歐人に代るべしと云へる

志賀云は隨處に人口多からず。然れども、平河、原、沿、谷、沖、積、層、の、地、方、多、く、岸、に、は、山、岳、多、く、地、味、多、く、海、層、の、地、味、多、く、川、原、の、沿、谷、に、は、人、口、多、く、平、地、に、は、人、口、多、く、沖、積、層、の、地、味、多、く、方、積、層、の、地、味、多、く、方、積、層、の、地、味、多、く、坦、地、に、は、人、口、多、く、航、運、便、利、に、は、人、口、多、く、此、所、に、は、人、口、多、く、山、岳、多、く、す、山、岳、多、く、地、味、多、く、薄、地、に、は、人、口、多、く、自然、の、不、利、に、は、人、口、多、く、對、方、に、は、人、口、多、く、

が、此條件を具備すると最も多き人種は支那人なり」と。

第六節 人類の數量的分布

地表の各局部には人類の種類の分布あるが、如く同一地積に於ける人口の密度も隨處に同じからず、即ち人類は地表上に數量的分布をなすなり。統計學の進歩と地理的發見の擴張とによりて社會に於ける此に關する智識は他の方面に於けると同じく次第に増加し、且つ確實となり、吾人は之によりて大體の分布圖を得たり、日本人口の分布圖(第七十圖)及び世界人口の分布圖(插題)是れなり、固より大體を表すに過ぎずと雖も、依りて以て人類の數量的分布の一斑を知るに足らん、さて其原因に至りても固より多端複雑なるべしと雖も、吾人は前諸章の記述を願ひ、且つ近く四圍に於ける比較觀察によりて、大凡の説明をなすを得べし。

凡そ人類は其呼吸の爲めに一定の濕氣を要す、其適度は五〇乃至七〇% なれば甚しく乾燥したる地方には人類の生存する能はざると前陳の如し、大陸内部の無雨地方に人類の稀薄なるは是かためなり、又た甚だしき

力を以て能く
自然の今日、
東部の野、
に人口稠密の
區域となる
べきのみ。知



第三篇 地球を舞臺としての人類

生活現象

第二十三章 社會

第一節 社會とは何ぞや

「社會」の意義
社會て、ふ、語、ほど、廣、漠、たる、意義を以て使用せらるゝものはなかるべし、或は社會の爲めと云ひ、或は社會の制裁と云ひ、將た「教育社會」と云ひ、「經濟社會」と云ひ、「社會主義」と云ひ、「社會黨」と稱し、而して通俗には「世の中」、「世間」若くは「世上」と云ひて、新聞紙上に、將た個人間の談柄に日として聞かざるなきに至れり。然も一度其語の意義を願れば、現今幾多の論者が此語を用ふるや、甚た不注意、放縱にして吾人をして愈々混雜不明に陥らしむるものあるが如し。是れ實に史學、經濟學、政治學、法學等の社會的科學が、夙に發達進歩したるに拘はらず、此等諸科の根本なる社會學の發達が漸く近時にあ

社會の行動

りし所以にして同時に結果ならんさはれ既に曖昧ながらも世間一般に
日常通用せられて怪まれざるを觀れば社會の意義豈に確定せられ難き
ものならんや然り社會の性質に就きての吾人の智識は幾多學者の闡明
によりて稍々確然たるを得るに至れり人若し一己の私利の爲に不義の
財貨を貪ばらば忽ち社會の輿論は之を認めて之を排斥するにあらずや
稱して社會の制裁と云ふ之に反して若し又た一己の利害を顧みずして
公衆の爲めに一事業を企つるものあれば社會は則ち其効績を認め之を
賞し之を敬するにあらずや斯くて人々の一行爲は忽ち褒貶毀譽の反響
を受く人は之を喜び之を恐れ道德の或る程度にあるものは之によりて
其身を修め其行を正す然らば之を制裁し褒貶し毀譽する所のものは
何ぞ固より吾人は一個の身軀の如く之を目睹すべからずと雖も既に行
動ありて吾人之を認識し之に服従する以上其主軀を認識し得べからざ
るの理なげん然らば此行動をなし制裁をなす本軀は何ぞ曰く社會とは
多少恒久なる關係に於て生活する諸人の一團體なり而して吾々個人は

社會本體

其範圍

其中の一成員たるなりと云ふを得べし
然らば其範圍は如何茲に多數の聴衆を集めて開催せられたる演説會場
あり其内に一人の酔狂者ありて演説の妨害をなすとせよ此時に於ける
全體の輿論は彼の行動を批難し遂に之をして退場せしめすんば止まざ
るべし蓋し茲に集まれる千百の聴衆の全體は同一の目的を以て集まり
共通の興味によりて解散を免れ暫く結合せられたる一の小社會たるな
り茲に又た吾人の隸屬する家族並に周圍に多數の家族あり此等の家族
は父子夫婦兄弟奴婢等の關係を有する諸員數より成り此等の各員は各
々日々一定の職務を分擔しつゝ共通の生活を遂げ斯くして數代の間同
一の共同生活をなす此時に於て其一部分は自己の職務を怠るときは忽
ち家庭の混雜を生じ其平和を害し家庭の繁榮を妨げ遂に破滅に至る又
た是れ一の小社會なり數十數百乃至數千の學生を收容する學校も其中
には學生を指導する所の教師之が教導の下に教育せらるゝ生徒學校の
全體を指導する所の校長學校の事務を整理する事務員此等の指揮の下

社會なる念觀の要素

六七六
にありて諸員間の連絡を通じ、校舎の掃除等を司どる校丁等、諸種の職務を分擔しつゝある内に、全員一團躰となりて學校なる一定の目的を遂ぐるは亦た一の社會なり、斯の如く觀察し來れば、町村も都市も、將た其他の地方的團躰も、皆各々の社會を形成するなり、若し夫れ國民に至つて最も完備整然たる社會たるなり、社會なる語は尙ほ此等に留まらず、時に民族と同一の範圍に用ひられ、又た近來は一層廣汎となりて、遂に世界の全躰に適用せられんとす。
是に由つて之を見れば、社會なる語は、下僅少の數人より成れる家族より國民、民族、世界の全人種迄を包括する名稱にして、其範圍は之を用ふる場合によりて差異あり、乃ち場合によりて其意義を異にすれども、以上列擧によりて社會の觀念に左の要素を含蓄するを觀るべし。
一、社會を組成する原素は、諸種の個人より成ること、恰かも生物體が各個の細胞より成るか如し。
二、此諸個人は、共通の目的を有すること、但し此目的は無意識的なるあり

社會の定義

意識的なるあり。
三、諸個人相互は、多少恒久なる精神的の關係を保つこと、恰かも生物體の諸原素相互の關係の如し。
四、一定の場所に集合して、生活を爲すこと。
五、斯くて諸個人は、相結合して一團躰を形成すること、猶ほ生物の形體の如し。
六、諸個人は、全員の生活の爲めに、一部の職務を分擔すること、恰も生物の諸機關に於けるが如し。
然らば、即ち社會とは、共通の目的を有し、多少恒久なる精神的關係に於て、一定の土地に集合し、相俱に生活する諸人の一團躰なりと定義するを得べし。

社會の二部類

第二節 社會と社會的團躰

「社會」と云ふ語によりて表はさるべき以上列擧せる大小の團躰を更に通覽するときは、其間に重要なる差別ある二部類に區分することを得、則ち

村落都市國民等の結合團體は諸々の個人が漸次に集合し増大して成りたるものにして眞正の社會と云ふべきものなれども學校演說會教育社會交際社會經濟社會等の種々なる團體にありては前種の成立とは全く其事情を異にし前種の社會の成立したる後に於て其社會の成立を確固ならしめんか爲に或は社會の目的を達せんが爲の或る手段として發せざるものに過ぎずされば後種の團體たるや前種の眞社會の爲に或る確定せる一部の職能を遂げんが爲に眞社會存立の基礎の上に存在するものにて之を有機體に對比すれば正に四肢五官等の諸種の機關に相當すべきものたるなり故に社會學者は此等の團體を表はすに社會的機關社會的團體或は社會的機用的團體等の名稱を以てして彼の眞正の社會と區別せり此意味に於ける社會的團體は人類の合衆によりて成れる社會より分化したるものにして例へば彼の有機體が特殊なる筋肉機關を分化したるが如く而して各々一定の目的を有し全體社會の職能の一部を分擔し相互に依從して生活をなすものなり彼の政治的機關の如き實業

社會的團體及其分化

吾人と社會

的機關の如き將た教育的機關の如き未だ社會の確固たる形成なき以前に於ては悉く社會の要素たる各個人に於て凡てを經營して其生活を遂げざるべからざりき然るに現今の文明に於ては吾人は社會の全體の生活より見れば其中の最も微細なる一部分を分擔し之を以て社會に或る種類の貢獻をなすことの代りに社會よりは其外の一切の自己の生活に要用なるものを給與せらる其最も卑近なる實例は之を家族生活に於て觀るを得べし

家庭の分業

夫 婦 親 子

夫は外に出て、労働し、賃金を得て家族の生活を擔保し、一家の防衛の任に當り、且つ家族の全員の統禦に任じ、婦は内に在りて家政を司り、衣服を製し、食物を調理し、以て夫をして内顧の慮なく、而して衣食に其勞を用ひしむるなく、外部の労働に従事するを得せしむるのみならず、子女の養育に心身を勞す若し夫れ夫婦の上に兩親あれば、或は家政全体の監督に任じ、或は其年長の經驗よりして、夫婦の生計の顧問となり、補助者となり、或は孫兒の保育に任ずる等の職務を分擔し、以て家庭の繁榮を計る。幼少なる子女に至りては一見家族に對して何等の分擔なく寄生する厄介物の如きも、而かも注意するときは不知不識の間に家庭の爲に高尙なる職務を分擔するを觀る。單獨生活の男若くは女

白金も黄金も玉に
なせむに、まさ
れる寶子にしかめ
やも。(山上樵真)
とは之れ其重要機
關たることを表出
したるものなり。

六〇

彼無責任に日を忘るゝことを得べしと雖も、一度婚姻をなして家庭の成立するときは、遂に責任の新觀念起り、殊に子女が家庭内に生れ来るに及んでは一層然り。即ち夫妻は直接に子の身と發育とに注意し、又た其未來の幸福に準備せんが爲に、其一身の幸福を犠牲に供して働くに至る。而して此犠牲に供したるによりて他の子女を有せざる親の得て想像する能はざる一種の新たにして高尚なる快樂を得、又た如何に他人に對し無情に且つ無責任なりし人も、子の爲には有情となり、慈親となる。されば子は實に其父母をして道徳的人格を發展せしむるに缺くべからざる機關と云ふべし。尙ほ子か家族生活に重要なりと見るべきものは、そか家庭に於ける平和の神たり。家族の社交の中心たるにあり。此事は子供なき家庭の如何に寂寞に、眞面目に、殺風景に、俗に所謂火の消へたるか如きによりて認むるを得む。

斯の如く家族の各員は家族全體の生活の目的を達する一手段たる特殊の職務を夫々分擔し之によりて互に相補助し、相依從して、以て一小社會の生活を遂ぐ、然らば其等の機關は家族なる一小社會の成立したる後に發生し、分化したるものなり。

是故に相集まりて家族を形成する所の此等の階級員が個々に別居すると假定せんか、其各個人は凡ての仕事悉く一身にて處理せざるべからず。所謂八

人頭を日々に演ずるも尙ほ其生活を満足に遂ぐる能はざらん。是單に一の假定にあらす現に吾人の周圍にある個身生活者の日々遭遇する所のものにして、又た成人が嘗て獨立生活を追想するによりて容易に反省する所のものなり。

家族なる一小社會の此等の分析的觀察を、直ちに吾人が其中の一員となり、其恩恵に浴しつゝ生活する一層廣大なる社會——村落、都府、地方、邦國等に轉ずるときは、其團體の範圍の廣サに比例して、益々複雑なる機關(社會的團體)の多種なるを觀るべし。是れ本書の爲めには頗る重要なる所請ふ章を改めて尙少く細觀する所あらん。

第三節 全體社會と部分社會

吾人は既に一般に社會なる名稱によりて表はさるゝ團體の中には、根本的の社會と社會の成立後に發生したる派生的なる社會的機關の二種あるを觀察し、而して根本的の眞正の社會なるものは、家族、村落、都市、府縣、邦國等なることを觀察したり。今ま此等の團體、即ち社會に就て稍々詳細に入らんか、忽ち此等の社會は相互間に秩序なく同列に並立するものにあら

上級社會と下級
社會
全體社會と部分
社會

ずして、其中には、大小上下の區別ありて、小は大に包含せられ、上級の社會は下級の社會を統轄し、秩序整然たる系統を以て成立し、相依從するものなるを觀るべし。國家の一部分にて其統一の下に府縣あり、府縣の下に都市あり、町村あり、町村の下に家族あり、家族は其團體の最も自然に出て最も單純なるものなり、是によりて之を見れば、等しく社會と云ふも、其中には上級なる全體の社會と下級なる部分社會との區別をなすを得べし。國家は全體の社會にして、其下位の團體は實に國家なる全體の一部分の社會なり。

現在に於て全體社會の下級に位し、其部分をなすものも之を過去に溯りて觀察すれば、往時に於ては最高にして完全獨立の一社會たりし時代あり。神武天皇の東征を決し玉ふや、東方に美地あり大和と云ふ、邑に君あり、村に長あり、以て相凌轢す云々。と社會の未だ發達せざる渾沌たる時代に當りては、今日に於ては國家なる大團體に對して一小發細なる部分社會として國家に統一せられて生活する町村も、最高の權力を有する獨立の社會として生存したるものなりしを知るべし。然るに神武天皇の東征を始め、歴代の御凌威によりて統一せられ、今日は一道廳三府、四十三縣に分劃せられ、更に郡、區、市、町村に分劃せら

るに至れり。之に於ては、往時の各藩なる封建的區劃は、今や郡縣なる行政的區劃となりて、其土地は依然として大差なきも、往昔の各藩が或る點迄は、殆んど獨立の權力を有する小社會として存立したりしに反し、現今に於ては全く國家なる全體社會の一小部分として存し、唯だ其統一の下に法令によりて許されたる範圍に於て一部の自治をなす社會たるに留まるに至れり。

由是觀之、未開の時代に於ては、獨立に各地に發達したる完全なる小社會は、時勢の變遷に應じて漸次に合同し、統一せられ、遂に國家なる完全なる大社會に達し、之に於て、遂に或時代までは完全なる小社會として存立せし町村、府縣等は、國家の一小部分なる部分社會として存立するに至りたること、恰かも社會に漸次社會的機關、或は機用的團體の分化したるが如し、之を要するに、最初獨立完全の小社會は、上級の社會が發達する後は、其下位にありて、部分の社會となるなり。斯くて各部分社會は、上級の全體社會及び各部分相互に對しては、勞を分ち業を異にしつゝ、互に相助け、相俟て始めて自己も他の部分も亦た全體も生活するを得、故に部分社會は全體社會が生活を失ふときは、當然其生活を變じ、全體社會も各部分社會に

於て各々其職とする所を務むるに非ざれば生存するを得ざるに至るものなり。

分部分社會と機用的團體

其異同

部分社會が全體社會の一部の職務を分擔して生活すべければ、即ち其部分社會は全體社會の一機關若くは機用的團體となりし理なり。然らば曩に區別したる眞正社會と社會の機關として分化したる機用的團體との區別を再び論究するを要するに至れり。嘗て上級社會の形成までは獨立全體の一社會として生存したりし小社會も、上級の社會形成後は其機用的團體として、一部の職務を分擔して生存すべければ、社會形成後に分化したる機用的團體と果して何等の異同がある。曰く

- 一 彼れは所屬の社會の形成の後に於て發生したるものなるに、是れは上級社會形成前に存在し、其形成後に於て其位置を移動したるにあり。
- 二 彼れは一定の目的を有して分化したるに、是れは一定の目的を意識せざる内に既に發生せり。
- 三 上級の社會に對すれば兩者は等しく其部分にして、其機能的團體なるが如しと雖も、部分社會其物のみに就て觀れば、是れは社會の主体にして彼れは其機

關たり。例せば村落、既に發生すれば直ちに一部の職務を分擔する村民の一體を生ずるが如し。

四、部分社會中の都會の如きも、社會發達の或る程度に達したる以後に村落より分離して發育したるものなること、恰かも機用的團體の分化と異なる所なし。

五、社會の本體より分化したる機用的團體も、社會の發達に伴ひて更に無數の分業の生ずること、恰かも社會の主体の發達に伴ふて無限に機用的團體を分化すると等し。是によりて之を見れば社會の主体に附屬する機用的團體は所屬の社會に對すれば社會の作用に過ぎざれども、機用的團體其自身より觀れば一部獨立の社會たること、村落都會等に於けると等し。

以上兩者の異同を比較觀察するときは機用的團體と云ひ部分的社會と云ふて兩者と區別すとも、其區別の要點は其發生の起源にありて、現在の作用上にはあらざるや明けし、然らば兩者の區別の如きも其發生の研究に對しては必要なりと雖も、現在の社會の分析的觀察に於ては、必要ならざるべく、從つて彼の教育社會、實業社會等て、社會の機用的團體の如きも他の部類の分部分社會、即ち村落都會等と等しく、一部獨立の社會と稱すとも

妨げなかるべし但し

六、機用的團體を社會の機的分化の部分社會とすれば、他は機的部分社會なりと見做すべきのなり。

との區別をなす得、此區別は次の一例に於て之を見るを得べし。

茲に一人が其行動によりて日本の教育社會を排斥せられたりとせよ、此人は既に全國に於ては教育の職務に従事すること能はず。然るに其人は教育以外の業務に従事するときは全國に於てのみならず、其の町村に於ても何の故障なく生存し得べし。然るに又一人ありて某の町の社會に排斥せられたりとせよ、此人は既に其町村の何の業務にも従事して生存する能はざれども他の町村に至りて再び排斥せられざる限りは何れの分業にも従事し其の社會に容れられ得るが如きは實際に多く見受る所なり。

機用的團體が一部獨立の社會たるや否やを決するに當りて尙ほ一の考察すべきは前述の社會の要件を具備するや否やにあるが、此等の機用的團體を以上の要件に對照するときは、其全部を具備するを觀るべし但し第四項の一定場所に集合して生活するや否やの一點に於ては多少の異論あるべしと雖も是れを一定の場所の範圍内に集合して生活をなすと

云ふことは妨げざるが如し。

第四節 社會の心意

人が社會の制裁を恐れ、社會の褒賞を悦ぶことは、是れ即ち社會に心意生活のありて作用することを承認するものなり。社會の精神は一見目睹し感覺する能はざるが如しと雖も、惡人の行爲を忽ち認識し之に對つて嚴酷なる制裁を加へて其人をして再び社會に立つ能はざらしむることは、是れ吾人の周圍に夥しき例證ある所之に反して社會が善人の行爲を認め之に名譽を負はしめ之を尊敬することの顯著なることも亦た實に無數の事實に吾人の接する所なり。然らば善惡を認識し之を判斷し之を悦び之を怒り之を褒貶し之を獎勵し之を仰壓するの心意作用の存するとは恰かも兩親が其子に加ふる心意作用と何等の異なる所なかるべし。壁に耳あり障子に目ありとの俗諺は是れ實に社會の心意作用を承認したる語にあらずや。則ち社會も個人と等しく智情意の心意作用を有するを觀るべし。

吾人が夫れ自身に屬する心意上の所有品と信するもの、多くが少しく考察するときは實は皆な社會の精神的財産にして社會の所有なることの奇異なるに驚かざる能はざるものあり。言語の如きは最も卑近の一例なり。吾人日本國民が特有の言語を有するが如く、他の諸國民も亦各々特有の國語を有す。加之、一地方には又其地方固有の放言あり、而して社會中の各部類にも各職業團體、又は各家族に於ても夫々特有の用語ありと云ふを得べし。此等は皆其特殊なる社會の所有する所なるによりて、其特徴を表はすものにして、單一なる個人の案出にあらず、従つて何人も之を以て一己の所有なりと要求する能はず。個人は其所屬せる社會の所有たる言語を習はざれば、社會の成員となりて生活を遂ぐる能はず。言語既に社會の所有たり、言語によりて表出せられ、傳達せられ、將た先代より後代に繼承せられたる思想、信念の如きも等しく社會の所有なるは容易に了解せらるべき所、個人が社會に容れられ、茲に於て生活を遂げんが爲には、即ち言語と共に、此所屬社會の所有たる思想、智識を會得せざるべからず。學

校教育の主要なる勞働は實に先代より遺傳して當代社會共通の所有たる言語及び智識を傳達して、以て少年をして社會に入り、社會の成員として生活を遂ぐるの準備をなさしむるにあり。言語及び思想と共に、實際の生活上に實現せられたる人間生活の方法を、爲めに使用せらるる器具(武器、什器及其他の器具)も亦た社會の所有にして、個人的所有に非ず。されば個人は又た社會の生存競争場裏に生活せんが爲には、先づ此等共有の方法を習ひ、器具の使用に熟せざるべからず。

現在に吾人が日常執る所の業務、即ち農業、漁業、商業及其他階級の業務に於ける方法、或は食物の調理、衣服の製作及び其常用の方法等の如きも、亦た吾人の存在する社會なる團體の共有に外ならざるなり。此等の器具、方法が又た特殊の社會に伴うて夫々特色の形状、方法を有するを見れば、社會の所有なること更に明瞭なるなり。

以上の事項は皆人間精神の智能的活動の成果たるなり。然らば即ち智能的生活は個人に於けると同じく、團體社會に於ても之ありと謂ふを得べし。所謂常識なる語は即ち一社會特有の智識を粗ぼ言ひ表はせしものに

して、其が發して普通の行動判定の標準となるなり。

特殊の社會を表はす所の各種の團體は、又た各々特殊の感情生活をなす。此感情生活は個人の心意生活の時々刻々變動あるが如く、又た時々變動あるなり。明治二十七年日清戰役直前の日本の社會は如何に沈鬱なりしか、之に反して豊島海戰勝利後の日本社會は如何に歡喜と満足と自信とを以て、憂の沈滞憂鬱を恢復せしかは、當時を追憶するによりて著かに認むるを得べし。社會の感情作用の最も顯著に表はるゝものにして、且つ其大なるものは恐慌、一揆、騒動及び革命等の現象に如くはなし。此等の場合に於ては恰かも一個人の非常なる恐怖、憤懣、強怒等に於けるが如く、他の心意作用は全く情緒作用に制伏せられ、獨り感情作用のみが社會の心意の全部を占領せるものにて、彼の感情を制御し、調和すべき理性の作用の如き、全く心意外に放逐せらるゝが故に斯かる場合に於ては、其行動は殆んど過激に失し、狂暴に陥り、正鵠を認らざるもの甚だ夥し。所謂社會の盲動なるものにして、一種の流行病の性質を有するなり。此等の感情が發

動するや、其初めは意識的なれども、之が群集中に傳播するときは恰かも波動の輻射するが如く、遂に全く反射運動を惹起す。是れ流行病的盲動の生ずる所以なり。

彼の演說會場に於ける聽衆が拍手喝采をなす狀を觀るに、一部少數の人士は眞に感動して之を表出するのみにして多數のものは、之に倣ひ、思慮を費やさずして、殆んど無意識に同一の行動に出づること、吾人の屢々目撃する所、亦た突然、危難に遭遇したる場合に於ても、一群の人が狼狽して逃走するに當りて、自己は其何の故なるかを知らざる間に、同一の行動をなすが如きも、其類、風聲鶴唳に驚き、軍氣の沮喪するが如きも、全く此現象に外ならざるなり。而して其等の情緒的流行病に感染せられ、易きものは、多くは物に感動し、易き多血性の人民、米、開入若くは少年等に多し。近來各所に流行の如く、學校騒動の類りに出づるは即ち之なり。彼等の銳氣勃々たるや、其欲望と實現との間に幾多の手續あるを顧慮するの念なく、一朝の怒に乘し、直ちに理想を實現せんとする傾向あるが上に、集群中の個人には責任の觀念なく、唯々各個人は群集の力を頼み、如何なる事なすとも、悉く一群の共同負擔なりと心得、爲に一個人としては得爲さざる事も、敢て爲し、以て盲動に陥るなり。

既に社會に智的生活、感情生活のあるを、知れば、其等の結合し、固定して生

社會の精神は想像
的のものにあらず
其基礎は何處

六九二
ずる意志生活の存在するは當然と言ふを得べき所而して是れ又た最も
卑近に認識するを得べきことは前陳社會の毀譽褒貶をなし尙ほ進んで
之を行動に顯はすにて知らる夫の法律の如き政策の如き將た國家の宣
戰講和の如き悉く社會の意志の發表に外ならざるなり斯くて或る社會
は内治政畧に專注し他の社會は外交政策若くは軍事的攻守に繁く又た
他の社會は實業的經營に忙はしく而して同一社會に於ても一の時代と
他の時代とに於て其活動を異にし以て夫々社會の特色を表はすなり
由是觀之社會の精神なるものは吾人が自己内心を自省するによりて自
己の精神生活を明瞭に具體的に認識するを得るが如く社會を認むると
共に認識し得る所の完く具體的の者にして單に人間の思想上に想像す
る抽象的の者にあらずるを知るべし果して然らば其精神作用の據て生
ずる基礎は何處にあるかの問題生ずべし社會の精神とは云へども各個
人を離れて存在するにあらずして其存立は社會を組成する各個人の精
神中にあるなり其れ等の各個人の精神が相聯合するによりて個人精神

以上の聯合體を生じ此精神聯合體は次で成員たる各個人の意志を支配
するに至るものなり然らば各個人に存在する精神か如何にして結合し
其聯合體たる社會的心意を生ずるかは一人が他人を模倣するか又は之
に同情を感じ斯くて遂に全員に及ぼすによる也抑々個人の精神作用の
生理的基礎が各個の腦髓にあり其腦髓を組成せる多くの細胞が互に運
動し相聯絡するによりて其人の心意現象が生ずる如く各個人の腦髓は
社會なる一の大なる有機體の腦髓を組成せる個々の細胞にして其等の
細胞の運動が互に相傳播し聯絡し遂に社會の全員に及ぼし以て大なる
社會精神なるもの生ずるなり而して此聯絡の媒介をなすものは言語舉
行書籍新聞雜誌等なり

第五節 社會の進化

夫れ生物の形體を組成せる各分子若くは各部分の時々刻々新陳代謝し
て止まず即ち生活體の各部分に始終其變化あるも此各部分を以て組織
する全體は依然として生存し生長し進化す社會も亦た斯の如く全體の

社會を組織する各個人は生滅出沒極まりなきのみならず個人と全體社會との中間に位せる部分的小團體の中にも其の變化極まりなしと雖も全體の社會は依然として生存するのみならず漸次生長し發育するを觀る。常に社會の面積大サを増す物質的方面に於てのみならず精神的方面に於ても漸次發達し、上進するを觀る。即ち一の時代に於て成熟したる精神的財産は、當時代の各個人の死滅と共に滅亡するものにあらざ、口碑となり、傳説となり、或は書籍として残り、以て後代に傳へ、後代は又た更に之に新發見の財産を附加して、後代に遺し、斯くて次第に精神的産物の蓄積は豊富となり、饒多となる也。

社會國家の膨脹なる語が社會の範圍の擴張及び其成員の増殖、即ち團體の増大を表はすに用ひらるゝが如く、社會の發達若くは開化なる語は社會の組織の單純より複雑に進むを表はし、又た其精神的、生活の上進を意味するが如し、即ち前者は外延の擴大を意味し、後者は内容の充實を意味するが如し、生物學上より藉り來りたる所謂進化なる語と上の兩語との

表はず思想の範圍の關係は甚れ曖昧にして區劃なきが如しと雖も、想ふに物質的膨脹と精神的發達の兩方面を包含すと解して、誤りなきに近からんか、社會は進化するに従ひ、其社會の諸部分の分化愈々甚しく、分勞と協力との關係愈々廣く、且つ益々密接となる。斯くて會社は益々大なる渾一的の團體となり、其部分は愈々調和し適應し、因は果をなし、果又た因となりて、社會は益々進化する。現今の社會は即ち其頂點にして、又た進化の途中に在るものなり、社會の進化に就ては尙ほ精査すべきものあれど、吾人は説明の便宜上暫らく後章に譲らん。

第六節 社會は有機體なりや

以上社會の分拆的觀察によりて、社會は一種の生活體にして、團體の結合によりて其大サを増すこと、内部の機關の分化増殖によりて發達すること、要するに社會は他の有機體の如く進化をなすこと、而して此等の分化したる各部分は全體より分離して生活する能はず、全體は又た此等の部分の作用を離れて生活する能はざること等は、恰かも凡ての動植物の生

物質の二種

活体と對比せらるべきを知れり。動物は其生活によりて漸次に其体の大
サを増し、之に伴うて其構造と機關との分化を増し、各部分は生活体を分
離して生活する能はざると等しく、全体も部分を離れて生活する能はざ
ればなり。然らば則ち吾人は、此等の觀察によりて、社會は生理的に一種の
有機体なるを得。凡そ物質の集合体に二種あり。

金石土塊の如きは其一種にして、動物、植物等生活体は他の一種なり。前種の物
体にありては、數個の物質が同一時に同一場處に集合したりと云ふのみにし
て、分子相互の間に何の關係なし。故に今若し其一部分を缺き失ふことありと
も、他の分子に對して何等の關係なきのみならず、其金たり、石たり、土塊たるこ
とに於ては依然として異なることなし。之に反して後種の集合体にありては、
前者の如く、數個の物質が同一の場所に集合して存するが上、物質と物質部分
と全体との間に、生活上親密の關係ありて一の分子に異動あるときは直ちに
他の分子及び全体に大なる影響を及ぼす。即ち各分子、各部分も各々其勢を異
にし、互に相助け相俟ち、相協同して後始めて全体も各部分も生活し得るもの
なり。故に例へば動物の身中に胃を取り、或は腦を除く等部分の變動をな
せば、即ち全体は死に至り、此に至りて各部分間及び部分と全体との間に是迄
有したりし關係は全く消滅して、第一種の集合体と化す。

無機体及有機体

生理的及び心理的有機体

他の有機体と社會との差異

學者は此二種を區別して一を無機体と云ひ、二を有機体と云ふ。萬物は悉
く此二種に包含せらる。社會の性質を研究して學者が有機体と云ふは、單
に空想的類比に非らずして、實際に有機体なりとするは、吾人の首肯し得
べきにあらずや。ハーバート・スペンサー氏は動物が三体系の機關を有す
るを指摘し、之に對比する社會の機關を下の如く列挙したり。即ち社會に
實業の圓體ありて保給的機關をなすは、動物の營養機關たり。商業的の圓
體ありて運輸及び交換をなす、分配的機關は、動物の循環系統に當り。治者、
被治者等ありて、社會の統一的、整理的機關をなすは、其神經系統に當ると。
社會は又た個人が有すると等しく、心意作用を有す。而して其心意は個人
の心意が相聯合するにより生ずるものなるを觀察したり。即ち社會は
精神の結合体たるを知れり。然らば社會は生理的に一種の實際の有機体
たるのみならず、心理的に於ても亦た一種の有機体たるを否定する能は
ざるべし。但し、他の有機体と社會との著しき差異は、彼にありては其重要
なる機關例へば胃、若くは腦の如きを除去するときは、直ちに死滅を免る

社會は有機體以
上の進化

能はずと雖も之にありては然らず斯る場合に遭遇するときは直ちに他の機關に従事したる部分代りて其缺陷を補ひ間もなく其變動を回復すること及び彼にありては其生命は一個の生活體に限らるれども是にありては悠久に永續せらるゝことは是なり是故に社會を以て單に有機體なるのみならず有機體以上の進化なりとなせるものあり。

参考要書——ギンゲンクス氏「社會學第一編第一章(遠藤隆吉氏譯)」「フエアマンクス氏「社會學第一章(十時彌氏譯)」「岸本能夫氏「社會學」」「浮田和民氏「社會學講義」」「セント氏「心理學概論」第四部第二十一章(元長博士及中島泰氏譯)」「遠藤隆吉氏「現今社會學」」「ハルケマン氏「社會的教育學」第三章(熊谷五郎氏譯)」「社會の生理(社會學雜誌第一號)」「樋口秀雄氏「社會力に就て」(哲學雜誌第一八〇號)」「大章の分も學問同じければ奇く

第二十四章 社會の分業生活地論

第一節 社會の各種活動

微細なる吾人の一生活も非常に多端なる影響の中に遂げられつゝあることは之を本書の卷頭に於て觀察したる所其中自然界現象の影響は粗

ぼ之を觀察し終りて社會現象に移り而して社會其物の概觀を經過して茲に到れり乃ち吾人は社會は非常に複雑なる現象が相依り相應じ相反撥し相吸引し依つて以て生存し繁榮しさて其結果が直接に吾人の生活に及ぼすことを知れり或者は實業家となりて社會生存の直接の需用品を生産し或者は官吏となりて國の政務に與り或者は學者となりて專攻の學術を以て社會に貢獻し又た或者は教育者となりて社會組織の基礎的人物を陶冶せんとし或は軍人に或は僧侶に或は資本家に或は勞役者に各々其長する所を以て社會に供し其足らざる所を社會より享受し斯くて相據り相助け戮力協同以て個人も社會も與に生存し共に繁榮す此等特殊の業務に従事するものは其職能を同じうし又た利害を等しうする點に於て相一致して茲に社會の特殊の部類を爲し其各部類は互ひに相對峙して共同生活をなすと共に生存競争をなし而して其各部類の内にも多くの小部類生じ其各部類間將た其中の各個人の間には又夫々共同生活と生存競争とが並び行はる是等を社會全體の上より觀察する

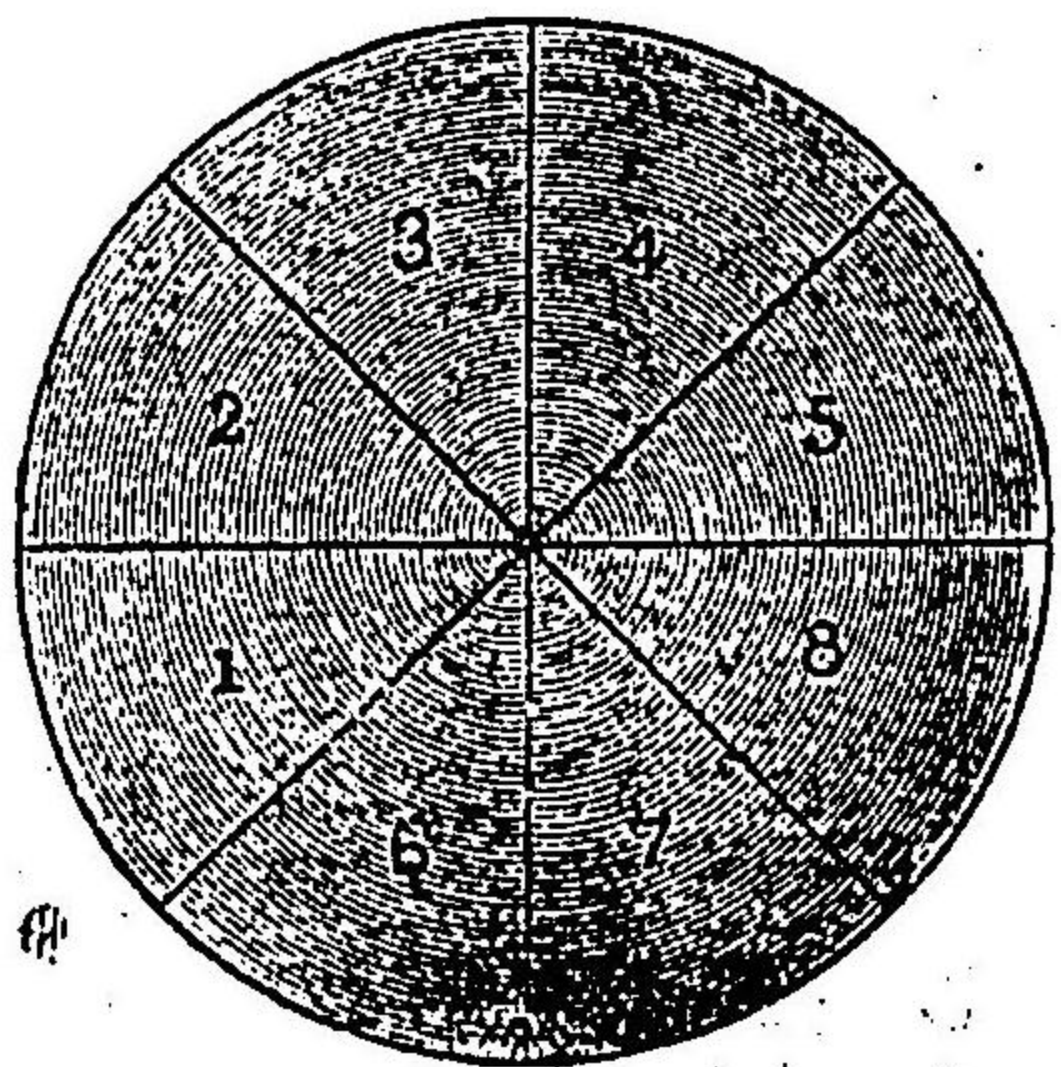
- 社會活動の彙報
第七十一圖
社會の分業生活を表はす
- 1 經濟社會
 - 2 政治社會
 - 3 宗教社會
 - 4 學術社會
 - 5 美術社會
 - 6 道德社會
 - 7 教育社會
 - 8 娛樂社會

社會活動の生起

ときは社會生活の機關と云ふべきものにして、社會は此等の調和したる活動によりて生存し發達すること恰かも耳目手足内臟腦髓等の諸機關の活動によりて人間が生存し發育するが如し、此等の機關が營む所の社會的活動を彙報すれば大略左の如し。

- 一 實業的活動、或は經濟的活動
- 二 政治的活動、或は統制的活動
- 三 宗教的活動
- 四 學術的活動
- 五 美術的活動
- 六 道德的活動
- 七 教育的活動
- 八 娛樂的活動

斯の如く分類したればとて、此等の各活動は更に非常に分化したる多數の活動を包括したる名稱たるは勿論のことなり、又た以て現在の社會が非常に複雑なる機關の活動と其協力によりて生存し維持せらるゝを知るを得べし、然るに此等の複雑なる活動の起因に遡るに、社會發達の初期よりして、然るに



社會活動分化の家族模型としての家

あらず、又た近來に至りて突如として起りたるものにもあらず、最初の渾沌たる社會が現今のものに發達する間の永き星霜中に於て漸次に分化して、今日の狀態に至りたるものなり、此事實の簡單なるものは吾人か少しく家族の發達を注意するによりて容易に了解するを得べし。

假に一人の男子にて一家を經營したりとせん、是時に在りては洒掃應對、飲食衣服の調製等、家内の整理より屋外の労働まで、一切萬事一人にて労働せざるべからず、然るに人間の精力と時間とは限りあれば、何程の努力を用ふとも、凡ての方面に於て完全なる働きはなす能はず、是に於て常に缺乏、不愉快の生活に満足せざるべからず、此時に當り一婦加はり、二人の家族となるや、忽ち家庭の内政と、屋外の労働との分擔生じ、同時に其主人に對しては獨居の生活に比して頗る責任を加へたりといへ、今や家政に顧慮するを要せざるに至りしかば、從つて長ずる所に其力を専注するを得るが故に、其労働時間、曩時と同一にても、其効果は遙かに優り、依て以て兩人共に稍々進歩したる家庭生活を送るを得べし、而かも此時に於ては未だ婦は一切の家政を引受けて労働せざるべからざるが上に、夫も亦た全く屋内の仕事を顧みざることは能はざるに、婢僕加はるに當ては、更に從來夫婦に於て労働したるが爲に他の事業に其力を充分、延ばす能はざりし仕事、其分擔に歸するに至り、更に進歩した

る、従つて更に愉快なる生活をなすを得べし。斯くて或る程度迄は家族を増すに随つて夫々分業を生じて以て益々完全の生活に至る也。

此等の分業を家族なる社會全體より見れば、其社會の活動たり、機關たり、是れ社會の最も簡單なる形式なりと雖も、他の大なる且つ複雑なる社會と雖も、其發達と其機關の分化する状態とは、毫も異なる所なし。

第二節 實業及政治

實業的活動

實業的生活は社會の物質的需用を充たす所の者にして、人類の衣食住の須要に基きて生じたるもの、政治的活動は社會の外部及び内部よりの抵抗力に對し、社會の生存及び繁榮を圖る所のものなり。蓋し飢寒、濕等の自然力に抵抗して其生存を遂ぐるに缺くべからざる手段たる衣食住を得んとするの活動は個人生活の基礎たると共に、社會生活の基礎たり。されば社會發達の初期に於ては社會の一切の人々は等しく實業に従事せしならん。而して一朝外敵の現はるゝに當りては、各人は等しく其業務を抛棄して之と争鬪したりしならん。然るに人口は次第に増殖し、自己の小部

落が擴張すると共に、敵人の部落も亦た増大し、茲に生存競争は愈々激甚となり、且つ不斷となり、今や寸時も之に對する防禦の武備を解く能はざるに至れり。斯くて社會の生存に反抗する常住不斷の二力が同時に加はりたる譯なれば、勢ひ社會の勢力を兩分して之に當らざるべからず。是に於てか、團體の比較的羸弱なるものは、内に在りて、產業に従事し、強壯なる者は外に出て、其敵に當る。現今の徵兵選抜制度は此事實を表はすものにして、是れ實業的活動と政治的活動との分化せる所以なり。唯だ此實業的活動の確然たる分化は、奴隸を使用するに至れる時に在るが如し。蓋し生存競争場裏の勝者たる武人は、其捕虜が從順にして其身に附着せるものよりも夥しき食糧を生ずるを知るときは、之を殺さずして其使役に従はしむ。是れ奴隸の因て生ずる所にして、其使用が一たび普く行はるゝに及んでや、其主人たる武人共は衣食の顧慮を要せずして他の活動に其力を行ふの餘暇を得るが故に、爰に眞正なる人間社會の複雑なる經緯發生するに至る。されば是實に實業界なる一大制度の發起點にして、又た

人間文化の起發點たるなり

然りと雖も此時代にありては未だ各個人或は各小社會は唯だ其得る所の食物を食ひ其織る所の衣服を着るに止りて未だ交易なるもの始まらざるが故其生産物に價值と云ふものなく従つて富と云ふものもなければ顯かに特別の社會の實業的活動を現出するに至らざりしが物の生産者と共に直接の消費者との間に交易作用なるもの起り來るに及んで始めて真正に實業的活動現はれ之に應じて實業的機關生じかくて更に三個の作用の區別すべきものあるに至れり生産流通及び消費是れなり此等の作用の區別について及び其れと地との關係については更に章を分ちて論述する所あらん

倉廩満ちて榮辱を知り衣食足りて禮節を知る(管子)とは能く實業的活動と自餘の社會的活動との關係を言ひ表はしたる語なり人間が此世に生存するに當りては衣食住の根據を離れて何等の活動をも爲すこと能はず吾人が知能的道德的及び宗教的等の高尚なる精神活動をなし得るは

工業活動の種類

實業的活動と其他の社會活動との關係

唯々缺亡の窘迫飢餓恐怖に對して保護せらるゝの安心ある時にあるのみ是故に他の社會的活動の性質及び其發達の程度は此活動の進否によりて決定せらる經濟的活動は社會の真正なる基礎なりと謂ふを得べし若しも社會國家が此基礎的經濟的活動或は機關を等閑に附して政治軍備教育等の機關の擴張を圖らんか唯々破産あるのみ近來我邦の社會が實力養成に其意を注くに至りたるは即ち此關係を自覺したるなり實に社會國家に於ける一切の政策は悉く富國政策の基礎の上に置かれざるべからず然れども獨り實業機關のみの發達によりて社會は發達し得べからざるは論を俟ざる所なり

政治的活動

社會の政治的活動の分化したる所以も右に記するが如く内外の兩須要より生ぜしか故に此必要を満足せしめ社會をして生存繁榮せしめんが爲には勢ひ二様の方面に向つて活動せざるべからず是に於て政治的活動は二様の方向に分る第一には政治的團體全體に對する保護の必要に應ずる活動即ち他の政治的團體の侵入攻撃に備ふることに第二には團體

の内部の種族、其物の保護の必要に應ずる活動、即ち個人的権利の認識並に禁制的法律の發布及び執行是れにして、要するに外部に對する社會の強力、即ち國威の發揚、(二)内部に對する全體の統一、(三)是なり、斯くして發達したる政治的活動は内部の統一、全く完成したる上は生存競争場裏に於て外部の他の政治的團體と對抗するの必要上より國力の涵養、(三)に其力を注ぐに至り、茲に社會の他の活動に干渉し、此等の活動の均一、整理、獎勵、制退等の活動を生ずるに至れり、近來の國家が産業の獎勵、教育の普及等を其職能の一として活動するに至れるは即ち是なり、社會の政治的活動が他の社會活動に密接の關係あるや論なし、一方に政治的活動は實業的活動の基礎の上にあると共に、實業的活動も亦た政治活動の結果たる社會の安固を離れて存立すること能はず、清韓等の政治的活動の不充分より生ずる社會の動搖常なきに當りて産業の發達せん様なきは其著しき例證なり、然るに政治的活動は所謂政治家の手腕を俟つて始めて現はるものなれば、人物養成の基礎たる道德、教育、科學、宗教等の活動を離れて

は充分なる能はず、然れば社會の政治的活動は他の社會的活動の悉皆より來る成果にして、此等のものが、融合する、燒點なりと思惟することを得、又た他の種々なる活動を整理し、調和し、統一するものと云ふを得べし、政治と地との關係については尙ほ章を更めて觀察せん。

第三節 宗教及其地

僧侶及宗教家なる一部の團體が社會に割居して其の職務を分擔し、國家社會は各人の信仰に其權力を侵入する能はずと雖も其信仰の表はれたる行爲には干渉することを得るを觀れば、他の諸活動と等しく社會の活動と觀るは毫も不可なし、宗教が個人の精神界に偉大の影響あるを觀れば、其が他の活動に重大の關係あるや明けし。

今世界に於ける重なる宗教と地との關係を觀るに

種類	弘布地	起源地	信徒
佛	小乘教 亞細亞の東南部(暹羅、緬甸、安南、セロン等) 大乘教 亞細亞の東北部(支那、朝鮮、日本)	印度	四億八千萬
回教	亞細亞の中部及び西部(亞刺比亞、波斯、土耳其等) 阿弗利加の北部、歐羅巴の東部(土耳其等)	亞刺比亞	二億三百萬

耶蘇教

希臘教 東部歐羅巴(スラヴ民族)
天主教 南部歐羅巴(ラテン民族)
新教 西北歐羅巴北部亞米利加(ピューリタン民族)

小亞細亞 四億八百萬

此外に印度に婆羅門教あり支那には儒教并に道教あり波斯に波斯教拜火教あり歐洲に耶蘇教の先驅たる猶太教あり此等諸種の宗教中回教婆羅門教波斯教猶太教を除くの他は皆な我が國に渡來し就中佛教最も古く從つて多くの宗派に分れ加るに我が國には固有の神教と多くの迷信教ありしかば此等は雜然相交錯し以て各々生存競争をなすに似たり是に由て之を觀れば宗教の各種類と地との間に一種の關係あるものゝ如し是れ果して必然の關係に依て然るか如何なる宗教は如何なる地方に蔓延すべしとの一定の法則のあるか否かの問題は未だ吾人の智識の及ばざる所なれども吾人の卑近に觀察し得べき我が邦の各宗派將た各宗教の地理的分布を生じたるは各派各宗の性質と地との關係よりは寧ろ主として布教に従事したる高僧將た傳教者の徳望に歸依せる結果なるが如ければ世界の宗教の地理的分布も亦た畧ぼ同様に解すべきか

我邦の宗教

信仰の高卑と地

信仰の厚薄と地

信仰の高卑は同一宗派の内にも無数の階級ありて殆んど心意發達の程度と一致するが如ければ人種階級の分布によりて大概を推知するを得。信仰の厚薄にも地的影響あるが如きもこの影響は産業より間接に來るもの重きが如ければ次第に述べざるを便となす。

第四節 學術及其と地

學術的活動と他の活動

學者が其専攻の學術を以て社會に立ち所謂學者社會なるものを形成し以て社會進歩の教導をなすによりて此活動を認むるを得べし人間の知能的交際の須要及び眞理を知らんとするの欲望は實に此活動を起せる激因なり此活動の結果は眞理を研究する機關眞理を普及するの機關即ち學校講壇印刷物等となりて表はる學術的活動が實業的活動の基礎の上に立たざるべからざると共に實業的活動が又た學術的活動と相俟つて而して後に進歩發達するものなることは近來の英國と獨逸との工業の優劣を觀るによりて瞭かに認識せらる獨逸の商工業が近來遽かに勃興し將に英國を壓せんとするに驚き英人は其原因を攻究するに由りて其産業的活動が科學の力と相俟てる結果なるを發見し之に對抗せんが爲には一方に益々産業的活動を奨励すると共に大に實業と科學とを

學術と地

智能的生活の分量的分布

密接せしめざるべからずとは彼等の驚醒せる所なりと、自餘の活動との關係亦た推知するに足る。

社會の學術的活動と地理とが如何なる關係を有するか、即ち智能的交渉の地的分布如何は更に左の二ツの問題に分解せらる。

一、學術發達の程度は地方の異なるによりて差異あるか、別言すれば、地と人の智能的生活との分量的關係は如何。

二、如何なる種類の學術は如何なる地方に發達するか、反言すれば、地と人の智能的生活との性質的關係は如何。

一吾人は既に第三章に於て地表の各部分は人類の精神界に一樣に多方的影響をなすと共に其特質によりて其各方面の影響に、分量的差異あることを開陳したり、今又た地球上に散布せらるゝ各種類の間に人類の智識發達の程度の階級あるを觀るときは(第三十二章第四節)學術の發達の程度は地方を異にするによりて差異あること、即ち人類の智能的生活の分量的分布の存在するを認容するに難からざるべし、果して然らば如何なる

氣候上

人種上

地勢上

地方は發達し、如何なる地方は發達せざるか。

一、是を氣候上より見れば、學術の發展は温帶地方に多く、兩極帯に少く、温帶地方の中にては、古代には熱帯に近き暖帶地方に先づ開け、近事は寒帯に近き冷帶地方に最も盛に、而して漸次に高温地方より低温地方に學術隆盛點が移動せる徑跡あるを信するを得。

二、是を人種の上より見れば、高加索人種の占據せる歐洲及び北米に於て所謂新學術は其光輝を放ち、而して我が邦に傳はり、日本人は漸次に之を收得し盡さんとしつゝあり、然るに此兩種以外の人種の占據せる地方は其進歩今猶ほ甚だ遅々たり、古代にあつては支那は特質と程度とに於て世界に於ける最も早き隆盛部の一なりき、而して其結果は四方に傳はり我が邦にも傳はり又た現在の泰西の學術の淵源をなすもの少なからざりしかども、其後長歲月の間萎靡として毫も振はず。

三、是を地勢上より見れば、泰西の學術は小複雜に富める希臘羅馬に其端を開き、漸次に大複雜の地方に推移し、今は北歐に其中心點を置き、而して

學術の源

て遂に北米合衆國に移轉せんとするの傾向あり然るに東洋の學術は概ね地勢の複雑の少き地方に發して他に移動し以て泰西の學術の原素ともなりしのみにて右の地勢上の關係は見出す能はざるが如し吾人の此の見解にして過誤なからんか次に來るもの其理由如何の問題なるが吾人は以上各章に於ける隨時の觀察を總合することによりて大凡左の如く概論するも失當にあらざるを信ぜんとす

蓋し現今の發達せる社會の精神的財産たる秩序整然たる科學も其發達の徑路を遡れば多くは是れ祖先傳來の智識及び彼の古へ無意識の間に發生し其の必用なるが故に遺存せし風俗習慣等の傳説の次第に總合せられ解釋せられて出來したるものにしてギンゲンクス氏に従へば其傳説の全體は分れて三班となる第一次的傳説は經濟的即ち利用の傳説裁判的即ち默許の傳説政治的即ち同盟人質及び順從の傳説にして皆な觸覺すべき世界に於ける經驗より得たる記録なり第二次的傳説は靈的若くは個人的美的宗教的にして觸覺すべからざる世界の印象の記録なり第

學術が極端氣候帯に進まざる所以

三次的傳説は神學的形而上學的科學的にして概念的思考に由り得たる記録なり之を要するに人類が其生存を完うせんが爲めに天然人爲の諸力に對して抵抗する活動は最も原始的にして即ち利用的經濟的のみならず政治的の傳説も畢竟利用的に他ならず及び禦害的裁判的活動は其の進化したるものと云ふを得の傳説は之により生ぜしなり然り而して人類が其等の抵抗力に相對して其存在を完うすることは他の高等なる心的活動の基礎たるなり果して然らば吾人は茲までの論及に依つて以上の原因の大半を了解するに難からざるべし

一學術的活動が寒熱兩帶地方に起らざるは一は衣食の絶えざる窮乏が人類をして之に抵抗せんとするの以上に其心力を用ふる能はざらしめ一は衣食の資料餘りに多くして彼等の生存に對して抵抗する自然力が弱少なるが爲め人をして一切の進歩的活動をなすの要なからしむるに因るなり

二學術の隆盛點が暖帶地方に先づ起りて忽ち停滯するはその熱帯に比

する所以

して些かの生存に對する抵抗力あるは、之が爲めに人をして夫れだけ活動を必要ならしむるに足り、其抵抗力の弱きは他の低温にして天然物の少なき地方に比すれば、早く衣食以外に其心力を活動せしむるに足り、而かも其抵抗力の餘りに少きは、彼等をして間もなく熱帯地方と同様の状態に陥らしむるに足ればなり。

七四

學術が地勢上の移動する所以

三、泰西の學術隆盛點が地勢の複雑、即ち氣岸線の延長の度に反對の進動をなすは、自然界の複雑なる現象を未だ了解する能はざる未開の人類に對して、其現象が餘りに壯大にして且つ其顯はるゝ勢力が非常に偉大なるときは、先づ彼等の膽力を奪ひ、彼等をして驚愕、恐怖、ひたすら之に懼伏し、崇拜して其庇護に頼らしむるものなるに、小複雑の部分は先づ住民の研究的心力を併呑することなく、且つ其多様の現象は彼等をしてよく多方の刺戟に反應し得る様、其感覺機關を徐々に發達せしむるに足るを以てなり。

東洋が西洋に比し

四、東洋の西洋に比して學術進歩遅々たりしは、それが或る事情によりて一

て進歩せざる所以

局部の學術に偏せしと、社會組織に基づく階級的壓制政体に主として歸因すと解すべきものゝ如し、謂ふ所の一局部に偏せしとは自然現象に對する交渉に基づく自然科学の方面に向はずして殆んど全く人事界現象に對する人倫道德の方面に向ひ、其内にありても或る階級が他の階級の多數を無爲に治むる方便として採用せる或る一派の學派に偏するに餘儀なくせられて、毫も自由研究の精神の發揚の機會なかりしを云ふなり、階級的壓制政体の生ぜし所以、從ひて自由研究の抑壓せられし所以は、又た主として其地勢に基づくとは後章に於て述べんとする所の如ければ、此點より間接に地的影響と見做すべきなり。

學術の性質的分布

學術の性質的分布は之を明細に認むべきものなしと雖も、第十章の批評に於て志賀重昂氏の説かれし所、古代の希臘人及び獨逸人は哲學に羅馬人は法律學に、佛蘭西人は數學に、英吉利人は工學に長せるが如しとは、キヒネル氏も云ひし所にして、歴々史上に顯はるゝ所、此等によるも、其の地理事情によりて多少學術の質的分布をなすを首肯するを得べし、其理

由に就ても志賀氏が既に平原に於て何故に數學及び天文學が發達するかは説明せられし所、佛蘭西人が數學に長ずる所以も、同一の理由に基くものならん。羅馬人が法律學に長せしが如きは、恐らくは其國が非常の膨脹をせしより之が統御の必要より生じたる必然の結果と見るべきか。我が邦に於て他の諸科學に比して疾く醫學が進歩の域に達したるが如きは、其が他の諸科學の如く研究上の壓制なかりしによるものならん。

第五節 道德教育及其等と地

道德的活動

社會の道德的活動は社會の道義心が著しく墮落し、社會が腐敗に傾けるに當り之が救済の爲めに幾多の事業が起るによりて著しく現はる。社會の此方面の生活は其初め一定の規則に於て表現せられ、社會的團體の特徵たる慣例より分化したるものなり。道德活動の他諸活動に對する關係は、次項の教育的活動に於て觀るを便とす。何となれば是れ新教育の最も主要なる内容をなせばなり。

教育的活動

からざる根本的條件として、競うて教育の獎勵をなし、今や教育的活動の進否は直ちに角逐場裏の優劣勝敗を決する所以と認識せらるゝに至れり。社會の教育的活動が獨立の機關に表はれ、真正に分化したるは近世の事に屬し、以前は學術的活動と共に僧侶の職務に隸屬し、全く宗教的活動の中に包含せられ、後に科學的活動が獨立の活動となるや、永く學者の職務の中に從屬し、當時に於て教育とは單に讀書算術を教ふるものとして解せられたりしが、現今に於ては學者の活動と全く其領域を異にし、獨立機關によりて營まらるべきものと認識せらるゝに至り、其活動の範圍は單に科學に留らず、各方面に擴大せられたり、而して教育的活動が眞に社會の總ての活動の根本にして、社會全體の盛衰に影響あることの實例は、普佛戰爭の結果によりて現はされたるか如し。ナポレオン第一の征討以來屢々佛國の屈辱を受けたりし普國が、一朝其強敵に勝ちて會稽の耻を雪ぎたりしや、戰勝の榮譽を殆んど其双肩に負うて凱旋したりしモルトウ將軍が却て其功績を國民教育に歸したるは、眞に能く教育的活動と自

教育と他の活動

餘の社會的活動との關係を遠觀したるものと云ふべし。教育的機關の發達によりて佛軍を敗りたる獨逸は同一の方法によりて今や英國との實業上の競争に勝利を得んとしつゝあるは夙に識者の警告せる所なり。不識日清戦争に勝ちたる本邦の社會は果して如何に教育的活動を認識したりしや、實業的活動が社會の基礎たるには相違なし。若し生存競争をして從來形式ならしめば社會は此基礎にのみ安んじて可なり。されど近來の生存競争の形式は從來とは全く一變し、精力のみを以てせずして却て心力を以てせらるゝに至れるに由ては實業的活動を更に深き根柢の上に置かざるべからざるに至れり。是れ即ち近來の國家社會が教育的活動に重きを置く所以なり。蓋し教育的活動の他の社會的活動に對する關係は、他の各の社會的活動が自餘の活動に對すると等しきが上に總ての活動に直接關係ある人物を養成する點に於て發達せる社會の眞正の基礎たればなり。次に吾人は今ま道德の程度と地理との關係を精確に論ずべき材料を有せず。然れども近來公德問題喧しくなりて、西洋諸國に於ては

遙かに公德の發達せるに我が邦及び東洋諸國に於ては未だ發達せずとの慨歎を頻りに耳にする所によれば其發達に多少の地理的相異あるもの、如し果して然らば道德の程度にも地理的影響の存するか、吾人は歸つて都會の人民と田舎の人民とを比較するに於て、畧ぼ同様の差等の存するを見るなり。是によりて之を考ふれば吾人は以上の差等は之を直接の地理的影響と見るよりは、生存競争の程度の差等による間接の影響と見るの適當なるを信ず。即ち我が邦人の公德に缺乏せる所ありとせば、それは人種固有の差等にはあらずして、生存競争程度の未だ彼地の如く爾く激甚ならざるの結果と解すべきなり。想ふに彼の土の下民、小兒に至るまで公園の樹木を折るとなしといふが如きも、畢竟生存競争の激甚の結果僅少の庭園と雖も容易に所有する能はず。従つて公園を大切にすることの情が容易に庭園を私有し得べき地方に比して濃厚となりしものなるべし。教育活動の如きも所謂普通教育なるものは近來の國際間の生存競争に對して敗劣を免るゝ最良の手段として各國各社會の認容する所なるが

故生存競争の程度の激甚なる所は従つて教育活動も盛隆に、教育の進歩せる所は即ち生存競争場裏に於ける優勝者を生ずる所なり、其生存競争程度の地理的分布は尙ほ別に觀察する所あらん。

第六節 美術、娛樂及其等と地

社會の美術的活

人間の美に對する愉快の情は、やがて其れの嗜好、及び感覺の形式に於て理想を表現せんとするの欲望、及び美なる物體を造らんとするの欲望を生じ、此等の欲望は人をして社會的活動に至らしめ、よつて社會の美的活動を生ず。此活動は繪畫、彫刻、音樂、及文學の各方面に顯はる。此活動が他諸活動の結果にして、又其影響が社會の各方面に及ぼすことは古の希臘の美的教育の結果によりても明かなり。美的活動は社會の理想を高尙ならしむるによりて社會の精神的文明を進せしむるものなれども、或る程度を超ゆるときは社會をして文弱に流れしめ、優柔ならしむるなり。社會の娛樂的活動と名くべきものは、實際社會、演劇、遊戯、遊藝等の諸方面に於て現はる。美術的活動と其領域を異にする所は、之に當る機關の目的

社會娛樂的活動

と社會の認識とによつて生ずるもの、如し娛樂的活動によりて社會の精神上に直接に良効果を生ずる者あれども、其目的は全く社會の娛樂に投するにありて之が多く偶然の結果に過ぎざれば、此點に於て他の教育及び美術的活動と劃然區別あるなり。此活動も他の活動と等しく社會の需用に應じて自然に發達するものなれば、社會の生活に對して全く無用のものとは見るべからず。然れども此活動の隆盛の或る程度を超過するに於ては人心を墮落せしむるが故に社會の衰頹を來たすものなり。

美術と地

美術も地方を異にするに従ひて作者の精神を異にし、従つて製作の材料も製作風も、將た模様、彩色等にも夫々差異あるとは明かなる所、從て斯道の専門家にありては假令巧みに他の地方の製作を摸したるものにて一見、直に其何處の産なるを判別するに難からずして、其地方の關係の如何に深厚なるかは驚くべきものなりといへり。蓋し美術は主として外界の美的影響の材料を以て其理想に從て新形式に表顯するものなれば、其四圍の風物に全然支配せらるべきは當然のこと、云ふべし。唯だ吾人は

未だ之によりて如何なる地方には如何なる美術の表現せらるゝかといふ一定の法則を抽象するを得るの域に達せざれば茲には美術は全く其四圍の風土に影響せらるゝと云ふのみに満足せざるべからず。美術心の程度に就ても現に我が邦は世界の美術國と稱せらるゝ程に他國に比して特段の發達をなし、を見るも其多少土地との間に關係あるは掩ふべからざる所ならん。想ふに自然界の變化に富み風景の多様多趣なる所は他の風物單調にして殺風景なる所に比すれば暗々の裏に絶えず住民の感官を刺戟して發展せしめ鋭敏ならしめて茲に到りたるものと解すべきか。美術家が如何なる所に集合するかは又た一顧の値ひある問題なるべし。吾人は此を解する上に於て美術の起因について少しく考察するの要あり。小杉文學博士が日本固有の美術の起源についての説は蓋し總ての美術に通用せらるゝものならん。其大意に曰く我邦上古の美術品は進獻により神前或は皇室に奉獻せんが爲めに清淨なる心を以て畢生の力を注ぎしが故によく絶世の名作を得たり。然るに中世以後の美

術は玩賞にあり貴族富裕者の玩賞を得んが爲めに製作せる者なるが故自ら其品位下れりと此のことは同時に美術の集まる場所を指示せるものなり。即ち吾人は之により上古の美術が宗教と密接の關係を有し従つて美術家が宮殿神社佛閣の所在地に集まるを知る而して次第に玩賞に基づくに至りしと雖も今尙ほ此關係は絶ゆることなし。近代の美術は貴族富裕者の居を占むる都會に集まる蓋し其需用と共に製作品の鑑識は其等の人々を除きては容易に他に要求する能はざる所なればなり。此關係は其他の娛樂機關に於ても亦た同じ。

第七節 社會の階級

社會を分析的に觀察するときは以上の分業の外所謂階級別なる者ありて其活動を異にするを觀るべし。古昔は前節の社會的活動の區別の幾部は直に此階級と一致したりしなり。本邦に於て維新迄は士農工商の種別ありて此順序は直に上下貴賤の階級なりしこと及び印度に於ては今尙ほ(一)ブラミン(貴族)(二)クシャトリア(兵族)(三)ウアイスマ(農工者)(四)スドラ(商賈)

(五) パトリヤ奴隷の確然たる階級を存することの如きは即ち是なり是れ
 古代の人種間に於ける優勝劣敗の結果、自然に發生したるものなりしと
 雖も、人間の心意が發達して、社會の生存と其活動とを自覺するに至りて
 自ら消滅するは必然の勢なり、蓋し各種の社會活動は等しく自餘の活動
 及び全軀の生活に缺くべからざる一機關にして、其間に何等の階級的等
 差あるべからざること前陳の如ければなり、然れば現今の開明國に於て
 は全く四民平等、其間に毫も上下の區別なきに至れり、従つて社會の娛樂
 的活動を分擔する機關(例へば俳優の如き)も若し其人々にして眞に社會
 の活動を認識し、社會に於ける自己の責任を自覺して其業務に従事する
 ならば、社會は夫等に對して相當の尊敬を拂ふべきは至當の事にして、自
 ら然せらるべきものなり、然るに是等の人衆が今も猶ほ幾分か劣等の階
 級にあるものとして社會に卑下せらるゝ所以のものは古代の餘習と其
 等の品性が概ね劣等にして社會に對して爲す所の結果は殆んど害毒を
 流すに止まればなり。

社會的階級

斯の如く社會の人為的階級は、全く打破せられたり、と雖も、社會の生存競
 争は依然として存するのみならず、社會の發達と共に益々激甚となる。然
 るに社會の各人は生來平等なる精力と心力とを有せず、又た平等なる生
 長をなす者にあらざれば、社會より生成する結果を各個人は平等に享受
 すること能はず、如何なる事情の結合することあるも、凡ての人が平等な
 る財産を以て生活を營む能はず、又た凡ての人が其後平等なる收得ある
 能はざるは避くべからざる所なり、是に於てか、社會の人民間には、更に他
 の階級分化す、ギンヂングス氏は之を左の四階級に區別し、眞正なる社會的
 階級となせり。

一、社會的階級 同類意識が著しく發達し、且つ善良なる社會的關係に積極的
 貢獻し得る個人より成る。此階級は彼の補成する者、忠告する者、指導する者、私
 利の觀念なく計畫する者、慈悲なるもの、身を殺して仁を爲す者、其他輿論を提
 起する者より成る。此階級なき社會は君主政治にせよ、平民政治にせよ、又た富
 むにせよ、貧するにせよ、決して後來發達の見込なく、且つ生存競争場面に於て
 必ず失敗すべきものなり。

非社會的階級

偽社會的階級

實社會的階級

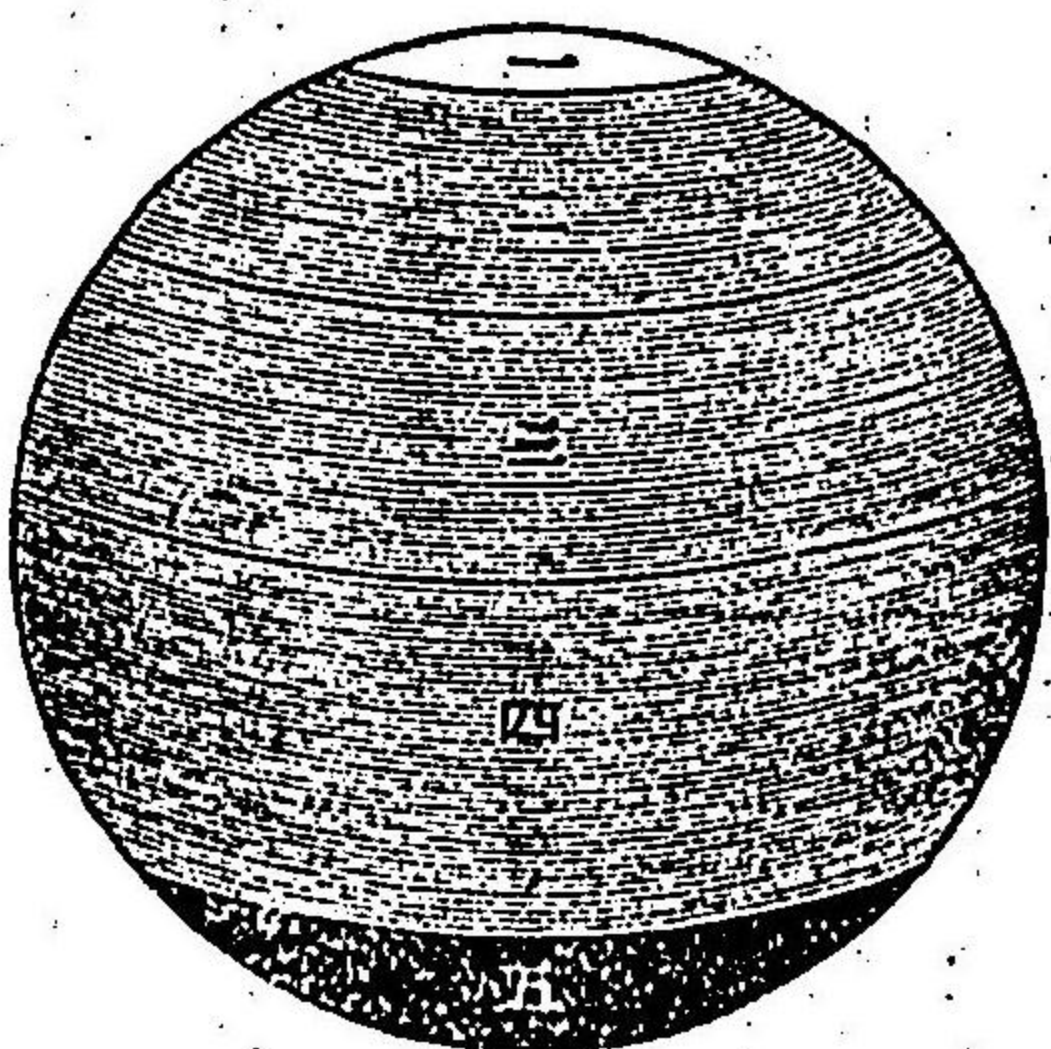
二、非社會的階級 狹猛なる個人主義に拘泥する人より成る。彼等の有する同類意識は標準的なり。然れども其發達や中正ならず。彼等は意思を興ふることなく、又た之を受くることもなく、只だ私居せんことを之れ求む。是れ實に古代的社會階級にして、他の三社會階級は直接間接皆之より發生せる者なり。一切の社會的德義、一切の社會的弊風及び惡事は皆此中に胚胎す。此階級は其れ自身に於ては中性にして、社會的生活の潮流に由り、後來或は上に投げられ、或は下に墜ちんと待ちつゝあるものなり。

三、偽社會的階級 生來の貧人及び習慣的なる貧人より成る。彼等の同類意識は衰微に墮せり。彼等は社會的階級の性質を偽はり、不幸の犧牲なりとして、容體ふるものなり。實際彼等は非社會的の德義すら且つ之を有せず。寄生者として生活せんことを之れ望む。

四、實社會的階級 遠傳的及び習慣的の惡人より成る。同類意識は殆んど消滅に歸し、一切社會及び樣式を嫌惡す。彼等は社會的德義を託言することすら之なく、卻て公然社會的階級に反抗せんことを望まず。彼等は權利利益を支持する爲め社會階級の協力することを望まず。彼等の受けたる若くは受けんと想像せらるる害を個人的に復讐せむと欲す。

と分析し得て、明快の感ありと雖も、之を吾人が現に隸屬して生活する此實際の事實に適應せむには、尙ほ細密に且つ適確なる區別の要あるを感

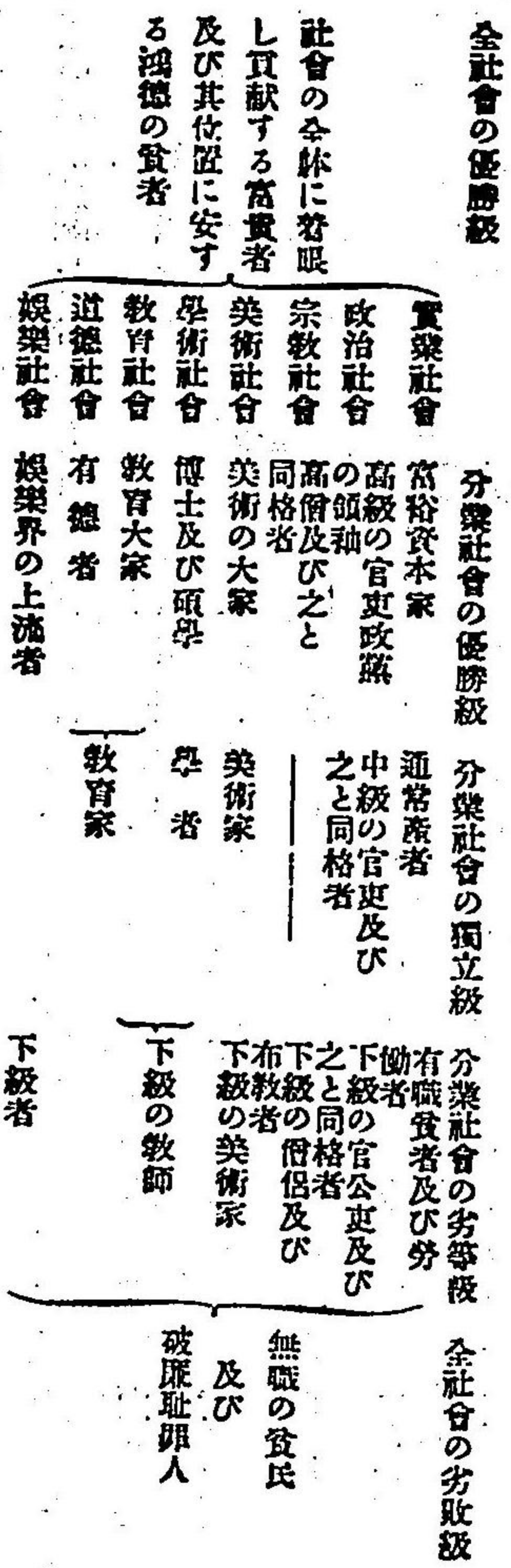
第七十二圖
社會階級を示す



ず、請ふ少しく蛇足を加へんか。

社會は全體として生存競争場裏に生活するのみならず、其生活の爲に種々の活動機關を分化し、此活動機關は全體に隸屬すると共に隸屬の範圍内に於て獨立の社會として其成員たる各個人間に生存競争行はるゝことは前節に觀察したるが如し。然るに各個人の心身の能力は個々異なること、又た前陳の如くなれば、是に於て各種の活動社會内に於て、更に之を表現する個人間に階級發生せり。世間一般に通用せらるゝ上流、中流、下流、或は上層、中層、下層並に必要に應じては最上層、最下層等を加る此等の呼稱は畧ぼ其階級を表示する者の如し。吾人は此區分を第七十二圖の如くに想像するを得。之を前節の區別と對照するに、其各方面に於ける活動を假りに縱的區分とすれば、之れは横的區分と見做すを得べし。而して全般の社會は此兩區別

を結合したる第七十三圖の如しと想像するを得べし。唯だ一般呼稱の階級の名稱は各階級の特徴を表はすに於て缺くる所あれば吾人は姑らく之に充つるに左の名稱を以てして他日完全なる名稱の出づるを俟たんとす。即ち(一)全社會の優勝級(二)分業社會の優勝級(三)分業社會の獨立級(四)分業社會の劣等級(五)全社會の劣等級是なり。是等の中(二)(三)(四)は社會の各種活動の獨立方面たる各分業社會の種類に従つて特殊の名稱あり。

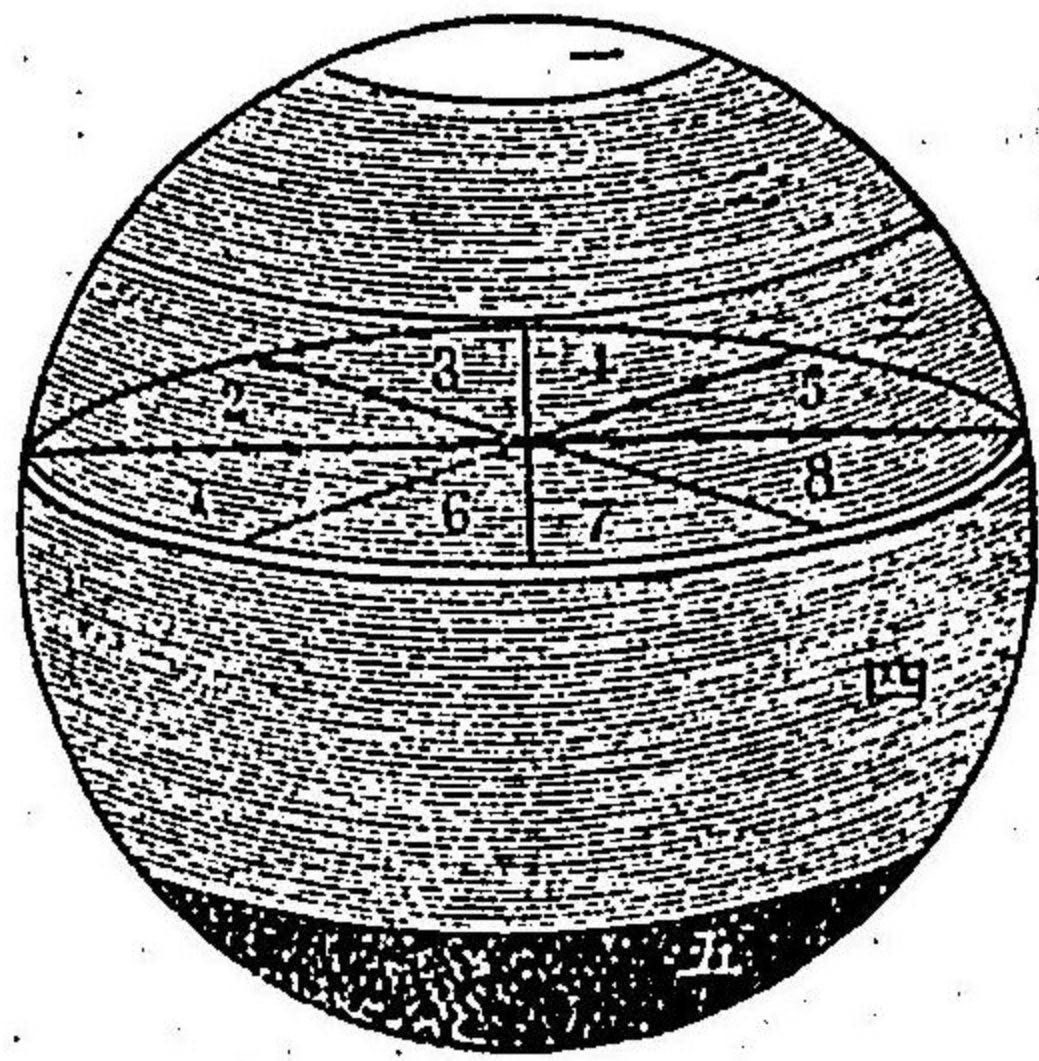


此の如く區別すと雖も其間に更に無數の小區別あるは論なし。而して各個人は右の各分業社會の總てに於ける階級にあるものなれども、其中主なる職業として従事するものに就て區別せるのみ。

分業社會の優勝階級

第七十三圖 社會の組み立てを表はす

各分業社會の優勝階級は、其社會内に於ける生存競争の優勝者にして、其社會内のみ勢力を有し、相當の尊敬を博するものにて他の分業社會に向つては其勢力なきものを云ふ。



蓋し此等の人々は其社會に於ける生存競争の優勝者として其執るの事業に對して多くの知識を有するを以て同一社會内の多くの敗劣者の榮望を博するを得れども未だ全社會の尊敬を享くるに至らざるなり。時として道徳の普通の人間以下にありても尙ほ此の階級に其位置を占むるものあり、娛樂社會、實業社會の如き比較的徳義の要素多からざる會社にありては餘り異まれざるも往々政治社會にあるのみならず、道徳の要件を離れて起つ能はざる宗教社會、教育社會に尙ほ權謀策略等の要素によりて生存競争の勝利者となり、此の階級に至るものあり。然かも社會制裁の未だ發達せざる時代に於ける一時の現象にして眞正なる生存競争の最勝者たるには道徳要素の或る程度以上に在るを要するが如し。而して此程度の最下限は各社會の種類に従つて差等あり。現今にては教育界、宗教界最も高く、政治、學術、美術の

全社會の優勝階級

階級之に亞き、實業界更に亞き、娛樂界最も低し。道徳の或點に缺くる所あるが爲に高等程度に分業社會を排斥せられたる者が若し他の以下の程度の社會に要する或る知能を有すれば僅に其社會に立て生存競争をなすを得るに反して劣等程度の或社會を道徳の點に於て排斥せられたるものが如何に他の知能に於て完備すとも上級程度の社會に立つ能はざるにより明に認むるを得べし。例へば教育社會を排斥せられたるものが實業社會に入るに當りては毫も差支なきのみならず、大に頭角を顯はすものあるに反して、徳義の點に於て實業社會を排斥せられたるものか才學を有するも教育社會に入る能はざるが如きはなり。此理によりて道徳要素の程度の低き種類の社會程、不善の人民を増加す、要するに此階級に於ては各種社會内に於ける生存競争の優勝者なりと謂ふを得べし。彼の近來往々催さるゝ所謂紳士紳商連の宴會に參集する人士の如きは此階級を喪するに近きものならん。政治家あり、文學者あり、富裕者あり、有力者あり、其他往々各種社會の代表者を網羅する其中には品性の點に於て如何はしき人物あるも、皆な金力と權力若くは勢力を以て其席に列するを得るなり。従つて眞の徳行家は却て斯る雜駁なる席に列するを潔とせず。蓋し自ら上階級にあればなり。

各種社會の優勝者たる資格に道徳の或る程度以上に達すれば所謂最上の階級に入る。茲に稱する最上階級とは前種の階級が其各種類の社會内

分業社會の劣等階級

に於てのみ尊敬を受くるに比して、全般の社會に尊敬を享くる一の階級あるを云ふなり。前記ギンゲン氏の社會的階級は直ちに此階級となすを得べし。氏の所謂善良なる社會的關係に積極的貢獻をなし、補成する者、忠告する者、指導する者、私利の觀察なく計畫する者、慈悲ある者、身を殺して仁を爲す者、輿論を喚起する者、要するに道徳社會に於て最上級及び之に近きものたるは此階級の資格たるなり。此階級は非凡の貴富者か、然らざれば赤貧者を以て成る。而かも其赤貧者は貧に安んじ貧を厭はず、又た富貴を羨まず、従つて貴富者たらんとも欲せず。何れにしても劇甚なる生存競争に逢ひ、失敗又た失敗、而かも之が爲に毫も其元氣沮喪するなく、其益々勇氣を増し、遂に最終の勝利を得て、然るものなり。天下後世の所謂英雄豪傑として崇拜せらるる偉人は多く之に屬せり。所謂下層階級は各分業社會の内、其位置を占むるも常に生存競争の劣等者として、其社會の下位に居る者、貧苦は此階級の總ての個人に隨伴して、離れず、然れど未だ劣敗者として其屬する分業社會を脱出せざるべからざるの非運に至ら

獨立の階級

ずれば一度機會を得れば上の階級に進むを得るの自信と希望とを有す。ギンヂングス氏の所謂偽社會的階級と粗ぼ一致すと雖も全く一致すると云ふ能はず。此階級中には狹隘なる個人主義に拘泥し、恩惠を受くる少き代りに、社會に恩惠を與ふることなく、只私居せんことを之れ求むるもの多しとは雖も、然かも全然とは云ふ能はず。中には自身相應に他人の爲めに周旋をなし、若しも彼をして多少の餘力あらしめば大に社會の爲めに貢獻するならんと惜まるゝ部類も亦た乏しからず。此點に於て稍々異なる所とするのみ。

世に中流社會と呼はるゝ獨立の階級は、右の上層級と下層級との間の無數の段階に位置を占むる所のものより成り、其中にギンヂングス氏の偽社會的階級に一致する個人はあれども中には相應に社會の爲めに多少の貢獻をなすものあること下層階級よりも多し。立憲政体及び民主政体の社會に於ては社會の中堅たり。米國大統領ルーズヴェルト氏が其社會改良意見に於て、社會改良事業の種類は甚だ多く凡ての人により凡ての

社會の劣敗階級

方面に向つて企てられ得べしと雖も、近來概して社會の獨立の階級の人士によりて有効なる改良事業行はるゝに至れりと云ひて、次の定義を下したるものは最も吾人の此種類の性質を表はすに適當なるものなり。曰く、**獨立の階級の人士とは、貧困に陥らず、若くは、不道德に流れず、文明進歩の壓力に壓倒せられずして、社會の進歩と共に進み、つゝある人士なり。**最下層の階級は、生存競争の敗北者として、前節の分業社會の何れにも其位置を占むる能はずして、全く無職の域に墜落したるものを云ふ。

其失敗の原因に就ては、或は生來若くは不時の事情によりて体力の缺乏を來したるものありむ。或は遺傳的若くは習慣的に智力、道徳に缺陷を來したる者ありむ。或は生來の貧人もありむ。而して墮落前の位置を尋ねれば、或は實業社會より來りたるものありむ。或は現今の社會に排斥せらるゝ所謂壯士、無類の徒と稱せらるゝものゝ如き政治社會、學術社會より出て尙ほ實業界に多少の望みなきにあらざるも、生障りの才學と之に依頼する心に伴ふ怠惰とは眞面目の労働に従事するを得しめずして、殊更に浮浪徒食の域に來りしものありむ。或は粗ぼ同一の理由によりて宗教社會、美術社會より入り來るものありむ。總して教育社會よりは此社會に位置を占むるに當りての道徳の最低度の高き

七三四
丈け墮落して直ちに此階級に來るものは少なき事なるに、反して實業社會の勞働者及び娛樂社會の或部分よりは最も多きなり。而して眞正の實業社會は、いは非常の天災等にかからざる限りは墮落し來らざるものなり。何となれば最も生活、根據の確實にして危險少く且つ最も容易に生活の方法を得ること多ければなり。

之をギンゲンクス氏の分類に對照すれば其偽社會的階級及び背社會的階級の兩者を合併したるものに一致す。蓋し既に生活の根據を失ひたる極端なる貧民と悪人とは實際に於て區別し難し。管に人別に於て區別し難きのみならず同一の個人に就ても又た實際に區別する能はず、何となれば餓死を免れんが爲に何時罪惡を冒すかを保すべからざればなり。貧民は既に社會的階級の性質を偽はり不幸の犠牲なりとして容體より、非社會的の德義すら且つ之を有せず寄生者として生活せんことを是れ望む。之れを要するに自己の非運をかこつての情より、社會に對して怨恨を有す。之れ悪人の社會に反抗せんと欲すると相距る遠からざるなり。

論し來つてギンゲンクス氏の分類に對照するに氏の分類は同類意識の厚薄

を以て區分したるものなれば全く道德の程度を以て區分したるものと一致したるものと見做すべきに、中に貧民の一階級を挿入したるが爲に分類に錯雜の感あるのみならず、實際の現社會に適應し能はざるに至れり。是れ敢て聊か蛇足を加へたる所以にして、要は實際社會に行はるゝ分類と一致せんことを期し、少くとも近接せんことを期したるにあり。

茲に社會の階級を元説したる所以が、其配合は直ちに全體社會の生活に大影響を及ぼし、且つ其配合の原因には幾多の地的關係存すればなり。

第八節 各階級の配合と社會及地

右の各階級の配合、即ち各種階級の員數の割合及び階級の數は社會を異にするに従ひて、一樣ならず、或は下級の方に於て其割合に多きものあるべく、或は中流階級の割合に多きを占むるものあるべく、又た或る者は上下の階級の等差の左程遠隔せざるに、或る者は上下階級非常に遠隔したるものあるべし。往年東京時事新報社が全國に於ける五十萬圓以上の資産者を調査したることありしが、當時我が邦に於ける其額以上の者は僅かに四百八十餘人に過ぎざりき。固より不精確のものならんも、以て巨富

歐米と我邦との貧富の隔絶

者の多からぬを知るに足る。之を米國に於ける巨富者が其收入遙かに一國の歳入をも超過するは敢て珍とするに足らず。若し夫れ五十萬圓位の資産者に至りては勝つて算ふべからざるに比すれば殆んど比ぶべくもあらず。但し歐米の諸國に於ては一方に極富者のある代りに他方には非常なる極貧者あるに比して我邦にては一方に巨富者少き代りに極貧者の數も亦た少く之を歐米人の目よりすれば日本には歐洲に見るが如き眞の赤貧民は殆んどなしといふも可なりとは彼土の人の驚歎する所なりといふ。

歐米諸國と我邦との此對比の差異は等しく我邦と未開國との間に於ても將た都會と田舎との間に於ても之を認むるを得べし。都會は大きくなればなる程一方に巨萬の財産を有するあれば他方には眞に赤貧洗ふが如き其日暮しの裏棚住ヒあるが如きは割合に貧富の隔絶せざる田舎に於て見るべからざる所此の事實は又た産物の豐饒にして其所屬の地域内の産物により殆んど生計を立つるを得る地方と元來土地瘠薄にして

都會と田舎との貧富

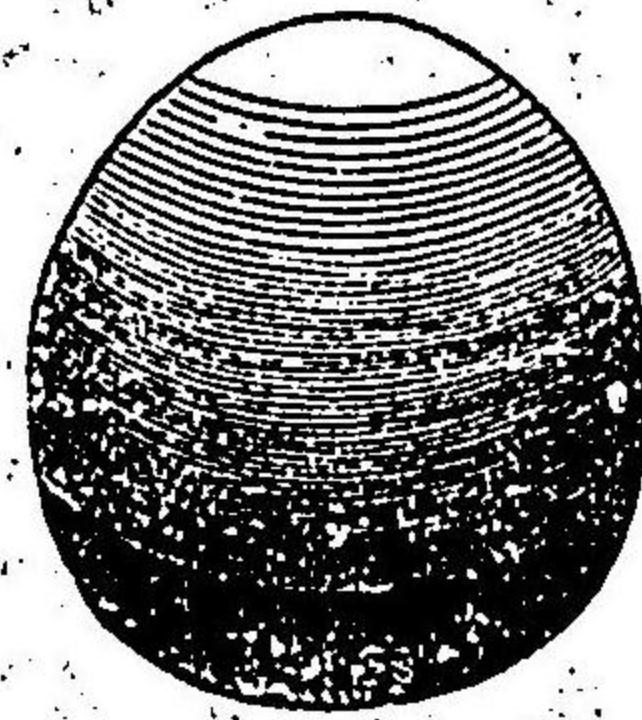
豐饒地と瘠薄地との貧富

遠く他地方に出稼させれば生計を營む能はざる地方との間に於ても認むるを得べし。

豈唯だ貧富の懸隔距離の差のみならんや智識の程度に於ても道德の程度に於ても將た其他の分業内の階級に於ても亦た右の對比せる各社會に於て差異を認むるを得べし。室鳩巢の梧窓漫筆拾遺中に漢土は大國ゆゑ大河の魚の大なるに同じく我が邦は小國故小川の魚の小なるに同じくして漢土は善人にも格別大善人ある故に惡人も唐の則天の如き無類の大惡人を生ず我が邦には大善人もなき故に大惡人も生ぜず云々の語あるは又右の差異の一證とするを得要するに小國は大國に比し未開國は開明國に比し田舎は都會に比し天惠の多き地方は天惠の少き地方に比して共に社會の階級の兩端間の距離に甚たし懸隔なく平均に近し。是れ歐米に於て疾に貧富隔絶に依りて生じたる社會問題が我が國に於て漸く近來に至りて其聲を高めたる所以是れ都會に於て貧民救済及び罪人防禦の問題が切迫するに反し田舎に於ては其の聲なき所以なり。

下膨積圓的社會

第七十四圖
下膨積圓的社會
を示す

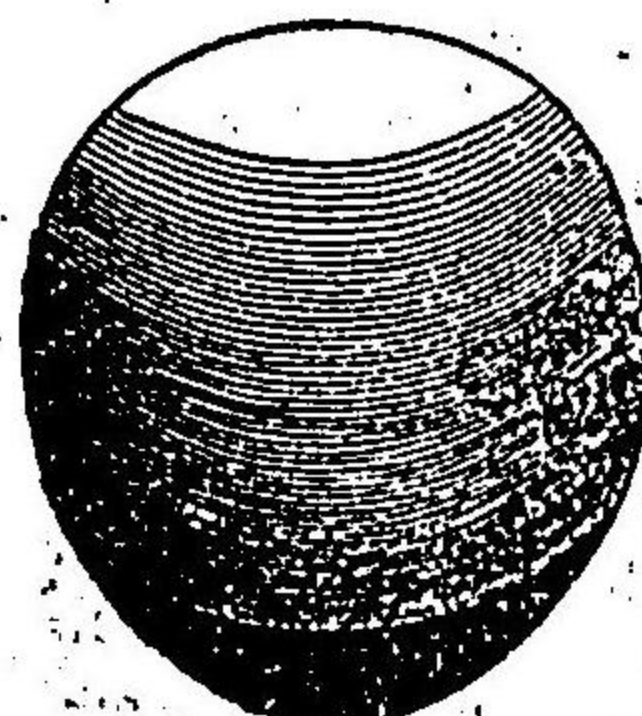


是に由て之を觀れば吾人は社會の階級の配合の上より社會を正圓的社會と稱圓的社會とに區別するを得べし上下の階級の懸隔せるものは他の種類に對比すれば積圓形を成すと想像し得べければなり尙ほ少しく觀察の歩を進むるときは積圓的社會中にも其階級の配合の度合に従ひ右の平常狀態の社會の外左の二種に區別せらるべきを認む

一 下膨積圓的社會 世亂れ小人跋扈するがゆゑに正人君子容れられずして次第に壓迫し然らざれば機軸迫害によりて滅亡し之に代はるに奸邪佞人獨り社會の要部に翹翔し從つて賂賄賄托並び行はれ正義正道は次第に地を拂はんとするものにして歴史上滅亡の社會及び現在に於て滅亡に近づきつゝある國家は皆な是れなりされば之を衰亡的社會ともいふ(第七十四圖)

上膨積圓的社會

第七十五圖
上膨積圓的社會
を示す



二 上膨積圓的社會 社會の階級の配合は全く前種と反對に社會の上層の階級割合に多く一般に徳義の程度進歩せるのみならず凡ての分業社會の内にも夫々社會を指導すべき人物顯はれ小人奸惡の徒輩なきにあらざれども社會の制裁に恐れて其頭を擡ぐる能はず從つて生氣躍々隆興の氣運に向ふものは是れなりされば前に對して又た之を一に隆興的社會ともいふ(第七十五圖)

第七十五圖
上膨積圓的社會
を示す
日本の社會の階級
配合

翻つて日本現在の國家并に其内に在る各種の分業的社會及び自治團體をなす部分的社會に之を適用せば果して何れに屬すべきか一般社會の上に立つて之を指導すべき所謂全社會の優勝階級即ちギ氏の社會的階級は果して如何にして請托賂賄は滔々社會の暗面に汎濫し居るはあらざるか然るに之が救濟の必要により生じたる宗教社會は今如何なる活動をかなす縮衣圓顛の無氣力徒らに死屍に引導を渡すを以て其分とする尙ほ忍ぶべし社會の根柢を形ち造るの任務を帯びて分化したる教育社會の近時に至つては誰れか慨ぜざる能はんや固より吾人は徒らに末世を澆季として非觀すべからざるを知る然れども社會教化の源泉の涸渴せんとするに對して豈に無神經なるを得んや

階級配合と地

社會階級の配合上に區別ありとすれば其地理的關係は如何吾人は以上の各種の地的分布を考察するによりて其原因を二に生存競争程度之差

異に歸すと解するを得べし、大國都會天恵の少き地方は即ち生存競争の激烈なるが爲に優者は益勝ち劣者は益敗れ、以て其間の懸隔は益甚だしくなるなり、吾人は尙ほ上膨楕圓的の社會と下膨楕圓的の社會との生ずる主なる原因も亦た生存競争の程度によりて解するを得べし、階級の特權によりて人爲的に自由の生存競争を妨げたる社會は即ち下膨楕圓形の衰亡的社會となることは現に吾人が近隣の憐むべき國家に於て目撃する所而して上膨楕圓の隆興的社會が自由の生存競争の結果より生ずるとは、之れ史上に於て將た歐米の現在に於て見る所なればなり、生存競争の程度の地理的分布については、後章に於て觀察する所あらん。

第二十五章 産業地論上

第一節 消費せんとする欲望と地

社會の經濟的生活は交易生産消費の三方面に向つて發展せることは既に述べしが如し、交易も生産も人類の財貨を得て之を消費せんとする欲

人生の欲望の三種

望に基づくものなれば、人類の貨物に對する欲望及び其程度を知るは經濟的活動の形式を了解するに於て要用なることなり。社會の發達に従ひ、人智の進むに従つて、無限に種類と分量とを増加すべき人類の欲望を分類することは固より至難のことなり。されば經濟學者は種々の觀察點より之れを分類すれども、未だ總てを満足せしむるものなきが如し、今最も事宜に合へる分類なりとせらるる、ロッシェル氏の說に従ふに、人生の欲望に三種あり、第一自然的欲望、第二應分的欲望、及び第三奢侈的欲望、是れなり。固より人類の身心兩生活の總ての欲望を網羅し能はざるものなれば、學者間頗る異論ありと雖も、吾人は之を人類の財貨に對する欲望と解するに於て畧ほ満足し得べきか、さて之を實際に各個人、各種族の欲望の種類及程度の分類に適用するに當り、第一種と第二種、第二種と第三種との間に如何して限界を立つべきかは到底能はざる所なれども、大體一般に通ずる所よりすれば、其種類及び分量は人類の境遇によりて異なる、第一に著しきは文化の程度の相異に基く差異なり、世界の人種

文化の程度と欲望

氣候と欲望

第十九章第二節
以下參照

地上の位置と欲望

も、其中の各個人も文化發達の一系の階級内に在ることは第二十二章に於て觀察せる所此各階級は即ち欲望の種類と程度との相異を表するものにして其程度上進するに従ひて欲望を満足せしむる需用品の數と量とは増加す同一の文化の階級の人類として第二に著しきは氣候の相異に基べく差異なり温熱の過多なる熱帯と其過少なる寒帯と其中庸を得ると共に季節によりて寒暑の變化も多き温帯との人類の間に欲望を満足せしむべき需用品の種類及び分量の差異あることは第十九章の記述によりても容易に首肯し得べき所

右の兩條件を考察外に置くとして第三には地上の位置に従ひて産物の異なるに基つく差異なり此中には山と平地海濱の内陸高地と低地交通の便利なる所と不便なる所等の相異に基く欲望の差異を含む之を要するに人類の生活上の欲望は地上の位置異なるに従ひ其種類に於ても數量に於ても頗る差異あり而して以上の差異は常に各個人の生存上に於てのみならず社會の生活上に於ても之れあるなり

第二節 生産業の種類

生産の要素

生産の意義

人間の需用に應ずべき貨物の生産に必要な條件を天然力と人力とに區別するを得べし經濟學者は土地勞力及び資本の三者を區別すと雖も資本なるものは天然力と人力との協合に成れる結果の蓄積なれば吾人の論述せんとする生産の範圍としては二要素に包括せしむるを得べし其意味に於ける天然力に就ては既に前篇各章に於て之を論じたれば茲には人力即ち人類社會の生産的活動を觀察するを以て足れりとす生産的活動とは云もの、科學上の意味に於ては人間は毫も有形物體を創成する力を有せず通常吾人が有形物體を生産せりと思ふものも少しく熟察するときは唯々人間に對する要用の度を増加し創成したるに留まり反言すれば實利を生産したるのみ

彼の工人が一片の木材を以て机を造り或は農夫が數月間の労働によりて穀物の若干を收穫し樵夫が林間より木材を伐採し出す等の場合の如きは一見物を生産したるが如けれども實は唯だ物の形態を造出し變化し若くは天然に存在する物の配置を變じて從來無用なりしいものを有用ならしめ左程入用

七四四
ならざりしものを一層有用ならしめたるに過ぎず。要するに物の價値を増加したるのみか。

七四五
されば人間が貨物を生産せりと云ふは唯實利を生産したるのみ之を貨物其物より云へば價値を生したるのみなるを觀るべく其意味に於て生産なる語が制限せらるゝと共に單に貨物流通の媒介活動たる商業も人間の實利を生産するの點に於て農工業と何等の差なきを觀るべし。現時の開明社會の實相を觀察すれば其無數の欲望を満足せんとして起れる人間の生産活動も亦た多様無數なるが中に、一時的のものと永續的のものとの二種あるを觀るべし其活動を連續して生計を營み個人として生命を維持すると共に社會に一部の貢獻なすものを營業と云ふ。農業工業商業等は其一部の細分なり而して此等直接に貨物の價値の増加に關係する業務を總稱して産業と云ふなり。産業界を更に精査するときは社會全體が幾多社會的活動即ち分業によりて生活をなす如く其中に又た多數の分業が行はれつゝあるなり。蓋し分業は社會の各個人が各々其

營業

分業の生ずる所以

産業の種類

能力に長短あると相互間に物品の交換を行ふ力を有するとによりて起り交換を行ふ力は交通機關の發達に伴ふ者なれば交通機關の發達せざりし古へに於て若くは現今に於ても僻遠の田舎にありては自己の需用する多種の物品を得んとするに當り人口稠密の地方に於けるが如く、一々職工の助けを藉ると能はずして悉く之を各自に於て作出するの業に従事せざるべからず其不便と困難とは今日の吾人が不知不識の間に自己の便利を得つゝあるの考を以てしては恐くは想像し得べからざる所也。然るに今や交通機關の發達は殆ど絶頂に近づき市場の區域は世界に擴張せられ世界にある者は殆ど吾人の需用を満たし得べからざる者なきに至りたれば従つて業務は益々細分せられ以て現今の盛況を呈するに至れり而して將來益々多からんとす。然れば茲に此無數の職業を分類するとは亦た頗る困難のとなりと雖も吾人が現在に影響を受けつゝある直接生産に關する重要な業務を區別すれば左の如し。

一 獵業 此等は造化の生産せる天然物の配置を變じて人生に接近

二、漁業
 三、鑛業
 四、農業
 五、林業
 六、牧畜業
 七、製造業
 八、工業
 九、商業
 十、運輸業

せしめ、且つ其形態に僅かの變化を與へて實利を創出するものなれば、天然産物採取業と云ふを得。

此等は造化の生産力に參與し、之を補助し、之を利用して、貨物を生産するものなれば、粗品の生産業と云ふを得。

天然物の形態を變化し、若しくは其性質を變じ、以て實利を生ずるものなれば、粗品加工業と云ふを得。

此等は貨物の位置を變じ、不用なるものを有用ならしむるものなれば、貨物の轉移業と云ふを得。

以上は各々現社會の經濟的活動中の一形式として行はるゝ所のものにして、其中には更に多數の分業を包括するや論を俟たず、又た以上各種の業務中には其發生の時期に前後の別あれば、之を原始的産業（六以上）と分業的産業（七以下）とに彙類するを得。

第三節 産業の發達

右の如く現在の社會は複雑多種なる業務に分れ、それ等は互に相協合して經濟社會の繁榮を來しつゝあるものなるが、更に此等の業務の起源に溯りて考ふれば、實に遼遠なる歲月を費して漸次に發達したるものにして、

て其間には數多の階級あり、然るに産業發達の此諸段階の特徵とすべきは生産の方法及び器具の發達にあれば、此れによりて區別するを便とす。人類初期の産業的活動は、其食物を得る主要なる方法に従つて、分つと普通なり。

一、狩獵及漁時代

人類最古の時代の生活は現今各地に於て發見せらるゝ石器により之を追跡するを得べし。此等器具發展の形跡によつて太古時代の代に於ける産業的形式は、最初は手と石と杖とによつて獲らるべき食物に依從し、後に金屬使用の發見したるよりは、弓矢を擲へて森林に入り禽獸を狩り、或は河海に臨み魚介を漁り、以て其生命を繋げる者なるを知る。此産業の形式時代に於ては、僅かに自然の存在物を獲得するに留まるが故に、此獲物によりて支持せられ得べき人々は固より僅少なからざるべからず、然らざれば、恰かも水族の集來するが如く、一時的の群集ならざるべからず。然れば、一種の團體が發育して、大なる場合に於ては、其成員たる者は、勢ひ食物を求めて、遠く分散せざるべからず。而かも尙ほ食料の不斷の供給は得べからず。斯の如く、漂泊的且つ不安心なる社會に於ては、社會的活動の高等なる形式は固より發生せらるべきにあらす。

二、遊牧時代

狩獵を以て生活せる人民が、智識稍々進むに伴ひ、欲望の範圍擴張

するに當り、狩獵の天然供給は絶えず間歇して食物の缺乏は益々加はり、往々數日も飢餓を忍ばざるを得ざるにより、其生活の幸福少きを悟ると共に牛羊山羊豚若くは鷄等の動物を馴致するを知らず、是に於いて食物供給は狩獵によりて獲し者よりは一層豊富に且つ確實なるを解し、遂に至り、牧畜の民となる。此民の生命を托すべき根本は其飼養する家畜にあり、彼等の行く所に常に隨伴せざるべからず。然るに飼草の一所にある分量は自ら制限あれば、之を喰ひ盡すに從つて、常に遷居せざるべからず、水草を逐うて遷居する遊牧の民を生ずる所以なり。

牧畜時代に於ては、曩の狩獵の時代に比すれば廣大にして且恒久なる社會的生活に進みたることは前陳の如し、而かも同時に水草を逐うて遷居するを要する所謂遊牧の生活は自ら文化の高等なる發展を障礙して或る程度以上に進歩するを得ざらしむ。

獵族が動物を飼畜することを發見して、游牧民に轉ずるの経路は、漁族に對しては自ら養魚時代に遷らざるべからざるが如き、彼の牧場に比すべき池沼河湖等の養魚場に至る所に得べからざるが如き、且つ魚族の養殖法は、決して牧畜の如く簡單なるものにあらずれば、彼の既に多少發達したる産業生活を營むに至りたるに、是は永く原始的の生活に甘んせざるべからず、されど後來航海者となり、商業を營むに至るものは、此漁族にあるなり。

三、農業時代 遊牧の民若くは河岸の漁民が、食糧に適する穀物を發見し、土地を耕す術と器具とを得るときは、遂に一際して農業の民と化す。然れども自然物を採獲して安居したる人民が、其事業を轉ずるとの非常に困難なる生存競争の必迫にあらずれば、能はざることは既に記せし所、又た現に吾人が北海道のアイヌ種族にて經驗するが如く、なれば其間には多年の足踏を経過したるものなることを推知するを得。既に農業生活に轉ずるや、同一面積の土地は、牧場に委する時に比すれば遙に夥しき人口を支持するを得るを以て、從來の漁獵的不安なる生活は、遂に安全なる定住生活となり、其根據たる堅牢なる住家は、建築せられ、住家の集合せる村落起り、斯くて將來發達すべき高尚なる社會の基礎成る。人類既に定住生活に移り、鞏固なる生活根據を得たり。是に於てか其生産物を現在の欲望を満足するのみに用ひずして、未來の缺乏に備ふる貯蓄の念起り、財産の制度生ず。然るに諸人は各其天性と力量とを異にし、又た各所に散居せる各部落は自ら其境遇を異にすれば、其生産亦た自ら異ならず、能はず。是に於て人は自己の需用する所のものを總て自ら生産することには満足せずして、自ら生産せし物と他の生産せし物とを交換して互に便利を受くるに至る。然れども此時代に於て生産者と消費者即ち他の生産者とが互に其物品と物品とを交換するのみ。故に此時代を亦た物品交換時代といふ。

四、商業時代 物品交換が次第に煩繁となるに從つて、其部度一々繁雜なる計算

貨幣

商人

業時代

工人起る

をなすことの繁に堪へざるに至る。此時に當り或る特種の商品ありて他の者よりは屬々交換せられ、各人は其物品を以てすれば、己の欲する何物をも購求し得るを看破するときは、其物品は即ち選ばれて貨物交換の媒介物となる。牡牛、穀物、鹽、鐵、銅、珠、介殼等は此時代に於て諸種の未開人民の交換に媒介物となりしものにして、即ち一種の貨幣なり。然るに媒介物として最も便利なるものは其容積に比して高き價值を有し、何人にも好まるゝものならざるべからざれば、貨幣自ら進化して現今の如き資金圖に至りたるなり。貨幣一たび現はるゝや、並に初めて生産者と消費者との間に商人なる階級發達す。斯くて從來生産者と消費者との交渉はなくなりて、生産の物品を商人に賣却し商人より之を買ひ取るに至る。故に此時期を商業時代と名づく。

五、工業時代 商業既に發達し、一方に之れに伴ふ交通機關亦次第に發達し、貨物の交換容易となり、其交換の範圍擴張せられ、其種類又た多くなるや、並に至りて人は自ら要する物品を必ず自ら生産するに及ばずして、社會の必要に應ずべき一種の物品のみを生産すれば、之れを以て容易に其生活に要する他の物品を自由に得るに至り、之に至りて粗品に加工をなすを以て營業とする一階級の人民生ず。即ち工業の起源にして工業時代の名ある所以なり。然り而して社會の進歩此時代に至って、貨幣は益々改良せられ、便利となると共に汎く使用せられ、其結果資本は茲に集積せられ、之に於て各地に商工業の中心點

七五〇

生産器具及び生産動力によりての區別

生し、社會は益々隆盛となる。

尙ほ生産活動に要する器具の原料及び其器具を動かす原動力によりて産業の發達を區別すれば左の如し。

- 一、石器時代
- 二、土器時代
- 三、銅器時代 鐵器具の時代 人力使用の時期
- 四、鐵器時代 動物力使用の時期 風力水力使用の時期 蒸氣力使用の時期 電氣力使用の時期

第四節 職業の身心に及ぼす影響

生存競争と自然淘汰との理法は人類が職業に従事する上に於て最も嚴酷に行はるゝが故に特殊の業務は之に適當したる體質と品性とを有する特殊の人間によりて從事せらるゝものなりと雖も、職業が又た之に従事する人間の體質と品性とに及ぼす影響は、尠ならず、實に人間の品性は周圍の自然界、人事界の百般の關係によりて鎔鑄淘汰せらるゝものにして、就中、職業の及ぼす影響は、直接に、不斷に、永續的なるか故に、最も顯著

なるものなり、吾人は以下此關係を觀察するに當りて、前に郷土概観に於て分解したるものを此章に適用して左の各項と職業との關係を觀るを便とす。

一、**身軀** 發育(全身) 強弱

二、**精神** 智の發達 情の發達 意の發達

身軀發育の全身に於けると局部に於けるとは、自ら其從事する勞働の種類によりて異なるべく、其強弱は勞働の程度及び場所によりて差異を生すべく、心意に於ける智識の發達は從事する場所の範圍即ち觀察する限界の廣狹によりて相違あるべく、以上の心身の影響に加ふるに、交際界の範圍と生存競争の行はるゝ緩嚴とによりて生ずべし、今や文化の發達と共に教育制度の完備交通機關の發達印刷術の發達等右の事情により自然に生すべき身心發達の不平均を補ふべき人爲の方法備はりたれば職業と人間品性との特殊の關係は次第に減少すべしと雖も、而かも多數の固定したる職業の間には、自ら特殊の發達は免かれざるべければ之を概

職業と身軀

商業と身軀

原始産業と身軀
身軀局部發育と工業

觀するは、敢て無益の事にあらざるのみか、各地方の地人の關係を研究するに當り應用すべき重要な事なりと信ず。

職業と身軀 身軀の發育と其強弱に就きて觀れば、商業と其他の農、工、林、鑛等の職業との間には、反對の現象あり、後者は常に間斷なき勞働に從事するが故に、自ら身軀の發育に便あれども、商業にありて常に所謂算盤を手にするの外、時に非常なる煩勞に從事することありと雖も、多くは商機を制するに奔走するを以て、身軀を勞するよりは寧ろ心意を勞するに傾く、是故に軀格の點に於ては概して商人は最も劣等の位置にあり、特に會社組織の大商業に従事するものは最も甚だしとす、略ぼ同様の理由により官吏其他之に類似の勤勞に服するものも亦た同じ。

農、工、林、鑛及び之に類似したる力學的職業中に就きて、更に全身と局部との發育上より見れば、工人と他の農、林、鑛業者との間に著しき差異を觀る工業には古風の手工業にても、猶ほ全身の筋肉を平均に用ふべきもの少きに、近來は分業益々盛なるに従ひ益々局部を僱用すべき勞働に服する

を施さるるべからず。

商業と感情

商業と世界主義

商業と宗教

故に自ら其智力は淺薄に流れ断片に失し秩序正しく統一せられず故に多くは直覺的に物事を判断して推究的に考察すること少なく多く自分及び他人の失敗と成功との場合を記憶して直ちに之に倣はんとするも其何故に然るかの原理を推究するもの少し要するに商民の智力は廣く他方面に涉れど淺薄となり具體的に箇々の經驗を有すれども普遍的抽象の原理を探究せざるなり斯く商業家の智力の範圍は甚だ廣濶なり而して其交際する所の範圍亦た廣し此に於て其感情も自ら快濶となり平和的となり以て海外人と交際の先鞭者となる然れども其弊や沉愛となり輕薄となるを免れず自ら世界的主義に傾く近來各國帝國主義の政策を採用するによりて保護貿易主義となりしを以て貿易商も國家に依頼せざれば殆んど外國市場に商權を振ふ能はざるに至りたるより國家主義の傾向を生じたるも然も之を他の農工諸業者に比すれば其間に尙ほ著しき溝渠の存するを認むべし又た商人は其思想廣く其注目する所主として人事社會の活動なれば他の諸業者に比すれば早く卑俗の迷信よ

農業と心意
農民と智力

り解脱するに至ると雖も此心は纏て拜金主義に流れ高尚なる信念を缺如するに至る然らずとも傳來の宗教を捨て他の新教に變ずるは其敢て難ずる所にあらず此事は本邦耶蘇教の侵入點か長崎横濱及び札幌の三點にありと云ふ事實の大部分を説明するに足る。
●農業と心意 ●農民の智力は幾多の點に於て商民と正反對を表はす商人は自己一生一代に於て家産に屢々浮沈あるに反して農民は祖先傳來の田畑を相續すると共に其耕作方法迄も相續し唯々其方法に違背せざらんことを惟れ恐るゝが故に自ら數十年前の舊法を其儘襲用して毫も改良進歩に心を用ひざるが如しされば此點に於ては彼等は其兩親より受けたる其強健なる身軀を全く器械的に一定の摸型に適用するのみにして殆んど智力を用ひずといふも誣言にあらざるべく而して彼等の日々心力を用ふる所のもの唯々日々の天氣豫報と其一年間の農作物の豊凶に關する陽氣の占ヒのみ而して之を判定するに當りても彼等が祖先以來の傳説と自己の數十年間の零碎なる經驗と奇怪なる俚言時として

荒誕無稽なる迷信とを適用して皮相の解釋を以て満足するに過ぎず、從ひて具體的智識に満足するの點に於て敢て商人と異なるなし。農民は僅かに一反二畝(我邦耕地の配當額)乃至數町反歩の田畑を其生活根據となし、偶々附近の小市街に出て、其收穫物を交易するに過ぎざるもの多ければ、其眼界は自ら狹隘となる。境遇既に然り、之を商民の頻繁急劇の刺戟に忙殺せられんとする程の多忙なる生活に比すれば、恰かも仙境に退隱せるものに等し。是を以て稍もすれば、其神經は痴鈍に傾き、容易に外界の刺戟に感ぜざると共に、一度信じたことは容易に脱却せず、斯くて、其識見固陋となりて、改善進歩に移るに容易ならず、是れ實に農事改良熱心家の屢々歎息する所。農民の眼界既に然り、偏狹なる智力を基礎とす、之に隨伴する感情豈に圓滿多方なる能はんや、然り農民は汎く且つ容易に感動せざる代りに、一度感動するに於ては異常の熱度を以て動く、之に於てか商民の動もすれば薄情輕浮に陥るに比すれば、厚情熱心となる。所謂眞摯朴直等の文字を以て表はすべきものは、是なり。此等の個人の感情が社會に對つ

農業と保守思想

農業と愛心

農業と宗教

て、發動するもの、を愛郷心、愛國心となす。實に鞏固なる獨立國に缺くべからざる深厚なる愛國心は、其基礎は農民にあるなり。然れども、其思想の狹隘なる僅かに自己居住する一郷一郡若くは一州を思ふに過ぎずして、他國との關係を大觀するの暇なきや、自ら偏狹なる町村主義、藩縣主義に傾向し、大利害を大體より打算する國家主義の如きは、頗る進化したる後にあらざれば、起らず。封建割居制度は、實に之に基くものなり。又農民の識見の固陋、而して一度感じたる所は、容易に脱し能はざる所は、即ち迷信の起り易き所。且つや農民は商民が人事の社會現象に關係多きに反して、四時の循環氣候の變化、從つて農作物の豊凶等、直接に造化に關係すること多きを以て、自ら人間以上の無形の勢力を感ずる機會に富み、從つて農民は宗教を信すること、厚し、而して一旦信じたる宗教は、飽くまで之を固守して、改宗するの念なし。是れ新宗派布教者の苦心する所。北陸地方其他の農業地方に佛教が固着して、新宗教たる耶蘇教其他の宗派の侵入し能はざる所以なり。思想及び感情の狭くして強き所之に基く意志亦然り。加之生

存競争も他の諸業よりは激烈に行はれず、是に於て自ら自負尊大、小成に安んじ、商工業者の進取の氣象は保守退嬰の氣象となり、所謂頑固の民となり、是を以て一朝異常の刺戟が其感情に觸れて憤怒を起さしむるときは、茲に猛然厥起して結果の利害得失は彼等の深く慮る所にあらず、斯くて往々竹箒、旗の暴動を演出するなり、然も平時に於ては農民は其收穫物の豊凶多少は悉く人力の得て及ぶべからざる造化の力にして従つて常に造化の箝制に慣るゝことは商工民の比にあらざれば、其氣風は引いて人事の干渉にも非常の壓制に陥らざる限りは、殆んど之れを怪まず、従順以て治者の命に服するを主とす、農民はそれ平和の民乎、農業の生存競争は劇甚ならざるも、絶えざる勤勞にあらざれば、成効する能はず、従つて秋の收穫は半歳の間流汗を以て耕耘したる結果、即ち粒々辛酸を積みたる所夫の商民が三寸の舌頭にて一攫千金の利を貪りたるの比にあらざれば、自ら勤勞の習慣と共に、儉約の氣風を生ず、故に農民の富豪は多くは一生一代の蓄積にあらざるが故に、其身代たるや堅くして容易に崩壞

せず

林業と心意 若し夫れ智識の範圍よりすれば、林業區域は農業地よりは更に狭し、其智力の偏固知るべきのみ、之に基く感情に至りては、朴質眞摯は更に其度を加ふ、宗教との關係亦た推知するに足る、意力に於ては農民に比すれば、稍々獨特の長所を養ふに適せり、蓋し一種の生存競争時に劇烈に行はるればなり、彼等の業務が造化の數十年間養育したる巨喬の樹木を惜氣もなく伐截するに、既に多少の殺伐の氣象を養成するに足るに、彼等は衣食原料の缺乏せる山間にありて、農民の自ら耕し、手づから織りて安穩に衣食するが如き、呑氣なる生活を遂ぐる能はず、加ふるに狩獵は彼等の副業を視るを得べき者なれば、常に武器を携へて走獸と生存競争をなし、往々猛惡なる熊狼等と角逐せざる能はず、然らざるも常に之が備へを怠る能はず、此等の事情は遂に慄悍なる氣象を養ふに足る、偶々傍らに四面寂寥林間の溪水懸つて瀧をなし、水石を打つて自然の琴を彈ずる等の妙趣に幾分か以て其氣象を和らげらるゝことありと雖も、要す